
昔苛めていた幼馴染が勇者になって帰ってきた件なんだが

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔苛めていた幼馴染が勇者になって帰ってきた件なんだが

【Nコード】

N4776T

【作者名】

ワシワシ

【あらすじ】

昔苛めていたもやしっこの幼馴染が勇者になって村に凱旋した。いじめっ子「私ですが、もしかして下克上ですか？　そうですか？　殺されますか？　勘弁してください。というわけで、私は奴の凱旋パレードを遠くから見物して、えらい人は昔のことを水に流してくれるよねと人事のように思っていたんです。そんな時が私にもありました。トントントントン。あ、扉を叩く音だ。売り掛け金の回収か？　業者が納期せつついてるのか？　違いました。奴でした。奴が…来る……来た！　おま、ちょ、なんなの。そんな私の物語。

ちなみにヒロインの中の人は現代日本人です。ヒロインの性格が大変男らしくまた性格も悪いようなので、駄目だなと思ったら回れ右推奨いたします。

元別サイト掲載作品を改定。どっかで見た方すみません。名前が出ないのはわざとだよ。完結しました。息抜き作品です。

勇者の凱旋

勇者が凱旋した。

勇者は自身の生まれ故郷であるところのトンレミ村に、魔王退治の後、骨休めか故郷に錦飾るつもりなのか、この度揚々ご帰還遊ばすとのことで、その一報に、魔王退治の知らせ以上に村中が沸き立っていた。

じいさんもばあさんもおっさんもおばさんもその辺走り回っているガキどもも、ついでに飼い犬からロバまで興奮のるつぽに投げ込まれて、意味もなくうろうろしては立ち止まり、額をつき合わせては「勇者さまが！」と喚いている。

いやはや熱狂だ。

この寒村も寒村で、ぱつとしねー本当に力一杯特徴がないのが特徴の、鄙びてしなびてあれな村であったから、鳶が鷹を云々で、思いもかけぬスターの誕生に村中が鼻息も荒く、トサカに來た雄鳥のように右往左往して、その内心臓発作でも引き起こしそうな勢이었다。

ちったあ落ち着け。

私はその日、商品の売掛金回収するまであと三日をどうやって過ごそうかとないうづくしの懐と空しい相談をしていたところだった。

勇者様？ 知ったことじゃない。勇者といつたって、実は私の幼なじみである。

奴はある日突然出奔して、時々風の便りになんかその辺の中ボス倒したとか、呪われた幽霊城を解き放ったとか、吸血公を灰燼に帰したとか、黒竜を調伏して盟友と認められたとか、大国のお姫様を魔物の手から救ったとか、エルフ族と精霊の女王の祝福を受けたとか、塩の大地に緑を蘇らせたとか、魔將と死闘を繰り広げて勝利をおさめたとか、どのド級クエストの叩き売りだ、うっかり奇跡の

人だ、吟遊詩人も編纂がおつつかねえだろ、おい、というような怒濤の勢いでサーガを紡ぎまくってはまた新たな冒険に出かけたらしいという風聞をこのド田舎まで轟かせていた。

話半分でもマジですか、だ。わけが分からん。

そもそも奴が村を出て行ったのだって、運命の師弟の出会いだの、魔物に襲撃されて村が壊滅しただの（その辺のじじはばどもとガキどもの平和ボケぶりを見る）があつたわけでもなく、そういう宿命とか何か熱いものにいまいち欠ける突然かつあっさりした旅立ちで見送りなんぞ幼なじみ数人（私ともう一人）の大変わびしいものであつた。

もしかして私が奴ののろまな性格に苛つき、ついついどつき回しすぎたせいで、なんか開いちゃいかな的回路がつながってしまつてしまつたのかもしれない。

神の声<コーリング>なんて、9割方本人の思い込みもしくは幻聴だろうし、奴のアーツ！な回路が通つてしまつた結果の出奔であれば、私もまあ、その、ちょっとと思うところがあつて、つまり後ろめたさに見送りをしたのだった。

奴が頭を撫でられた子供のように嬉しそうな顔をするので、私は妙な罪悪感と引き替えに、引きつった笑みで「達者でな」と「生水飲むなよ」の言葉だけを贈つた。

もしかして頭がゆんゆんになつているかもしれない幼なじみに、間違つても「がんばれよ」とは言えなかつた私を許してくれ。まして「死ぬなよ」とは……次の村に辿りつくまでもなくすぐに野垂れ死にしそうな奴に向かつて言えなかつたよ。声かけると、かえつて死亡旗が立ちそうだったんだ。察してくれ。

そんな奴が、今や大陸中にその名を轟かす勇者様におなり遊ばしたというのだから、人生とは分からん。深い、深すぎる。

お前に何があつたんだ。

心底どうでもいいが、多少は気になる。

そついうわけで、どうせ今日は村人総出でお出迎えとあれば商売

にならんしと私も早々に店じまいして、凱旋勇者の見物に出かけたのだった。

近隣の村、都市からも人が集まって、表はけっこう凄い状態になっていた。人が飽和状態だ。宿？ そんな上等なものはこのトンレミ村にはありません。農家が農閑期に兼業で営むことも希なくらいに人の出入りがないからな。むしろ若人が出て行く一方の過疎地だ。私はこうして故郷に骨を埋めることになりそうだが、もう一人の幼なじみに言わせれば、私には村を出て行くほどの三本の木が足りなかったが為の当然の帰結だそうだ。三本の木とはつまり、やる気と根気とあとはなんだったか？ それこそどうでもいいので、元氣あたりで手を打っておいてくれ。

「勇者饅頭、勇者饅頭だよー」「勇者クッキーおひとつどうぞー」

「勇者弁当、勇者弁当ー」「勇者様のミニアチュールありますー」

「勇者キーホルダーはいかがー」

ほら、こんなしけた村ですから、勇者を輩出したことによつてこの村おこし的な何か絶賛巻き起こっているわけです。けっこう売れてるな。私も便乗すればよかつたか、勇者をつけておけばとりあえず売れるぞ。いやいや。

「勇者ネックレスですよー」「旅のお供に勇者マントー」「勇者の剣ー」「寂しい夜は勇者人形を」「安眠勇者枕で快眠ですー」「この重厚な勇者家具」「勇者定期ー勇者定期預金はいかがー」

本当に何でもありだな。カオス過ぎる。とりあえずこの勢いにとつとけ乗り遅れるなという商売人の気合いが、原色で渦巻いている。わざわざ勇者の凱旋をねらつて、遠方から足を伸ばしに来た商人もいるようだ。商品をさばくというより、商機を探しに来たのかね。勇者旋風に波乗りだ。私も見習わねばならんだろうな。とりあえず三本の木の内「やる気」でも地道に育てていくことにするか。冷やかし半分立ち並ぶ出店をのぞき、村の外に溢れ出すよう張られた色とりどりの天幕を眺め、ぶらぶら歩いている内にわあ！ と歓声が上がった。ぎゅぎゅぎゅうのすし詰めになりながら、私は見た。

勇者の凱旋。

一瞬の空白の後、

雌鳥を絞め殺す時の断末魔にも似た黄色い悲鳴というよりむしろ絶叫、女性陣が興奮のあまり何名か半ば失神遊ばした。

じいさんばあさんは拝んでる。ご神体じゃないと思うんだが、ありがたやありがたやって、確かに平和をもぎとってくれたのはありがたい。とにかく阿鼻叫喚、凄じ熱狂、フィーバーだ。

勇者が一步進む度に、足下に薔薇か蓮の花が開いたといわんばかりに奇跡じゃあ！ というどよめきが走る。

一挙一動にこの騒ぎじゃ、勇者が三回回ってワンと言ったら、自殺者が悟りの者が出るな。つらつらと考えながら、勇者を見た私の第一の感想と言えば。

なんかものすごいきらきらしてた。

きらきら。

すまんが、私には他に的確な語彙を見つけれん。詩的才能も皆無故、以下の直裁な描写もご容赦願いたい。

金髪サラサラヘアで、青い瞳に、白を基調としたすごそうな鎧、マントをまとっていた。

終わり。

私が吟遊詩人だったら、観衆に撲殺されそうだな。まあとにかくきらきらだ。

あの白い鎧はもしかやそういうエフェクトがかかる仕様なのだろうか。陽光に透けるような金色の髪は、微風に流れて光を反射している。甘いマスクが綻び、白い歯とともに片手があがるなり、女性陣の悲鳴が再びだ、僧侶がいたら、とりあえず回復呪文かけてやれ。せめて死者が出る前に。死因は勇者のきらきら。たまらんなおい。

あ、ちなみに私は現代日本からの転生者です。

だから、現代用語が混じっても許してくれ。

そんなじじいじ母さんよ。

命を大事に

十分堪能したというより、十分精神的疲労を味わったので、早々に退散することにした。

あいつ………本当に勇者になつたんだな。

群衆をかき分けて後にしながら、私は後ろ髪引かれるよう振り返って確認した。

ただの村人オーラは完全に払拭され、かつての根暗でうだうだと優柔不断で涙腺崩壊気味の青白いもやしっ子の面影など、遠目にも全くうかがえなかった。

時の力は偉大だ。私の耳かき一杯ほどの貴重な信仰心の奉納先として、これまでは幸運と商売の神を何となく信心してはきたが、今後は時空神に帰依した方がよいかもしれんな。検討の余地について検討しておく。

神様ついでに告解を一つ。ぶつちやけ、子供の時分にこづき回していたもやしっ子が、半端ない力と社会的地位とをもって凱旋したので、正直血の気が下がる思いでした。

数々のサーガを生み出すような冒険の日々の中、子供時代における汚点の一つや二つをいつまでも覚えていとは思えないが、奴はあれで………相当粘着質なタイプだ。総じて根に持つ。仮にも勇者とあろうものがとの思いも去来するが、だからこそその懸念がある。

勇者なんて、初志貫徹とか鋼の意志といえは聞こえがいいもの、つまり絶対やると決めたら人の助言を一切受け付けないで、こつ粘性の執着をもって我が意志を通す人種の最高証明ってことだろう。

特別な血筋でもなんでもない奴が勇者と名声を得るまでに、どれだけの努力と犠牲を払ったかなんて想像したくもない。いい意味で

思いを馳せているわけじゃないぞ。

だからな、それって努力でどうにかなるもんなの？ なんねーだ
る普通！

出自が普通の奴が、普通でない勇者になるまでに、努力、根性、
勇気のまともな使い回して凡人の限界を突き抜けられるもんか？

一本どころかまとめて三本四本といわず景気よく十本以上は線をぶ
った切つて、血筋や門地といった壁をぶち破つていかねばならん
ではないか。奴の場合、勇者として背景なぞないない尽くしだつた
わけだから、どこかで少なくとも平均値を遙かに上回つてその他ス
キルを引き上げねばならなかつたはずである。

では、あの腺病質な子供がなんぞ平民の頂点を登り詰められた要
因として、私はたつた一つしか思い浮かばないのだ。さつきも口に
したが、奴の 粘着性だ。意固地とか偏執性とか頑固さとかの語
彙より、粘着質という言葉が的確過ぎる。ねばねばしてるんだ、奴
のあれは！

くどくどと申し訳ないが、奴が奴のくせに勇者なんてものになつ
てしまった性格的背景を考えるとだ。私が幼さに任せて奴をぐりぐ
りいたぶつた思い出を爽やかに水に流してくれるとはお天道様でも
思つまい。うあーやだやだ。奴が現在の栄光に過去の胡乱な思い出
を埋没させてくれていることを願いながら、私は店舗兼工房兼自宅
を目指し帰路についた。

私のうちの玄関口には、こう看板がかかっている。 ウィルド工
房 呪物下請けしますー！

諸氏にはなんのこっちゃと言われるかもしれんが、魔法の道具を
作成しているところではありません。決して。魔法の道具を作成で
きるのは錬金術師か魔法使いか聖職者かとかくその道々を極めた
職種だけである。

だが、そういった特殊技能を持つ人々が、呪物の生成を一から十
までやるかというところ、そうではない。

全ての工程を一人で行おうとすれば、物凄い手間暇がかかるのだ。

例えば札一枚にしても、綿密な図形を原版から模写していくだけで、とんでもない時間と労力がかかってしまう。いや、手習いとして未熟な職能階級がそれを身につけることも大切なのだが、はつきりいって、修練と商売は別問題だ。

見習いにやらせるにしても精度が問題、マスター級の魔術師がやるにしても時間と労力が問題、こうした手合いは量産に向いていないのである。

そこで、私のような代行下請けが必要として出てくるのだ。ひたすら原版のとおりを図を写し続けるという単純作業の担い手だな。

ちなみに需要は結構高い。しかし薄利多売であると申し添えておこう。

ついでに、私なんぞせいぜい田舎の下請け業者だから、色々兼用で部屋を使用しており、工房と名乗るのもおこがましい感じだな。

入ってすぐ応接室兼居住空間で、奥に工房兼書斎もどき兼寝室があり、あと浴室だ。なお、廁は外だ。

ああ、それから身分不相応に思える書斎もどきというのは、図画集や刊行版の研究誌なんかを揃えているためそう呼称しているだけだ。札にも用途に合わせて色んな図案があるからな。あるいは、オーダーメイドで原案が届くこともあるが、まあ基本は大事だ。

あー、手描きの生産性を甚だ疑問視する声が聞こえてきそうだが、版画はどうも呪物系とは相性が悪いらしい。一カ所かすれがあっただけで、大爆発とかありえるしな。

特に魔導書なんか危ないのなんのつて、魔法陣の文字が一カ所とんだだけで、どうなるか・・・防衛機能を果たさなくなるから、下手すると召喚即死亡なんてのもありえるわけだ。

そもそも基本図案に沿って、描き順や作法など細かいルールもあるし、筆に魔力を乗せた方が効果上がるなどという側面もあるしで、とにかく手描きが重宝される。

暴発の可能性のある版画は、玄人の間では使われない。というか、術者がまず加工しない。危険すぎるのだ。とはいえ、あまりにも強

力なものは、術者自ら全ての工程に携わるものだ。私みたいな下請け業者には、せいぜいクレームがついて仕事を干されるリスクがあるくらいだ。って、そうなりや明日のメシの種も欠く死活問題だから、結局欠陥品イコール死じゃないか。へこむわー。

とりあえず、糊口を凌ぐ為には労働あるのみ。仕事するぞ。ちくちくちくちく細かい作業をな！ 筆よーし、顔料よーし、労働は尊い！ 精神を集中して、筆を紙に滑らせようとした時だ。タイミングのものすごく悪い来客のベルが鳴った。

なんだ？ 村人達は今表に出払っているし、わざわざ村の中心部から外れたこの工房に足を運ぶとは思えない。じゃあ流通業者か！？ この間教会向けの聖布の完成品を回収しに来たばかりだろうが！ あ、ちなみに私はマーチャント&アドベンチャラーズ商会傘下の呪物下請けギルドに入っていて、そこから依頼を回してもらい、期日までに納品している。ここ田舎ですから！ そうしないとこんな鄙びたところでは需要なくて稼げませんから！ あと次の納期はまだ先だろう！ こんちくしょう、それなら誰だこのやろう。ああー、ただでさえないやる気が物凄い勢いで失せていくー。もう無理。今日の労働無理。

「うーい、今あけまー」
す。

間延びした声が不自然に凍り付いた。

何もかもが動きを止め、一枚の止め絵となる。落ちる影は長く、南中する太陽に背後から薄い金糸がこぼれ落ちた。磨き上げられた白い鎧は豪華というより限界まで無駄を削ぎ落とした仕様で、身体にぴったりとまとう伸縮自在なタイプ、特殊付属効果が幾重にも施されていそうな代物だ。ロスト・テクノロジー 古代技術が異界の技によって作られたものか、少なくともサーガ級のものに間違いない。

青い目は憂いすら帯びてなお深い青、長い睫が目元に濃い影を作る。

って、なんだそのまつげえええええええ。おま、ばさばさして

るから！ 瞬きすると、音がするから！ いやいやいや、それどころではない。

目の前のやたらきらきらした男がゆっくりと口元を笑みの形に綻ばせた。

「ひさしぶり」

死んだ。なんで今人生の晴れ舞台（トンレミ村はあまりにも小さいが）を演じているはずの男がここにいるんですか。あれか。はやる復讐の心に押されて、まわりつく村人ふりきってここに来たのか。

私、生命の危機！

本当にまずい。私は一般人だぞ。村人だぞ。勇者の軽い一撃でもくらってみろ、本気死ぬ。黒竜の固い装甲すら切り裂き貫通させてぶちのめしたとかいう御仁ですから、レベル1の村人なんて・・・
・はじけ飛ぶだろ！ 洒落にならん。お前世界の大舞台に羽ばたいたからには、古巣なんて戻って来るなよ！ 過去は振り返らず未来だけ見つめてろよ！ お、今私なんかいいこと言ったよな？ ない？

お前ら勇者パーティの一味はみんな人間の枠はるかに超えちゃってるんだから、その辺自覚して村人にやさしく！ 自分に厳しく！ というか、何ずかずかとおずおずの間の微妙な空気で人のうちに入りこんでんだ。そこ、絶対領域ですから！ 入んな！

「あの・・・入ってもいい？」

入った後でお伺いを立てるな、遅いわ貴様！

「・・・勝手にしろ」

私は目を伏せ、戸を閉めた。

すまん、弱い私を許せ。人類最強に命握^{タマ}られて逆らうとかできませんから！ できたらそれこそどんな勇者だ。

奴ははにかみがちに恐ろしいせりふを吐いた。

「ずっと会いたかったんだ」

私は会いたくなかった。お前のありえない風の噂をきくたびに、

戦慄が身の内を走ってた。仕返しされたら怪我するかもなあという予測から、骨折るかもなあ、筋肉断裂するかもなあ、いや頭潰されるかも、死ぬな、の結論までは割と短かった。

内心鬱々通り越して戦々恐々とする私の斜め上で、緩んだ顔が心底嬉しそうに笑うから、こいつの頭の中で私はどんな惨劇にあっているんだらうと全身から脂汗がふき出しました。

私のあすはどっちだ。

ことによると、あすはもうこないかもしれん。

とりあえず、これだけは言わせてくれ。

命を大事に！！ 主に善良な村人の！！

帰ってきた復讐者（リベンジャー）

復讐は何も生み出さない……

などと一説ぶってみようかとも思ったが、口がかゆくなるので断念した。復讐が生むのは更なる復讐、もうこんな悲劇は止めようとか、とかどれだけさぶいぼの立つトンチが効いているんだ私は。自家毒あおって死ぬのと同じだ。

それでは、『あいつ』と同類になってしまわないか。ああ、よく覚えている。『皆は私が守ってみせる！』そう叫んだあのスイーツ（笑）の声を。

そう、私が、あるいは私たちがこのなんちゃって（笑）ファンタジー世界に転生するきっかけとなったあのスイーツ（笑）の×××……いや、まあそれはいい。よくはないが、とりあえず横に置く。そんな性に合わんどころか、拒絶反応で脳が溶解しそんな自滅技より、せめて茶の一つでも出して、過去の怨念を多少なりとも解いてもらおう。そっちの方がまだしも現実味がある対処というものであろう。

手持ち無沙汰に立ちつくし、狭苦しい我が家を眺めていた奴に、平淡を装って声をかける。

「……あー、紅茶とコーヒーと緑茶のどれがいい？」

「いいよ。お構いなく」

下手に出たら、淡い微笑ではつきり切られたよ、おい。お構いなくとはいうがな、私は構うんだよ！ お前の機嫌ひとつ、慈悲如何に私の命がかかってるんだよ、ああん！？ 諸氏におかれては、ここ、巻き舌でアグレッシブに発音よろしくお願いしたい。

本題の前にアイスブレイキングでもしてからという深謀遠慮を踏みにじり、私に命乞いすらさせない気が貴様ああああ！

いきなり本題で血祭りか！？ そうなのか！？ 復讐者の様式美もあつたものではない。

「そ、そうか」

罵倒の十分の一どころか何も言えず、へらへらと曖昧な笑いで思わず後じさる私。

しょせんは遭遇第一村人どころか、第二、第三すら他者に譲り、勇者の聞き込み作業で宿屋の二階にいるちよつと台詞のある旅人の相部屋のモブくらいのレベルの私に、何も期待しないでいただき。

人の申し出を断っておきながら、何故か奴が妙に鬼気迫る表情でにじり寄ってくる。ちよ、そこで何故詰め寄る？ なにやらお前目が据わってるんですけど。しまった、後ろはもう壁だ。逃げ場がない。雑魚のお約束過ぎる。壁に芋虫のように両手指を這わせながら、私はただだと景気よく冷や汗をふき出した。

ああ、短かったよな、私の人生。豪遊とは縁のない爪に火をともしよつな節約生活だった。仲業者は買いたたいていくし、ギルドはなにかつちやあ組合費を徴収していくし、村は過疎だし、適齢期なのに結婚相手はいないし、というか適齢期もう過ぎていくし、ふんだりけつたりだこんちくしょう！ アフーヌーンのヒスリエも、某跳躍雑誌の狩人×狩人の完結も見えないというのに、死ぬるかばかやろう！ 日本で暮らしていた時、私は慎ましかかなオタクだったよ、ああ！ ののしるがいい。指差して笑うがいい。思考が跳躍しすぎだ、戻せ戻せ。なんにせよ、若い身空でわけの分からんスイーツ（笑）のせいで無理やり人生を断たれ、この自然界の法則ガン無視のファンタジー世界にぶち込まれ、しかも、その上、最期に幼なじみの手で潰れたトマトのようにくしゃりか。そりゃあんまりにも悲惨だろう。畜生、神は死んだ！ いや、神はいたが、奴はえこひいきも甚だしい！！ スイーツ優遇断固反対であるが、しょせん私は有象無象の生贄なのだ。神よ死ね！ むしろ死ね！！ 大事なことから何度でも言うぞこのやろうが！

ゆっくりと影が覆い被さってくるのを見上げ、今や私の心臓は締め上げられた雄鶏のように早鐘打っていた。

思考は跳躍し過ぎて、現実を逃避するばかり、建設的な意見を奏上せよとの命令も華麗にスルーである。

生命の危機にクールでいられるほど私は人間ができていないんだ。

って、ひいひい！ 肩に手がかかる！ 息がかかる！ どうぞお手柔らかに！ せめて骨折程度で！ 頼む！！

ぐ、と肩に万力のような指の力が、あいたたた、肩が砕ける、痛い痛い痛い！！

更に体重がかかり、qあwse d f r t g yふじこ！！ と喉元まで痛みと恐慌の絶叫が迸りかけた。しかし、その後起こったことは、私の常識の範囲内に留まる想像を遙かに超越していた。

な、んっ、！？

何が起こつとるのだ。

さらさらとした髪が首筋にかかり、私は硬直した。肩口に奴の顔が埋められている。鼻先を押しつけられる。いい匂いがするんだがこれ何て新車のテンプレーション？ 男のくせにこんないい匂い振りまいて、貴様それでも勇者か！？ もっと血臭と粉塵と汗の臭いでもさせてりやあまだかわいげのあるものを、風呂上がりのフワッラルな香りをぶんぶんさせているなぞ勇者の風上にもおけん！ けしからん！ などと真剣にぐるぐる考えている辺り、私の頭がいかに茹だっていたのか、ご理解いただけることと思う。私は混乱のド壺にぶち込まれて、完全に『むらびとはこんらんしている』『むらびとはまひしている』のステータス異常状態に陥っていた。

いつの間にか指の力も加減され、むしろ奴の指がかたかたと震えているのに気づき、瞠目した。

何だこれ。おいおいおい。

奴は臓腑の底から振り絞るようなぞつとする声で、

「……………あい、たかつた……………！」

感極まったようにうめくもんだから、心底恐怖の谷底に突き落とされたね。だが、その上肩口にしめつた感触と荒く熱い呼吸を感じ

て、私は「んん？」と違和感に苛まれた。とんだデジャヴだ。その時嫌な天啓があつて、私の中で恐怖<既視感にがこんと天秤が音を立てて傾いた。自然と衝動に突き動かされ、思わず危険物を刺激せぬよう右手をそつと持ち上げる。

わし。

奴の後頭部をつかんだ。びく、と不自然に奴の頭が跳ね上がるが、無視して、

ベリっ

マジックテープをはがす時、こんな音がしたなあ、という感じに容赦なく引き剥がしてやった。

下からじいつと覗き込み、幼少時近所の悪餓鬼どもをして「睨まれると怖い。ちびる」と甚だ不名誉な眼力全開で見つめると……奴は青ざめて視線をそらした。

うむ。気が弱かったものな、こいつ。

同時にほぼ殺気にすら思えた、奴の張り詰めた緊張の糸が熱した鉛細工のようにぐにやりと溶解し、ほどけて行くのを感じた。

私も力が抜けるのを感じた。

これが正解だ。

中身、なんにも変わつたらん。

外見がきらきらになつても、中身は苛められて、じいつとひざを抱えてしゃがみこみ、吃音で、うまく喋れなくて、人と眼を合わせられない気の弱い……私の元舎弟、ごぼごぼっ、いえ、幼馴染である。

そうか、ということとは……私の天下か。

などど即座に思考を切り替えたりできるわけもなく、どちらかといえば、厄介なことになつたというのが私の正直な感想だった。

あれだけの偉業を成しながら、あの性格が根底矯正されていないのか。

私の平穩のためには、有名になつた元舎弟など、外に掃きだしてしまいたいのであるが。

「おい」

抱きすくめる（嫌な表現だな全く）というよりむしろ妖怪のようにしがみつくと奴に、ほとほと呆れて背中を思いつき叩いた。たたらすらふまねえ。地味に腹立たしいな。どうせその特殊装備で羽毛よりも柔らかな衝撃しか感じていまい。

「お前な、力加減はしているのだろうが、そろそろ私の内蔵が口から飛び出そうなんで、もうちょい力緩めてくれ。というか、離せ」
「え……」

途端に奴はいきなり道ばたでレベルの釣り合はん高位の魔物に出くわした初心者パーティってこんな顔？ というような絶望的な表情になり、うろつろと空いた方の手がさまよった。

「離せ。暑苦しい」

自分の優位を悟った途端、態度の大きくなる私。いや、私は身分相応という言葉を知っている村人だから、幼い頃の上下関係の持続を悪用する気はない。これは閉鎖社会における幼少時に培われた人間関係の後年に及ぶ有効性について、興味深い一サンプルとして生温かい目で見守っていただきたいところである。

奴と真正面から視線を合わせれば、何というか、本当に『絶望』と書き殴ってある。眉根を寄せて、大きく見開いて零れ落ちそうな青い目に薄い膜が張り、形のよい唇は震え出しそうに一文字に引かれて、限りなく悲壮だ。

しかし、見た目麗しく成長してしまったもので、情けない顔が、何故か憂い顔に自動変換される誰得。

はあっと私はため息を吐いた。たちまち奴がびくつとまた過剰反応するにいたって、もはや想像は確信へといたらないでたのむ。

そういう顔は最終決戦にとっておけ。こんなところで無駄玉撃つてどうする。

「はなせ」

何度も言わずな。

人間年を経るとまるくなるものだ。以前だったら、胸ぐらつかみ

上げて奥歯がたがた言わせていたところだ。とはいえ、今なら逆の構図が容易く脳裏に描けて、年月の残酷さを酢昆布のように噛みしめる羽目になった。ここ、内地だから、酢昆布高級品だけだな。

「わかった……」

切なげに眉を寄せ、吐息を零して奴は私を解放した。すまんが、お前は色々と特殊効果の使いどこを間違つと思うぞ。私は奴の肩を軽く叩き、椅子を勧めた。というか、座れと親指を下に向けた。羽音のしそうな長い睫をばさばさ言わせて、奴が瞬きする。ためらいがちにお伺いを立てるような目で見えるな。うつつとしくて敵わんわ！ いいからはやく座らんかい。私は今度こそ炊事場に引つ込んで、熱いお茶を出した。おおお、茶葉が立っているじゃないか！ 縁起いい……のか？ 滅多に立たないものがこの状況下で立つたつて、逆説的に考えると……いやいや考えるな私。考えたら負けだ。湯飲みを置こうとすると、食い入るように奴の視線が集中する。

「まあ飲め」

不意に奴は、こちらがはっとする透明さで笑み崩れ、靈驗あらたかな聖水でも頂くように口をつけた。そんな大したものじゃないんだがな。ただ汲み置きの水湧かして茶葉に注いだだけだ。

「あー、その、まあお前のことは風の噂で色々聞いてたぞ」

何でも勇者になったそうだなって、白々しいな私ええええええええ！ 村の歓迎っぷりを見ていたら、一目瞭然ではないか。アホか！ 私はアホか！？ 女の子と初めてデートする際に困って意味不明な話題を持ち出しては密かに七転八倒する十代のシャイボーイか？ 私は生物学上女だし、こいつうつつとしいだけで、かわいい女の子じゃないし！ ありえん。待て、そうだ。村一同を上げての歓迎をぶつちぎって、お前はなんでここにいるんだ。その辺、小一時間くらい問い詰め……たくない。だが聞いてやる。

聞いてやるうと思っただが、復讐だったら大変怖いので、やっぱり話題は別にふることにした。

「勇者なんて、誰でもなれるものじゃないだろう。がんばったな」

これは正直本音だった。なれるものじゃないどころではなく、絶対なれないものになったこいつは、努力と根性によって果たせるとは到底思えない一村人の出自という呪縛の壁を何十枚何百枚と突き破ったのだろう。凄い。というより、何本まともであるための線をぶった切ったのか、私は怖くて直視しかねる。せめて正常だけは保っていてくれ。私の精神衛生上の為に頼む。

それで、幼少時の復讐しに来たとも今や見えないわけだが、村中がお前の歓迎ムード一色に塗りたくられているというのに、何でまた私のうちに来たのかとなんとか尋ねようとして、私は湯飲みを手に言葉を飲み込んだ。

なんだ その か おは

口元が の字。下うつむき加減に目元染めるな。もじもじするな。てれてれというオノマトペを無意味に花で飛ばすな。贅辞なんぞ山と浴びて来ただろうに、何だその反応は。ないない、その反応ない。

「俺……」

みし、と奴の握りしめた湯飲みが不穏な音をたてる。

「俺……生水も絶対飲まなかったし……！ 達者でやってたよ」

あー、何やら奴の目に正常とはほど遠い、いつちやってる光が不気味に瞬いているんだが、私ここ逃げてもいい場面かね。

「つよくなって……勇者になって……認められたから……だから」

奴の目は歓喜とも狂喜ともつかぬそれで、正直見るに堪えません。さつきからかたかたかたかたうるせーなーと思ったら、私の湯飲みが局地的に震度6になっていた。

「だから」

やくそく。

一瞬無音になったかと思った。うむ、あまりの恐怖に私の耳がストライキを起こしたようだ。そろそろ本気で逃げてもいいか。怖すぎる。単純に復讐に来てもらった方がよかつたかもしれん。一発殴って、はー、すっきり、という陽性のもではなく、奴の粘着性が凝縮された上、こっちにその執着の矛先が向けられているような

気がするんだが、それこそ自意識過剰だよな。気のせいだよな。あれ、なんだか全身の毛穴が開いて、血の気がざあっと下がる音が聞こえる。寒いのか熱いのかも分からん。

ちよ

おま

ひ

混沌にして混沌

ちよ、待て。ひいひいひい！

私の魂切る心中の絶叫を完全に無視して、明らかに目が『あつち』の世界にいつちゃってます的幼馴染の勇者がのしかかってくる（ちなみに、あつちがどつちかは言わないで。頼む、言わせないでくれ）。

って、目がぐるぐるしているんだがあああああああああ！！

目の中に、天地創造時の混沌の汚泥を思わせる暗黒が渦巻いているんですがあああああああ！！

妖精とか！ 精霊とか！ エルフとか！ あまつさえ天界とか！

！ そういうハイロウな連中から祝福をさんざんもぎとっておきながら、今こいつの目は明らかにイービル&カオスううううう！！

邪悪にして混沌とかっ 勇者の属性的におかしくないか！？ もしかして折衷か！？ ハイ&カオス？ それともカオス&カオスか！？ もはや私の頭がカオスだな！

> 村人は混乱している

ステータス異常だ。誰か異常回復のクリアボトルを持ってきてくれ。いや、むしろこのバーサク並びにオーバーキルやらかしそうな状態の勇者にダースでぶっかけてやってほしい。

うおっ

顔が近い！ 近すぎる！！

私のパーソナルスペースの広さをなめないでいただきたい。日本人のPS値は世界でも有数なのだ。そういうことにおいておいてくれ。

気づくと、あまりの顔の近さ、さらには奴の目の中に、SUN値をがりがり削るような深淵を覗かされ、耐性のない私は半ば失神し

かけた。

耐魔法値や精神汚染などの抵抗値がべらぼうに低いのだ。何度も言わせるな、私は村人です。

しかも第八村人である。多分。村八分に響きが似ているな。またも思考が迷子になりかけて、私はこのままではいかんと、なんとか帰ってきた。

ソロモンよ、私は帰って、……そろそろ黙ろうか。世代間によっては誰もわからんネタほどむなしいことはないわ。

涅槃に逝きかけたが、生存本能の為せるわざか、根性でなんとか持ちこたえたぞ。

危ない。ここで気を失ったら……怖過ぎる。親の死に目でもないのに涙が出そうだ。とにかく、気絶＝雪山遭難状態だ。寝たら死ぬぞ私エツ

私が自分を自分で励ましている（二度目の現実逃避をしている）間にも、無言の攻防は続いていた。

すなわち、ゼロ距離に縮めようと何故かのしかかってくる奴と、必死に押し返そうとする私。

勝負？ 目に見えてる。

私の左手は主の応援虚しく、すでに一敗地にまみれていた。腕相撲でいうと、開始の合図と同時に、さくつと机に叩きつけられた状態だ。情けないぞ、私の左腕え！！しかし、その必死の抵抗、ナイスファイトだった！ それは認める。などと、私の現実逃避もいよいよ甚だ激しくなってきた。今更だろうという指摘は聞かん。

現実に立ち返れば、組み合ったまま左手のひらは力負けして壁にはりつけとなり、指一本動かせない。こめかみを嫌な汗が流れる。奴が勝利に笑っていればまだしも、淀んだように光のない目がぐるぐるしたままでだな、こう……怖いんだよ、うわああああ！！

死ぬだろ、私絶対死ぬだろう！！ 死が、死のけはいが見える！！ 本当だ！！ 死の濃厚でそれでいてこってりとしたコールター

視線で穴が空くほどにガン見していた。食い入るように、とはまさにこのことか。

ここは、泣いていいところか？　いいよな、許されてしかるべき恐怖シーンだよな？

伏せた瞳の奥に激情とも熱ともつかぬ嵐が一瞬過るのを見たかに思う。

その時、私は。

ぞっとした。

同時にざあっと血の気が下がる音を聞いた。

人は。

自分の物差しでは測れない、理解の枠の限界を超えたものを見た時、許容できずに拒絶する。

私は、奴の異生物ぶりに、ほとんど生理的嫌悪を催していたのだと思う。

幼馴染に酷い言い草かもしれない。冷血といたくばいえばいい人間が。まともな人間というやつが、こんな目をするものか。

正気の沙汰じゃないだろう。狂気の沙汰だ。

いや、狂気すらも突き抜けて、でたらめな生き物にならなければ、そうでなければ至れぬのか。勇者とは。

私の煩悶なぞ数秒の出来事だったのだが、それに終止符を打ったのは、奴の奇行だった。

「っ、ひ！」

私はめんたまひん剥いたね。

ああ、眼球が零れ落ちるんじゃないかってーくらい、目を見開いたね。

人の右手首を捕らえた奴が、何を思ったか、顔面寄せて、手首より僅か上あたり、口を！！　口をつけたあああああああああ

混沌にして混沌（後書き）

もげる。世界よもげる。

幸運の女神は後頭部が禿げているという。

私は商売と幸運を司る”ガ”のつく女神を信仰……しているけはいがしないでもないこともないわけだが、気づけばかの女神は眩しい後頭部を見せ付けながら全力疾走で私の脇を走り去り、その上第二走者の貧乏籤の神か何かが私に肘鉄を食らわして、なお第三走者の凶運の神か何かが倒れた私の頭をげしげし踏みつけ、更には華麗なバックステップで念入りに止めをさしていった。

まさにそんな感じの。

最低最悪意味不明な状況であった。

いやもうこの平和の象徴とはかくあらん的トンレミ村、しかも勇者の凱旋日、更にはそいつは私の幼馴染なわけなんだが、何故私はまさにいま生命の危機という状況に追い込まれるんだ？

おかしくないか？ おかしだろう。おかしいと言え！

「お……落ち着け」

まずは言語コミュニケーションからいこうではないか。肉体言語はその後でいい。拳と拳で語り合い、地面に倒れ伏して、夕日に友情を誓うなぞまず無理だし。多分私、お前の一発ではじけ飛ぶとおもうから。

なんだろうな、こっつ、『ぎぎぎぎぎ』という感じで奴が顔面を上げた。と、とりあえず、奴の耳に私の声は届いている。

怖いんだが。心底怖いんだが。しかしここで恐怖に負ければ……多分この世の全ての暗黒面が見られると思う。その時、私の正気は現世に辛い別れを告げることとなるだろう。

「……」
じつと。

奴は透き通りすぎてむしろ非人間的に見える青い瞳で私の目を覗き込んでいた。

つむ、すなわち私の言葉を待っているようだ。幼少期の刷り込みよ、まさか私の命綱になろうとはな。

「思うに……密着し過ぎだと思っただが」
思うを二回もいってしまっただが、断定口調を恐れた私の心中を察していたきたい。

後になって考えるに、『喰う』側の捕食者と『喰われる』側の非捕食者の関係を、私の無意識こそが本能で察していたのだろう。

いや、このときは、手首の内側に口をつけられた時点で、読んでは字のごとく『喰われる』という予感が私を保身行動に走らせていた。怒らせるとこいつ何するか分からんぞ。怒らせるなよ、ぶちきれると歯を立てられて食い破られるぞ、相棒。そう本能が大音量で警告していた。

そして、奴はといえば、私の言葉に一瞬目を見開き、目ん玉零れるんじゃないの？と私にありえん危惧を抱かせるものの、ただ微笑するに止めた。

……何なんだ、その無駄な色気のある苦笑は。

そのまま奴はゆっくりと私の腰に！ 腰に手を回して、低い声でつぶやいた。

「……足り、なくて」

足りないのはお前の言葉と常識とあと脳みそか。道端で拾ってこいよ。なければ露天で売ってるかもしれん。

などとつつこめるクールな私でありたかった。しかし奴の地を這うがごとき低音の聲があまりに不穏で、私は恐怖に身体を凍りつかせていた。しかし凍りっぱなしだな私。

いきなり、奴が腰を抱く手に力を入れた。

「っ、ぐっっ」

内臓が口から飛び出しかけた。そんな気がするほど強く強く、奴はぎゅっぎゅっとうと馬鹿力で私を抱きすくめ とうか多分これは圧殺しようとして？ いるのでは、人の首筋に鼻先を埋めてなにやら喚きだした。

「旅自体は辛くなかった。どんな敵も本当の恐怖とは違った……でも、あーちゃんに会えないのが辛かった。あーちゃんに会いたくて会いたくて、あーちゃんが足りなくて、死にそうだった……!!」
ちなみに、あーちゃんとは私の幼少時のあだなである。まさかこのあだな自身も二十歳をとくに過ぎて現役復活するとは思わなかったに違いない。

すがりつく力は強く、解けるけはいは微塵もない。

「……あーちゃん……あーちゃん……あーちゃん……」

奴は何度も人のあだなを繰り返した。うわ言のように繰り返しながら震え、次第にそれは嗚咽に取って代わった。

「……あーちゃん……あいたかった、あいたかった……あーちゃん……あーちゃん……あーちゃん……」

しん、と針の音さえ聞こえそうな静寂の中、奴のすすり泣きだけが室内に響く。

うぜえ。人のあだなを連呼するな。と不快感が湧き上がるのと同じ時に、私は嘆息交じりに天井を仰いだ。

よく分かんが。

会いにくればよかつたのではないか。

別段来る者は拒まんぞ。茶くらいは出す。

どれほど中身が残念だろうと頭がおかしかりうと、まあ仮にも幼馴染、だ……

……あ？ 何か脳裏に引っかかったような。

そつえば、先ほど奴は何か言いかけていたが、「やくそく」？ 強くなって、だからどうのこうのとなんだ？ 何か約束していたか？

何か閃きかけた私の思考を奴の奇行が邪魔する。

「くるしい。あーちゃん、足りなくて足りなくてくるしい。胸がくるしい」

いやいやいや。

それは気胸ではないのか。一度医者にかかってはどうだ。という

か、幼児返りなら、また別の医者をお勧めするが、いかがなものか。

私があればこれと医者をお勧めする前に、奴はまたぶつとんだことを言い出した。

「触りたい」

は？

「あーちゃんに触りたい。お願い、触らせて」

変質者はここか。おまわりさん、ここに来てくれ。日本の優秀なおまわりさん、ダースで来てください。

「何でもするから触らせて。たすけて、あーちゃん」

私に触るとお前の持病のしゃくは治癒するというのか。どんな奇病だ。しかも何でもするとは……助けてというのも、それは私の台詞ではあるまいか。現在進行形で私は誰かに助けて欲しい。

そもそも私は奴の「触りたい」などという意味不明な懇願にいいともだめだとも答えていないというのに、奴は完全に一本切れた目つきで、息も荒く勝手に人の身体をまさぐりだした。

「ちよつ、やつ、どこ触つてんだ！」

おいおいおいおい！！

いや、私もだな、さつきから、復讐だのなんだのってのにはどうも言動がそぐわない気がしてはいたんだが、では何かというと、もうひとつ考えられる可能性とやらには気づきたくなくてだな。

胸が残念だとか、洗濯板だとか、高身長ありえねえとか、がりがり骸骨女だとか、黒髪くらーい、目の下クマすげえなどと近所の大変かわいらしいお子どもに色々言われてはきつちり眼には眼を、歯には歯をとという故事を指導することもやぶさかではないがめんどろくさいので放置する私だが、これでも女だ。

なんとというか、ある種の危機を感じてきた。

いやいや実際ありえんだらう。自分が女性としてセックスアピールが大変残念なことは心得ている。もう一人の「砂糖菓子が擬人化しましたでも中身は激辛八バネ口なの」な幼馴染は、自分が抱きつきやすいからだーいすき、などとハートマークでくつついてふわふ

わの頭をすりすりしてくれるが、この懸念は自意識過剰の類だ。むしろありえないでくれ。

「ひっ」

脂汗と冷汗が滝のようにふきだし、覚悟を決め……られるわけがあるかと絶叫しかけた時、

「リーダー、探しましたよ」

淡々とした声に、とっさにはっと顔を上げると、逆光に塗りつぶされたシルエツトがたたずんでいる。

私はこのカオスな現場にも動じない声の主に、助けを求めようとして、絶句した。

おんなのこ

ちんまりとした女の子だ。

とんがり帽子に黒いぞろっとした衣装のどこに出しても恥ずかしくない正当魔法使い装束。魔法使いの女の子……魔法少女！これはどんな罰ゲームだろうか。特殊なプレイ過ぎて、私にはついていくのが今精一杯どころか最初からついていけねえよ。現在、私は幼馴染の勇者に押し倒され、おさえ込まれて半ば衣服も乱れ……死にたい。いつそ死なせろ。

呆然とする私の脇腹を、上着の裾から手を差し入れた奴の指が腰骨あたりからすうつと撫で上げた。

意識を第三者に奪われ、まったく構えていなかった私は、思わず腰が浮き、出した本人が正気を疑う裏返った声を上げていた。

空気が凍ったと思う。比喩ではない。

今のはなしだ。すまん、なしなんだ。

奴が、不埒極まりない手を止め、固まったまま呆然と口を開く。

「……あーちゃん」

頬を染めるな。気持ち悪い。

黙れ。ああ、そうだ。腰弱いんだよ。悪いか。触られると跳ねる

んだよ。陸揚げされた魚のようにびちびちな。お前の指じゃなくてもそうなるんだよ。90歳近い村長や乳のたれた隣のばーさんやその辺の猫の肉球にぶにと触られてもそうなるんだよ。

というわけで、世界よ、滅びろ。たった今滅びてしまえ。魔王じゃない、職業村人だが、私が許す。

そう思うのに、再び奴の荒い呼吸が私を嫌な現実に取り戻す。貴様は盛りをついた猫か。

ああああ、見たくない。見たくない。見たくない。そう思うのに、私はすっかりそろそろと奴の顔色を伺い見て……上気した上に多分また何本か線をぶつちぎってしまったらしいそれに後悔し、更には魔法使いの女の子を見て……もっと後悔した。

魔法使いの女の子は、じろり、と三白眼……三白眼？ いや、気を取り直して、暗く淀んだ目で私たちを睥睨し（なんのフォロにもなっていない）、非常に恬淡とした口調で、

「取り込み中でしたか……」
ふっと口の端を吊り上げ、いわゆる嘲笑の形に歪めた。

……ほとんどモルモットの交尾を見るかのような冷徹な観察者の目つきだった。

いや、そろそろ本当に死にたくなってきたんだが。何故私は自殺衝動と戦わねばならんのだ。

どうせならもっと別のものと戦わせてくれないか。「リーダー、お取り込み中申し訳ないのですがね」

魔法使いは全然悪いとは思っていないだろう口調で、彼女を完全無視しているリーダーの『奴』に声をかける。

「敵襲ですよ」

魔族です。

私の時間が止まった。

「っ、変態がとおりますよー」

魔族です。

私の時間が止まった。

さすが魔法使いだ。

凍れる時の魔法を使うとは！

といえたらどんなによかったか。

おい。魔族って、いやゆるあれだよな。魔物より上位ランクのやつだよ。なんでこの村に。

いわずもがな、勇者一行狙いか。ということは……私の中途半端に察しのいい頭が、とある解を導き出す。

Q・勇者はどこにいますか

A・私を押し倒しています

……魔族。ここにくるんじゃないか？

……

…

H A N A S E !

などと、ネタ満載でやっている場合ではない。即座に正気に返る

私。えらいぞ私。この調子で、灰色の脳細胞を働かせてみようじゃないか。

とにかく、三十六計逃げるに如かず。

すなわち、計略は諸々あるが、あれこれ考えて迷うより、逃げるべきときには逃げて身の安全を保ち、のちの再挙を図るのが最上の策であるという意だが、転じて面倒なことが起こった時は、逃げるのが一番よい得策であるというたとえだ。

私は平和主義者だ。あえていうなら保身最上主義。悪いか。弱者の知恵だ。

化け物は化け物同士で潰しあっているがいいさ。私はただの村人なんで、一足先に失礼させてもらいます。さーせん。

いや待て。こんなところでどんばちやられたら、私の家が崩壊するのではないか？

それはたまらん。

というわけで、私は奴の頬をぐにとつまんで、思い切り引つ張った。

「にゃ、にゃに？」

人を見下したまま、青い眼に戸惑いの色を浮かべて舌を噛む奴に、私は一言告げた。

「申し訳ないが、即刻出て行ってくれ」

とたん、奴は見た目にもはつきり青ざめる。

「え、あの、あーちゃん」

お前の言い分など聞いている暇はない。

「魔族とやら、多分お前のところに来るんじゃないのか？　こんな狭い村（という私のうち）で戦闘などされてみる。どれだけ被害を被るかも分からん。少なくとも、少しでも開けた平地にでも出てもらって、」

畳みかけるように言いかけた次の瞬間、視界が暗転し、奴の腕の中に抱き込まれていた。

なにく、

ほぼ同時に、どん！ と鼓膜を揺さぶる音がし、地面が揺れた。爆音と閃光。

な、なんだなんだ！？

何やらもうもうと煙が立ち込めているようだが、顔面を奴の胸襟に押し付けられているために視界が狭く、周囲の状況がまったくつかめん！ 私の家は無事か！？

「敵襲。上位魔神　しかもおそらく大貴族階級ですね」

冷静すぎる魔法使いの女の子の指摘に、目玉が飛び出すかと思っただね。

魔に連なる眷族の強さを等符号で表すところなる。

魔物（異形）＜魔族（主に人型）＞上中下位魔神（貴族・その他）
＜一部上位魔神（皇族・大貴族・貴族）＞魔王

上位魔神で、しかも大貴族か。それほとんど頂点だろうが、おい。これなんて死亡旗？

「大丈夫、あーちゃん」

奴が私の耳に口をくっつけるようにして低く、そして真剣に囁く。「守るから」

腰に来る声だが、いや、とりあえず、なんでもいいから、皆さんで仲良くうちを出て行ってもらえませんか。

そしてどこか遠くに行つて、二度とうちの敷居をまたがないでもらいたいのだが。

頼むから、前向きに検討をしてくれ。

私のうち、耐久性は通常程度だろうが、攻撃魔法だの必殺技だのとかぶつぱなされたら、普通に燃えると思うんだよ。火属性耐久なんてエンチャントなぞしていないし。ヘタしたら、爆風でぶつとぶと思うから。

あと、私も普通にお前らの攻撃の余波で、ライフゲージ一発赤ま
でぐっすり削られるか、死亡判定だと思っから。

触らぬ神に祟りなしというか、正直お前らと現在過去未来におい
て一切係わり合いになりたくない。

多分、まともな村娘がこのシチュエーションでマントの中に抱き
しめられたまま、耳元で一発「君を必ず守る」などとささやかれて
いたら、抵抗判定するまでもなく自ら進んで落ちていたのだろうが、
まあ現実奴の腕の中にいるのは通算精神年齢四十歳越えの私なわけ
だ。

ときめきか。それはおいしいのですか。売れますか。老後の糧に
なりますか。

まあ、つまり、ありえん。そういうことでご了承願いたい。

「おやおやおや」

馬鹿にするようなわざとらしい驚きの声に、私はぎょっとし、次
の瞬間鋭い心臓の痛みに襲われ、身体を折り曲げた。あまりにも禍
々しいけはいに、息をするのすら苦しくなる。村人の低い魔力感知
ですらも、針を振り切って過密に押し掛かってくる濃厚な魔力組成
の大气。

まずい。喉が急速に渴く。うまく息ができない。みぞおちが重い。
気持ち悪さに、目が回り、咳き込みそうになったら、ますます奴の
腕の中に押し込められた。

強い力は、どこか恐れるように力の加減をし、また矛盾するかの
ようにきつく私を抱きしめる。

「……ぜったい」

小さな呟きは、無意識に漏れたものだったろう。私が聞いている
とか全然念頭になかったに違いない。

「守る」

決心。そんなありがたくもなんともない決意を盗み聞いてしまい、私はばつが悪くなった。

好意に行動が釣り合っていない。奴も私も。

さつきも同じこと言われたが、なぜだろうか。

まるで自己暗示をかけるような必死さに、かつての思いつめるような面影が過ぎる。

センチメンタルなど、私には唾棄すべきものではあるが、一瞬なるともいえない気持ちになった。

もしかして、人類最強の看板を掲げて久しいはずのこいつの腕が、失うことを恐れるかのように震えていたからかもしれない。

まあ、なんだ。こいつにも、旅の中でいろいろあつたってことだな。

もう少し、プラス方面に情緒発達してほしかったものだが。

ん？　なんだ、さつきまで吐き気と眩暈が酷かったのだが、今わりと思考が軽やかだ。

そうか、こいつが多分なにかしたのだろう。浄化魔法の一種だろうか。詠唱もなしに、凄いものだな。思考操作か。いや、本当に凄い。

あと、魔神もはんぱねえつす。

高位の魔族・魔神は、その圧倒的優位性から、精神抵抗力の少ない人間を、ただその場にいるだけで汚染するそうだが、身をもって知ったよ。危なかったな、奴が何かシールドを張ってくれたのだろうが、もう少し遅かったら、私精神崩壊か、もしくは肉体機能に何らかの障害を負っていたかもしれない。

奴が私の頭を抱え込むようにしているのも、魔神が私を直視し、また私が魔神を直視するのを避けようとしているのかもしれない。心臓の弱い人間が、驚かされると恐怖で死んでしまうことがあるらし

いが、魔神も同じ。心の準備をし、また慣れれば、直視できるようになるが、何の備えもなくその魔眼で直視されれば、シヨックで死亡などというのも現実でありえる。

「くくくっ」

まだ目元を覆われたまま、私は魔神らしき人物の低い笑い声を耳にした。

「驚きましたね。今代勇者は、情緒欠如の冷血もしくはロスト・テクノロジーが蘇りし戦闘人形かと思っていたのですが　いやはや意外や意外、あなたにも人の血が流れていたんですねえ」

揶揄するようなそれは、真実驚きを含んでいるようだった。

どうということだ？　内心首を傾げ、様子を確かめたかったが、魔神を生で拜むほど私に度胸も根性もないのは、太陽が東からのぼつて、西に沈むものと同じ程度にこの田舎周辺という局所的周知の事実である。

しかし、奴は何か気に障ったのか、地を這う低音で釘を刺した。

「黙れ」

……あまりに感情の欠落したそれに、私は「は？　誰こいつ？？」と思わず腰が浮きかけた。

今黙れつつたの誰ですか？　は？　勇者？

「おお、怖い怖い。腕の中に閉じ込めて、警戒心剥き出しで、みっともないですねえ。そんなに私に見せたくありませんか？　くく、ははは！　嫌だな、嫌ですね、私、ちよつと楽しくなきましたよ。今まで本当につまらない任務でしたからねえ。恐怖も執着も感じていない人間なんて、もう最低ですよ。クズです。あなた、本当につまらない人でしたよ。楽しくありません。私はね、幸せな人間が大好きなんですよ。愛する人がいて、家族がいて、友人がいて、そして恋人がいて、そんな人間を見てみると、私も幸せなんです」

お、なんかこいつ、意外とまともなのか？

思わず聞き入ってしまう。

「そう、幸福に日々を生きる人間たち、彼らを絶対的な死で引き裂

いい笑顔

「ころす」

抑揚のないその声の、どこか舌足らずでさえある響き、だから余計に不気味だった。

かばうようにかざされていた手もどけられ、視界もクリアになった私は、至近距離で奴の表情を伺った。

その口元につつすらと笑みが浮かぶのを見て、背筋に悪寒が走る。人は、あまりに怒りが過ぎると、感情の揺らぎも見えず、かえって無表情になることがある。あるいは、笑ってしまうことすらある。

私にも身に覚えのあることだ。

理不尽の権化に、マグマのような怒りがうねり、暴れ狂い、やがてそれは行き場をなくして凪いだ湖面のように平らかになる。

限界まで引き伸ばされ、熱された感情の行き着く所は、平面であり、残酷なまでの冷却なのだ。

振り切れる、と言い換えてもいい。

ある意味人が人であるための安全装置なのかもしれない。

そうこうする内に、奴がメーターを振り切って静かに戦闘態勢へと移行したのが分かった。ぎしり、と鎧が音を立てる。それは主の殺気に耐えかねた鎧の悲鳴にも聞こえた。伸縮自在に見えるサーガ級の鎧をして、耐久度が足りなくなるお前にドン引きする。色々精神衛生上よろしくないものがただ漏れなので、少々どころか全体に控えてもらいたい。威圧感だけで肌にびりびりと痛みが襲ってくる。本当に人外だな。とうてい同じ人間とは思えん。

人外VS人外、場違いなので、退場してもいいか？ 邪魔はしない。あとは若いお二人で、存分にやり合って……もらっては困る！

狭く汚く風が吹けば揺れ、何もなくとも家鳴りする我が家だが、それでも私の城だ。私有財産を脅かす奴は皆消えてくれ。

不意に、ぐうつと奴の身体が沈み、爆発的なエネルギーが全身に溜められ、今にも解き放たれようと

「リーダー、ここは私に任せてもらえませんか」

出鼻をくじかれた。奴は殺気をゆるめ、声をかけた魔法使いの女の子の方をうつとうしげに見やる。

うつとうしそうだと？

先ほどから違和感満載でついていけないわけだが、誰か補足説明をしてもらいたい。

奴は小さく嘆息し、「勝手にしろ」と吐き捨てた。魔法使いは自分の背丈よりも大きい杖を手に、得たり、とうなずく。

「おやおや、ずいぶんかわいらしい方が私の相手をしてくださると？」

笑い含みに銀色の頭髪をした魔神が言えば、

「僭越ながら」

魔法使いは、杖を握っていない片方の手で己のローブのすそをつまみ、貴婦人のように礼をしてみせた。

「このスズキがお相手つかまつろう」

言うなり、杖を……投げ捨てた。

うおい！

投擲武器か！ 飾りなのか！！ その杖意味ないのか！！！！！！魔法使いの女の子、スズキはとっさの瞬発力を駆使して、魔族に急接近し、殴りかかる。殴りWIZか！！ おい！！ どうなってる、責任者出頭しろ！！

壁を大きくぶち破り、勢い、奴らは戸外へ。

ああああ、修理、どうするんだ！ あとで請求するからなあ！！

！！

ぱあん！ と次々に空気の弾ける乾いた音がして、某龍球漫画もかくやという肉弾戦が開始されたらしいが、正直に言おう。

何も見えなかった。

私の動体視力は……村人なのだ。

実にあじけない実況となった。申し訳ない。しかも、何故か奴が解説してくれる。

「ああ、あの変態は影世界に入ったようだね。あいつらの得意技だよ。本体は影世界に潜んで、分身や護衛兵を陽世界に出す。さすがに腐っても上位魔神だな、戦術級指揮官なんだろう。今変態が展開した百三十体のうち、兵隊ポーンを八十八体撃破したね。騎士ナイト級はさすがにてこずっているな。まあ時間の問題だろうけれど」

意味が分からない上に、実際時間の問題だった。

護衛達は順調に破壊むしろ破裂させられ、本体が引きずり出されるにあたって、彼女はようやく魔法使いらしい呪文を唱えた。

「召喚。火球を千。氷の矢を千。雷槍を千」

空中に赤、水色、黄色の鋭い何かがびっしりと浮かび、隙間もないほどに空間を埋め尽くして、魔神を包囲する。

「目標。変態。襲え」

それは呪文ではないと思う。

空中に展開していた物騒極まりない物質によって構成された大きな魔方阵は、彼女の一言で点に収束した。あれだけの物量攻撃は、もはや数の暴力に破壊の力だ。魔神は避けうるべくもなく、大量のそれこそ点が面へと至る攻撃に押し潰されて、見えなくなっていく。だが。

「あれも影」

奴が静かに指摘する。本体ではない、と。

気づけば、魔法使いスズキの背後に、真っ赤な口を耳まで裂けんばかりにがっぱりあけて笑う魔神が現れていた。

「甘いですねえ。チェックメイト」

血も滴るような赤い口腔に剣山のような鋭い歯が並び、スズキにかぶりつこうとした瞬間、

「甘いのはあなた」

串刺しになっていたのは、魔神の方だった。

地中から、百、千、いや、万の針のごとき剣が。

魔神の身体を貫く。

私は瞠目して動けなかった。

「ばかなの？ 死ぬの？ ああもう死んだ。いちいち呪文唱えて、手口晒す馬鹿がどこにいますか。フェイクに決まっているでしょう」
そうだ。

千の火球。

千の氷の矢。

千の雷槍。

そして、本命は、地中に潜む万の魔剣。

魔法使い。

魔法を使うものではない。

火の玉を出したり、物を凍らせたり、放電したりは、できる人も割りが多い。

だが、その使用を戦術まで高め、あるいはなんらかの汎用性を見つけて大衆に還元するものをこそ。

魔法使いというのである。

真の魔法使いは少ないが、私は生まれて初めて『魔法使い』を見た。
そして。

空中で燃え上がる炎と帯電する青白い火花、氷は溶けて蒸気をもうもつと巻き上げ、止めとばかり地面からの魔剣に突き破られ、崩壊した我が家を見た。

倒壊する前に、奴が私を抱えて外に移動してくれたのだが、まあひとつ言わせてくれないか。

お前ら本当に消えてくれ。

絶望はっ 人をつ 殺せるんだ！！ 私の財産が！ 家が！！

思い出が！！ 職場が！！！！ うああああああ！ 仕事っ 仕事をこれからどうするんだ！？ 今後どうやって生きていけばいいのだ。仕事道具は全て中だ！ 筆も画材も自転車操業で遣り繰りしていたんだよ、貧窮する生活の中、大枚はたいて買った呪物デザイン

画集ミレニウム限定版など、もうどれだけ金を積んでも手に入らないiiiiiiiiiiiiiiiiiiii! 現存する部数はどれほどのものか、鑑賞に堪えうる現物をコレクターが手放すものか! ちくしょう、神よ死ね! むしろこいつら死んでくれ!! 明日からどうすればいい、もう終わった。まさに人生オワタ。

灰になる私に、奴がいそいそと声をかけてくる。

「あの、あーちゃん。俺、これから一緒に」

私は奴の言葉を見殺しした。怒りで全身が燃えそうだった。よくもよくも人の家を。私の全てを。許さん。奴の前を素通りして、魔法使いスズキの前まで歩いていく。彼女は、ちょうど瓦礫の下に転がる杖を億劫そうに引っ張り出しているところだった。その彼女を捕まえ、

「賠償と謝罪を請求する」

「いきなりそれですか」

スズキは杖を拾って装備すると、平然と応じた。

「我々には大陸間勇者特例措置法が適用されますから、魔族との戦闘によって生じた景観の破壊、建物の損壊、私有財産その他人命の損失等については、一切責を問わないことになっています」

知っている。その悪法を作った奴を今心底呪殺したいと思っていたところだ。

「いちいち破壊活動の責を問われていたら、勇者業なんてやっていられませんからね」

ああ、それはそうだろう。国も、個人の財産権の侵害など、魔族侵攻という大事の前の小事とそのような法の整備を行った。

「私が言いたいのは、わざと私の家を壊したことだよ、お嬢ちゃん」
スズキは薄い紫色の三白眼でじろりと私をねめあげた。

「なるほど。頭はそこそこ回転されるようですね。失礼しました」
馬鹿にしているのか、本気で感心しているのか、微妙な線だが、それはいい。

問題は、彼女がにやりと笑って続けた次の台詞。

「私はスズキと言います。この村落周辺を含む半径百Kの地形を利用した巨大立体魔方陣。とても見事です。この要が、あなたのうちだったんですが、壊したらどうなるのかと思って、ついでに職権乱用しました」

小娘。

何を言うか。

意味が分からない。まったく分からない。半径百Kというのは、大体半径半径五十キロメートルと思っていただきたい。地形を利用した巨大魔方陣？ 何を言っている。その扇の要がうちだと？

「分からないという顔をしていますね。誰が仕掛けたのか、壊せば分かるかと思つて。まあ、学術的好奇心というやつです。壊しても自然災害が起こるといったことはないと思つたんですよ。非常に高度にピンポイントに集中する仕様の魔方陣ですね。ああ、今分かつたんですが、これは各地のエネルギー集積装置みたいなものですね。この家に住んでいる限り、肩こり腰痛頭痛歯痛歯槽膿漏とは無縁の健康生活が送れたことでしょう」

もうどこに怒りをぶつけたらいいのか分からない。なんだその効能は。脱力させないでほしい。

「それはさておき、あなた不思議ですね。何故生きていますか？ 物凄い禍ツ星、凶星の元に生まれていますよ。いつ死んでも…

…あ、それでこの魔方陣なのか」

ほん、と実に軽くスズキは手を打った。今、何か、とんでもないことを耳にしたような気がするが。色々飽和状態になり、とにかく言葉が出てこない。

その後、少し考え込むようにして、「もしかして、」と何か言いかけたのだろう。

しかし最後までその言葉を口にすることはできなかった。

奴が、スズキの首にぴたりと剣先を当てていた。

「リーダー、私、一応パーティメンバーだったと思うんですがね」

「……」

怖い。奴が怖過ぎる。無言で口元は緩やかに弧を描いているが、目が笑っていない。仲間だろうと、首を切り落とすことに一切の躊躇をしない。そうその目が物語っている。

もう嫌だ。

誰かまともな奴はいないのか。何のために口がついているんだ。

「おやおや、仲間割れですか」

また聞き覚えのある声が出て、咄嗟に奴が私を引き寄せる。

「再生能力、か」

奴の呟きのとおり、魔神は串刺しにされたはずが、元通りに復活していた。なんなのこの再生能力。ありえない。理解したくない。

次は第二第三形態か。貴様は某ゲームのラスボスと同じ仕様なのか。「まあその剣はしまってください。くくく、ちよっと遊んだだけですよ。さて、私は私の役目を果たさねば」

魔神が懐より、何か取り出してみせる。プリズムに輝く球体。あれは、映像球だ。国家予算で購入するような高額商品である。魔神は惜しげもなく、映像球空中に放つ。

「リュ・リュリュリュリュ・リュ殿下の言づてを」

大変つつこみどころのある名前を唱えるやいなや、たちまち、陽炎がほとばしり、空間が歪んだ。

空中に浮かぶ水鏡に、映像が結ぶ。

『人の勇者の協力を感謝する』

そこには、黒い髪、切れ長の赤い目をした中性的な美貌の魔神が映し出され、いきなり意味不明の台詞をのたまった。咄嗟に奴の横顔を見ると、無感動な目で見ているが、すでに既知のようで、耳を傾ける構えだった。どういうことだ。勇者と、恐らく皇族級の魔神が知り合いだ？ どんな経緯でだ。

疑問は尽きなかったが、今は映像球である。

『『災い』は聖都を目指し、集まりつつある。多忙のところ恐縮の限りだが、ぜひとも彼の地へ向かっていただきたい。

私も配下の者を向かわせるが、我らの眷属ははっきりいって小細工に向いていない。

人間など滅ぼせばいいではないかとの脳筋ばかりで、賛同者が多すぎて頭痛がする。

奴らは、戦争は物量だと知らんのだ。

脳筋どもを押しとどめるだけで、私は今にも過労死しそうだ。

阿呆ばかりとはいえっても、人間どもに何もかも我らのせいになんてはたまらん。

『災い』の痕跡を探查し続けたが、どうやら発生源は宇宙空間で間違いないようだ。何百何千何万かも分からぬ断裂があつて近づくことも容易ならん。

追伸。言つてを頼んだ侯爵が貴殿らに喧嘩を売っていないか激しく心配だ。

いい年をして子供の使いもできんのか。まさかそんなことはあるまい。そう信じたい。

奴は眷属でもインテリで売っている。信じて私はカロン侯爵に橋渡しを頼んだ。だが私は経験則故か、疑いの心に打ち勝てぬ。皆義務より何より自らの愉しみを優先しおる。

戦闘狂ばかりで、目先の誘惑に飛びつく輩がほとんどだ。だから魔族は和平にむかんのだ。

いつもいつも人がお膳立てした和平会談をぶち壊しおつて、私はもう「

後半ほとんど愚痴となり、途中で途切れた。

恐らく話の中で言及されていたカロン侯爵本人であろう魔神が、

大本の映像球を叩き割った為である。

大変いい笑顔であつた。

ある少女の独白

認めない。こんな世界など。気持ちが悪い。ここは私の世界じゃない。

あの日、あの運命の日、母親と進路のことで喧嘩してしまった。殴られて、「大嫌い」と捨て台詞を言い、家を飛び出してしまった。私が悪いのに。謝れなかった。友人に相談して、彼女に、「もう分かっているんだよね。謝りたいんだね」と言われた。私は泣きながら頷いた。帰ったら、謝ろうと思っていた。

その日、私は殺された。

もう二度とお母さんにごめんなさいと言えない。私は最低の娘のままだ。

ごめんなさい。

大嫌いと言ってごめんなさい。

大嫌いと言ったまま、二度と撤回できなくてごめんなさい。

親より先に死んでしまつてごめんなさい。

お父さん。お母さん。お兄ちゃん。真人。雪江。美登里。みんな。もうあえない。

『みんなを救いたいから』

あの声は言う。

『あなたたちの力が必要な』

あの声は当然のように傲慢を傲慢とも思わぬそれで訴える。

『私が守ってみせるから』

だから私の人生を捧げよと。
救う？ 何様のつもり？ それは、私の、私たちの人生を捧げるに足るの？

こんな終わり方ってあるの？ こんな私じゃない。私の顔じゃない！

気持ち悪い。私の手じゃない。私の足じゃない。視界が違う。声が違う。何もかも違う。

私なものか。

わたしなものか。

このせかいはちがう。

許せない。

こんな世界認めない。

会いたい。帰りたい。ごめんなさい。ごめんなさい。大嫌いとい
ってごめんなさい。

嘘なの。

本当は大好き。会いたいよ。お母さん。おかあさん。

お父さん、お兄ちゃん、助けてよ。この世界はいやだ。

赤の他人が私の家族だという。小さな子供たちが、私の友人だと
名乗る。

違う！

私のお父さんとお母さんは、お兄ちゃんは、妹は、家族はたった
一つだ！

お前らなんか知らない！！ かえして！！ 皆を、私を、かえし
て！！

あの女。絶対許さない。

帰りたい。かえりたいよおお。

嫌だ。

ちくしょう。

ゆるさない。

憎い。

絶対。

ゆるさない!!!

嘘。

謝るから。

だから。許して。

助けて。かえして。

お願い、かえしてよ!!!

かえしてよおおおおおおおおお!!!

ある転生者の少女の独白。

あなたを忘れない

嫌な夢を見た。

私は上半身を起こして、暗闇に目を凝らした。

今日は勇者や魔神など人外の輩がやって来て、家が壊れたり家が壊れたり家が壊れたりして、精神的打撃を嫌と言うほど味わったためであろう。もうこの辺、私の受けたダメージを行間に読み取っていただきたい。

あの後魔神はやたら爽やかな笑顔で去り、異変を感じて合流した勇者一行の聖騎士は想像の限界を超えた人物だったし、私は心身ともに疲れ切っていた。

「ついて来るな」

表情筋も仕事を放棄して、私は一言言い放つと、崩壊した我が家を後にした。

明日のことは明日考えよう。

勇者一行の破壊活動の結果、そう思うしかなかった。

その後、私は村で唯一酒場を営む幼なじみの家に泊まりに来ていた。

旦那さんは町に買いつけに行っているため、二人用の寝台にお泊まり会のように一緒に就寝した次第である。

暗闇に身を起こした私のけはいを感じたのか、隣で寝ていた幼なじみが寝ぼけ眼で目をこすりながらふにやふにやと声をかけてきた。

「どおおしたのおおお」

けぶるような白金髪ブリッチナ・フロントは夜目にもふわふわと内から光を放つかのよう
うで、眠そうに瞬く青い瞳はとろけそうに甘く、まるで砂糖菓子のような少女
ただし五人の子持ち、旦那は見た目野獣中身兎で名高いでこぼこ夫婦の中身野獣の方である。

「ああーうん」

うまく言葉の出てこない私に、彼女は合点したのか、

「……そうよねえ、寝つけないわよねえ」

どつこらしよ、と大変ばくさいかけ声とともに、寝台を起きると、「待っててねえ」と部屋を出て行った。

帰って来た時には、その手に大きな酒瓶と、グラスを二つ抱えている。

「じゃあん。リリーベルの秘蔵！ 荒ぶる！ 幻の！ 火竜の酒！

！ きゃっほー！」

リリーさん。あんたって人は……それはあなたのファンがあなたに捧げた貢ぎ物とはいえ、旦那さんが……とても楽しみに……いえ、何も言いません。本当にありがとうございます。お気遣いとてもうれいんです。ごめんよ、旦那さん。希に見る善人のあなたなら、多分糸目を垂れ、「うん。うん。いいよ」と言うだけだろう。

ただ、大柄なあのだ旦那さんが……森の熊さんが……しょんぼりと背を丸めて……

嫌だっ あまり想像したくない。悲しくなるだろう。

ああ、分かっている。まあ、あれだ。旦那をないがしろにしているわけじゃなく、落ち込む私を元気づけようとしてくれているのだろう。それが分からんほどアホじゃない。彼女なりの最上級のやり方なのだ。

「あ、大丈夫、大丈夫。二本あるから！」

ぶいっとVサインをする幼なじみに、私は気持ちよく酒が飲めるようにとの気遣いを感じ、思わず破顔した。

まったく、彼女はいい女だ。

私が男だったら嫁さんにしたい。

しかし、あの『荒ぶる幻の火竜の酒』こと『荒幻火竜』を二本もせしめたのか。恐ろしい奴。本気でその象形文字がまぶしいわ。

「かはーっ おいひいいいいっ」

一杯豪快にあおった後、寝台の上で身を擦って叫ぶ幼なじみの狂

態に、容姿と言動の不一致は残酷だと涙した村の男どもを思い出した。

だが、この幼なじみ、幼少時は丸坊主で、正義感あふれる大変な乱暴者だったため、村の男どもは、弱い者苛めなどが発覚した場合、漏れなくぼこぼこにされた覚えがあるはずだ。かくいう私も、振る舞いの悪さから天誅紛いにぼっこぼこにされた。私の性格が矯正されたのは心身ともにふるわれたその鉄拳のためであろう。

「あーちゃんももつとのみ नाही！」

色々事情を話した際に、ぽろつと昔のあだ名の話が出た途端、すでもう私は「あーちゃん」呼ばわりが定着してしまった。

何故こうなつたし。

「もう充分飲んでいるよ」

「そうお？　そうお？」

幼なじみは、下から人の顔を覗き込み、ぐいぐいと押し付けていた瓶を引つ込めると、それからふつとまじめな顔になった。

「大変なことになつちやつたね。私、力になるからねえ」

「うん、ありがとう」

「社交辞令じゃないのよ？　しばらくうちで暮らしなさいな」

申し出は大変ありがたい。ありがたかったが、私は辞退した。

「いや、都市部に出ようと思つんだ」

「ええっ　あのやる気も根気もないあーちゃんがどうしちゃつたのよおー！」

「ああ、認めるよ。認めるけど、真顔で聞くのは止める」

「う、うん、でもね、無理しなくていいのよお？」

「無理はしていないさ。どっちにしる、財産を全部失つたんだ。あとは、銀行に預けていたなけなしの金をおろして、しばらく都市部で呪物下請けの注文を受けようと思つんだ」

「うちでもいいじゃない？」

確かにそうだった。宿泊費も馬鹿にならない。

だが、何故か、私はこの歳になって、都市に出ようという気持ち

になっていた。

幼なじみは、じつと私の表情を伺い、酒瓶を寝台に下ろした。

「あーちゃん、変わったわねえ」

「変わらない人間なんていないよ」

「そうだけれど、私達の中でいつちばあん変わったのって、あーちゃんよ。逆にぜんぜん変わってないのは、ユーちゃんね」

ユーちゃんとは、奴のことである。皆、幼少期のあだ名で呼ぶことにしたらしい。

「人って不思議よねえ。見た目や口調や態度が変わっても、中身が変わらない人もいれば、見た目が変わらなくても、中身が変わる人もいるのよね」

前者は奴とこの幼馴染であろう。丸坊主から砂糖菓子の精に驚異の劇的ビフォーアフターしおったくせに、中身が……うむ、何も言うまい。

「あーちゃんってば、ある日突然性格が激変したじゃない？ そんなでもってさあ、もう世の中全部死ね！ 滅びろ！ みたいに荒ぶってたわよねえ。だれかれかまわず喧嘩売ってさあ、ぼっこぼこにされても喧嘩売ってさあ。強きも弱きも見境なく喧嘩売りまくってもー見てらんなかったわよ。あ、私も許せない場合はぼっこにしたけれど」

止めて。

黒歴史を掘り返さないでくれ。

盗んだバイクで走り出すを地で行ってました。羞恥心で死ぬるレベルです。本当にありがとございました。顔を覆って穴があったら本気で入りたい。

「あれよねえ、おじさまとおばさまがその後すぐ亡くなって……あ、ごめんね。ちよっとお酒の飲みすぎたみたい。無神経落ち込むわあ」

「ああ、別にいい。あんまり両親とも思っていないんだ。育児放棄は有名だっただろっ？」

「ウーン……」

幼なじみは、どうも納得いかなさそうに首をひねる。

「おじさまとおばさまは……引退前は高名な冒険者だったのよね」「らしいね。よく分らんが」

私はグラスを適当に揺らして、生返事をした。

「そのう、スズキちゃん？ って魔法使いの女の子がね、あーちゃんちがすごい魔方陣の扇の要になってたってゆってたんでしょ？」

「ああ、そうらしいけれどね。肩凝り腰痛齒槽膿漏だったか、そういうのとは無縁でいられるらしかったそうだ。ありがたくもぶっ壊してください」

ううーん、と幼なじみはますます眉根を寄せる。

「それってねえ……誰が作ったのかしらあ？」

「……さあ」

「あのねえ、うちの村でそういうことができるのって、おじさまとおばさまくらいじゃないかしらあ？ 何か理由あつてのことと思うのよ。おじさま方がよく家を出ていらしたのは、その半径100Kにわたる魔方陣の作成のためだったんじゃないのかしら？ だって、村のあちこちにある石碑とかって、おじさま方の寄贈品でしょう？ 村の外の魔方陣構成の何か？ とかもそうじゃないのかしらあ」

あまり考えないようにしていた。

考えたくなかった。

こちらの両親がしていたこと。

その意味。

私の記憶が徐々に浮かび上がり、幼い『私』を押しつぶしたのは、幼い『私』のストレスと密接に関わっている。

幼い『私』は、両親に家に閉じ込められ、育児放棄されたと感じ、常に苛苛していた。

癩癩もちで、性格が悪く、弱いもの苛めでその苛立ちを紛らわすような子供だった。

そして、そのストレスや、段々はつきりとしてくる自我に比例し

て、前世の私も肥大していき、やがては白い画用紙を黒のクレヨンでぐちゃぐちゃに塗りつぶすようにして白から黒へととって変わった。

どこからどこで途切れたともうまく言えないし、いつの時点からとも言えない。

周囲から見ると、性格が激変したというらしいが、『私達』は途切れなどなく、徐々に比率が変わっていったとしか言えないのだ。

幼い『私』の苛立ちが、果たして両親へのそれだったのか、私自身の世界の嫌悪であったのか、今となっては渾然一体として区別すらつかない。

完全に目覚めた私は、とにかく全てが許せなかった。

こちらの両親が死んだ後は、私を家に縛り付ける者もなく、外を出歩き、道端で会う人に喧嘩を売り、あるいは自傷行為に近いような暴力を物相手に向けては必死に自分を保とうとしていた。

この身体は自分のものではない。そんな拒絶感、違和感から逃れようと、自分を壊そうとするマグマのような衝動をなんとか外に向けることで発散させようとしていたのかもしれない。いわゆる自己防衛機能の一種だったかのようにも思える。

さすがに自制が働いたのか、年下の子供相手ではなく、年上の村の男の子相手に喧嘩を売っては、ぼこぼこにされ、それでも食いついて、最後には気味悪がられていたと思う。

血まみれになっても向かってくる幼女。気持ち悪い。這いずりながらざんばら髪で近寄ってくる。男子涙目。それなんて幼女貞子。不気味で仕方ない。うむ、我ながら大変恐ろしい光景だ。

とにかく、何かに怒りを向けずにはいられなかった。

理不尽。

憎悪。

絶望。

うずまき原色のそれらは、行き場を求めて荒れ狂い、最後には疲労から停滞し、無気力へと落ち着いたのである。

それが現在の私だ。

黒歴史ということ、勘弁していただきたい。

とはいえ、私のトラウマは、別の形でも継続している。

私は、いまだに、この世界を認めていないのだ。

この世界に、つながりを持つことで、以前の私の家族や友人が風化してしまうのを何よりも恐れ、唾棄している。

この世界に従属することは、私の身に降りかかったあの理不尽を、緩慢に受け入れ、許してしまことだと。

それだけは、絶対に嫌だ。

笑いたくば笑え。愚かといいたくば言え。くだらない自尊心だと、新たな人間関係を受け入れて大人になれと諭したくば諭せ。

絶対に受け入れない。絶対にだ。

それが私の怒りの形だ。以前の私の大切な人たちを忘れぬためのよすがだ。

自分でも分かっている。

現実を認めていない、と。

だが、こんな現実、私のほうが認めてやらん。

「あーちゃんつてば、まあた昔みたいなぎらっぎらした目つきになつてるわよお」

指摘を受けて、私は曖昧に笑った。唇の端が強張っていた。

二度あることは二度ある

二度あることは二度あると。誰が言った。

いやいや、まだ二回目だし。いやいや、一回もあれば十分だし。

宴もたけなわ、ぐだぐだと我々が寝台上で昔話という名の絶賛羞恥プレイに花を咲かせていた時だ。

『H I I I i i i i i i i i I I I I I I I I I I I I i i i i
i i i i i i i A A A A A A A A A A a a a A A A A
A A A A A A A A A A A A ! ! ! ! ! !』

がしゃん、と幼なじみの手からボトルとグラスが落ちる。酒瓶は床上をごろごろと転がっていき、机の脚にぶつかって動きを止めた。

「な、何、今の」

外柔内剛な彼女をして青ざめさせ、手元を不如意にさせるそれは、戸外から殷々（いんいん）と響き渡った。

ひいああううう、と絹を裂くような、それとも身を擦って狂乱するような、とつてい人のものとも思えぬ悲鳴。絶叫。あるいは嬌声か。

高価な酒が白いシートに琥珀色の水たまりを作り、あつという間に吸い込まれて行く課程。

『N n n n n n n n n n n n n n n n n n H i i i i i i i i i i i i
i i i i i I I I I I I I I I I i i i i i i i i i i i i i i A A

A a a a a a a o o o o o o o o o o o o o o o o o o o
o o o o o o u u u u u u u u ! ! ! ! 』

第二波。

耐えきれずに、幼なじみが上半身を折り曲げ、寝台に嘔吐する。

「おい、大丈夫か!？」

気の利かぬ間抜けな台詞しか出てこない私に、彼女はえづきが治まらないものの、からまりもつれる白金糸の下、片目をつぶってみせた。「だいじょうぶ」と言いかけ、再びもどす。

同時に、必死に立ち上がろうとし、

「子供達が、」

と不明瞭な声でうなった。

そうだ。私は阿呆か。大人は。大人って奴は、年を重ねたから大人じゃない。私は確かに年齢をただ積み上げたばかりで大人になりきれない愚か者だ。だが、今こそ大人が子供を守らんでどうする! 「すまん、辛いだろうが。お子どもの様子をみてくる。いいな?」 すとん、と冷静さが落ちてくる。嘔吐する彼女の丸まった背中をさすり、囁くと、

「うん。うん。お願い」

あの子たちを。

続かぬ台詞を確かに聞いた。

「任された」

私は頷いてみせた。

夫婦の寝室を後にし、五人のお子どもが寝ている子供部屋に転げそつになりながら辿り着くと、ドアノブに手をかけた。くそっ 指が滑ってドアノブが回らん。

「っおい!」

静かだ。

嫌に静かだ。

こそ、とも音がしない。不謹慎だが、悲鳴でも泣き声でも聞こえた方がまだいい。

無事なのか。無事でいてくれ。頼む。

汗で指が滑る。くそっ もどかしくも乱暴に扉を開け放った。

子供達は寝台の上だった。

しかし。

喉元を押さえ、目を限界まで見開き、ひゅうひゅうと忙しない呼吸を繰り返す。

シヨック状態なのか。

尋常ではない。

上は一二歳から下は四歳、五人とも同じような状態だ。

お子ども五人に、こちらら身体は一つ。どないせーっちゅうねん！！ 半ば切れながら、私は自分の指を噛み切った。

いってえな、こんちくしょう。

涙目で血が止まらない内に、お子どもの額に『元気回復』のマークを手早く書いていく。ぶっちゃけ気休めだ。

私の各適性値 S S S (この辺はサーガ級と言われる) A G による + - 評価

魔力値 E + (天災人災起こせるよ的エネルギー値)、

霊力値 E + (精神値。カルマと密接な関係。精霊・霊的なものとの交信適性)、

神力値 G - と最低値 (神との交信適性)、

業徳ポイント 0 (極端にどちらかが + - 数値を振り切るとデンジヤラスな人生を送れます。幸運・悪運他奇跡にも関係。人為的に比率を歪めることも可能)

以上はもう我ながら悪戯小妖精が指を指して笑うレベルだ。

E は呪物下請け業ができるぎりぎりのラインである。私は適性からいえば質量ともに最低の呪物下請け業者だ。

だが腐ってもプロの技をなめんな。素早く緻密にだが正確に！！これで私は糊口をしのいでいる！！

『元氣回復』のマークは呪印教本でも基本中の基本。そして繰り返し返す。基本なめんな。

簡単、速い、そして 低魔力値の者でも、入門に適したその伝導性・確実性。

これは、本来人体が持っている回復の泉の効果を引き出すもの。お子たちの命の泉を信じる。彼らの生命力を信じる。

自分の魔力総量よりもよっぽど信じられるわ！

血が止まると、もう一度食い破る。よし、五人目……息が止まっている！？ 一番後に回した一二歳長女おおおお！！ なぜ四歳児じゃなくて一二歳が！？

勘弁してください。どちらにせよ、呼吸停止なんぞ、いきなりハドル高すぎるわ！ ともかくにも手早くマークを描き、ああ、駄目だ。全然改善されない。息を吹き返さない。

焦って指が震えてきた。落ち着け私。

脳に酸素が行かない状態が続くのは大変よろしくなかったはずだ。こうなったら人工呼吸をした方がいい。確か、呼吸を確かめた後、気道を確保して、鼻をつまむ？ ええああうう、ああ、くそ、記憶が定かでない！ なんとという鳥脳！

女は度胸というだろう。

気道を確保し、摘み、そして口を覆う、とそこで、

「あーちゃん」

暗雲立ち込める呼びかけに、私は飛び上がった。

「ちょ、おまつ、驚かすな！！」

奴である。勇者さまである。いつの間に背後に立っていたんだ。全然けはいを感じなかった。あと、不法侵入だと思えます。気になつてこのあたりをうろろろしていたと言う奴に、若干どころかかなりストーリーかという言葉が口元まで出かかったが、飲み下す。

「なんでもいい、お前、回復系の法術は使えるか？ 息が止まってるみたいなんだ」

「ごめん。俺、自分自身の超回復はできるけれど、他人は癒せない。

聖騎士のゴンザレスならできると思う」

ああ、あの濃い聖騎士の人か。うん。ああ。しょっぱい気持ちになりながら、

「そうか。聖騎士殿はいまどこだ？ 至急こちらに来てもらえないだろうか」

焦りからか、声が上がった。

先ほどの恐ろしい絶叫、悲鳴。あの正体も気になるが、優先事項は人命救助だ。

「……分かった」

奴は親指と人差し指をくわえると、何やら口笛を吹いた。かに見えた。というのも、私には音が聞こえなかったのだ。

「おい」

「犬笛。ゴンザレスなら聞こえる」

うん。分かった。お前のパーティーメンバーなものな。何も言わんよ。

「リーダー、呼んだっ!？」

窓から巨体の影が。早すぎる。いくらなんでも早すぎる。いいか、私はつつこまない。つつこまぬといたらつつこまないのだ。

撫で付けた栗色の髪に、はちきれんばかりのマッスル・ボディ。

聖騎士殿である。

「治療しろ」

一言告げる奴に、一目で現状を把握したのか、聖騎士殿はばちん！ と音のしそうなウィンクをくれた。

「あたしに任せて!!」

うむ。見事なマッスルオカマである。

仮にも勇者パーティーの一員、あの魔法使いのレベルと比肩するならば、信用しても大丈夫だろう。

聖騎士殿の「ハーリーハーリーハーリー!!」あたしの願いを聞いてっ」と神を急かす祈りの言葉とともに、十二歳長女がげげほと息を吹き返すのを見て、私はずるり、としやがみこんだ。

人だつたかに思えるもの。

内臓を剥き出しにし、震え、顔面をあわ立たせ、身体は半ば溶解してゲル状、肥大化した泣き叫ぶ女の姿。

その声はこう言っているのではないか。

わたしを、たすけて、と。

呆然とする私の肩を、奴の手が触れた。

払うこともできなかつた。

震えている。

奴の手？

違う。私の全身が。

「あれが、『災い』。俺達が追っているもの」

ほとんど独り言のようにして言われた言葉が、右から左に通り返されていく。

もう一度言おう。

こんな厄日はもうないと思った。

だが、二度あることは、きっと三度あるだろう。

彼女の名前は

「わざ、わい？」
神よ。

などとその存在に呼びかけたのは、呪詛以外で十数年ぶりだった。商売繁盛”ガ”のつく女神ならともかく、私が祈ったのは、前世でいう、日本人が抱く”困ったときの神頼み”の神だ。

曖昧模糊としていて、いずこにもあり、いずこにもない、やおろずの神ですらない、そう、概念的な

神なんぞ唾棄すべきものでしかなかったはずが、咄嗟に呼びかけてしまうほど、異常な光景だった。

だが、それよりも。

「おい、助けに行かなくていいのか」

自分は動かずに、幼なじみを促すのも卑怯というか情けない話であるが、他に誰かあるかと言えば、オカマ聖騎士殿は背後で救急処置に忙しい。

代わりに私が単身飛び込んだとして……うむ、スプラッタな展開しか思い浮かばん。

せっかく奴の手で真っ赤なトマトの刑執行を逃れ得たというのに、それはないだろう。

とりあえず、勇者一行のバトルというものはだな、どんなクソゲーであろうと、チームプレイが基本なのだ、諸君。

普通後衛の魔法使いがガチでボス？ と戦闘というのは、まずねーわ。

それどんな縛りプレイ。

命がかかっているので、縛りは止めた方がいいと思うぞ。

私の質問に、奴は少し首を傾げて、薄闇に例のフローラルフェロモンの微笑を浮かべた。

「どうして？」

と、一言だ。何この宇宙人。言葉が通じない。私の背中を嫌な汗が伝う。

「どうしてもこうしてもないだろう。彼女は魔法使いなんだろうが？ 後衛が一人で前衛するのがお前らの戦闘スタイルでなければ、誰でも疑問を呈するところだぞ」

「あーちゃんはいいの？」

何故私に許可をとる。

村人の分際で勇者のチームプレイに口を挟むほど私はでしゃばりでも阿呆でもないぞ。

「だって、あいつ、昼間」

それが。今それなのか！！ 止めてください。そんな理由で仲間を切らなくてくれ。みんなの命がかかっているから！ そもそも彼女はお前の仲間だろう。心と心をつなぐ辛く苦しい冒険を共に同じ釜の飯を食ってきたんじゃないのか。お前の冒険譚を歌ったあの数々の吟遊歌は全部嘘か。嘘っぱちなのか！？

ああ、今はどうでもいい！

私は奴の胸倉をつかんだ。

「私を理由にするな！ そんなくだらん理由なら、とつとと助けに行け！！！！」

仲間だろうが！！！！

空いた方の手で外を指差し、思わず怒鳴りつけていた。奴は理解不能とばかり目を見開いて、

「……あーちゃんがそういうなら」

私の指を嫌な握り方をして外す。

その顔に、焦りは一切ない。仲間を信頼しているから？ それもあるかもしれない。だが、違う。決定的に違う、と私には分かる。

何故なら私は

気持ち悪い。心底奴の笑顔が気持ち悪い。というか怖い。奴は、仲間を自主的に助けに行くことに、何一つ納得していないし、たぶん思いつきもしないだろう。

何一つ、何一つとして、こいつは変わっていない。
言葉が通じない恐怖とはこれほど精神値をがりがり削るものなの
か。

そうだ。短慮だった幼い私は、己が感じたものを苛立ちだとして、
奴を攻撃対象としていた。

今はとてもそんなことをする蛮勇はふるえない。

こんな化モノ相手に喧嘩を売るなんて、どれだけ幼い私は鈍感だ
ったのだらう。いや、鈍く鈍く自分を鈍磨化することで恐怖を攻撃
性に摩り替えたのか。

「行つてくるね」

窓枠に手をかけると、ふわり、とまるで体重を感じさせない軽さ
で戸外へと飛び降りる。

身体の軌跡に白いエフェクトが尾を引き、夜の闇にその姿は燐光
を吹きこぼすかのようにして凜と浮かび上がる。

ああ、絵になる光景だよ。くそつたれ。

自己嫌悪で顔面を覆いたくなる。

口だけ出してしまった。助けに行けなんぞ、よく言ったものだ。

他人にその命を差し出して戦えと強制する。私は糞だ。もう馬糞
でもいい。

自分がされて嫌なことは、他人にはするなと、生前の両親に躡け
られて、何よりも我が身が体験したというのに、咄嗟の場面ではこ
んなお粗末さだ。

ドツボに浸りそうになる自分をそれこそ今は最大の無責任と叱咤
して、せめて邪魔にならない位置で見届けようと窓に近寄る。

肥大化し溶解した女のような『災い』は、頭部と手がイソギンチ
ヤク状に揺らめいている。とっても触手です。本当にありがとご
ざいました。死ぬわあれ。

『災い』は魔法使いに差し向けていた触手を不意に止め、一瞬の
空白の後、ぎゅるり、と方向転換する。

敵性をより奴に感じたのだらう。

突然現れた奴の方へ無数の触手を恐ろしいスピードで放った。
カエルの卵を見たことがあるだろうか？

半透明な管にござるときよる目のような卵が無数に詰まっ
てい

る。
あるいは透明な皮袋に血と臓物をぶち込んでシエイクしたらこん
なじゃね？ というような、その生理的嫌悪を催さずにはいられな
い触手が、奴を四方八方から襲う。

私は動かぬ奴に「馬鹿っ よけろっ」と叫びかけた時、

時間が。

飴細工のように間延びする。

違う。

ぎしり。

確かに、音を聞いた。奴の動きに、鎧が悲鳴を上げる。

腰に佩いた剣に奴が手をかける。

抜き払うその一瞬。

世界は無音になった。

ドン！！！！！！

臓腑に重石を落とされたような、重圧を感じ、世界に再び音が戻
って来た時、『災い』は二つに裂けていた。

そして無数の魔剣が地中から飛び出す。

マッスルなだけに。すまない。各所に謝罪してくる。吊りは勘弁してくれ。

「リーダー、いつも鉄面皮であんまり自分の話をしないんだけど、幼なじみのヒーローさんの話だけはもうこっちが勘弁してはあん！　つてくらいにぶつぶつ無表情に延々語ってくれるの」

光景が目には浮かぶ。奴は興味がないものには、本当に一切関心を払わないところがある。逆に一度執着したものには、こっちがマジドン引きしますというくらいずっと構い続ける性癖があった。そうか、まったく改善されていないのか。

ところで、皆さん会話のキャッチボールという言葉を知らんのか。「あなたには色々聞きたいことも、話したいこともあるわ！　でもまずは、スズキちゃんね。あのこ、また無理をしていないといいのだけれど」

「それはどういう？」
聞きとがめて聞き返した私に、聖騎士殿は「うーん」と少し考えて、

「まあいいわ。スズキちゃん、実はとっても魔法の適性値が低いよ。ほとんどGなの。よくてEってかんじね」

「えっ」

私が仰天したのも無理はない。

私のような呪物下請け業者ですら、平均はE。Gというのは、ほとんど適性なしということだ。

それがあんな物凄い魔法をぶっぱなししておきながら、どういうことだ。

「量が足りなければ質で。質が足りなければ技で補えばいいのよ。技で補えなければ、何かを犠牲にして。あたし達は皆元は落ちこぼれ。でも人並み以上に努力してきた自負があるの」

だから、今こうしているのよ。

そうにっこり笑う聖騎士殿に、私は断じてときめいていない。

ただ、ちよっと胸を打たれただけだ。

この夜、『災い』の一端を見た私が、部外者ではなく、禍中の人となるのは、戻って来たリーダーこと奴が聖騎士殿に剣を向け、ひと悶着を起こした後のこと。

もめる二人をおいて、魔法使いの少女はぼろぼろの身体で杖をつきながらこちらまでやってくると、

「昼間はすみませんでした」

あっさり謝罪した。

面食らう私に、彼女は頭を下げ、強い、とても強い眼差しを向ける。

「私の名前はスズキ・シヨウコ。字は、鈴に樹木の木。水晶の子と書きます。以前は日本人でした」

絶句する私をおいて。むしろ置き去りにして。

物語は幕をあけた。

えびそーど業徳

業徳^{カルマ}ポイントというものがある。

実は、近年知れ渡った概念で、その歴史はそう古くない。

百年ほど前の人物に、カーシム・シルターンという男がいる。

『業徳』の概念及び『業徳賭博スキル^{カルマキャンブル}』を世に広く認知させた人物である。

己の徳を数値化し、神に奉納することで、人為的に奇跡を起こす。ただし、その成功は、確率論でしかもたらされない。

故にギャンブル。

しかも、彼特有のスキル『徳の前借り』によって、使役神への負債が莫大に膨れあがった結果、彼は今の世でも神の奴隷を続けているという。

ちなみに、嘘か誠か、彼の口癖むしるぼやきがこう伝わっている。『また奇跡を起こしてしまった……せつかく貯金した徳が全部消えてしまったよ。また、また神への負債が……ッ』

古代失意の体位^{ポーズ}と呼ばれる『orz』を体現しながらの台詞であったという。

また、彼は、魔法実験により消失し、時と場所を忘れて世界を彷徨う『アルルヤードの上位魔法の塔』の攻略メンバーとしても有名である。

この塔の由来は、古代魔法再現実験に失敗した結果、塔自体が時空の迷子となったといわれ、ある時草原に出現したかと思えば、また別のある時王都のど真ん中に現れ、霧が晴れるとともにその姿を消していたとも目撃談が各地に残っている。

塔内部においても、時間の流れはでたらめで、扉を開けた瞬間、外の時間と連結して内部の人間が蒸発したのだ、逆に別の部屋では数百年の時が流れておきながら、ある部屋では一時間しか経っておらず、当時の魔法実験時の教員・学生が脅威に備えて籠城していた

だの、色々と逸話がある。

これらの逸話をまとめた『時を翔る教員』は、その著者が救出された当時の塔構成員であるともいわれ、中々鋭い考察に飛んだ一冊となっているので、本件に興味関心があれば一読をお勧めする。

さて、かの塔の攻略は、その特殊性からSSクラス冒険者をしても困難であり、更に特殊とも言われたカーシム・シルターンの業徳賭博スキルがなければ、後世まで謎を解明することは不可能だったろうというのが定説だ。彼のスキルはある意味反則技であった。

自らの領分を超えて、『奇跡』を起こすというのは、本来神官、祭司の領域だ。

しかし、彼は徳を捧げ、しかもそれを『賭博』^{キャンブル}化する ベット
することで、本来成しえないレベルで神の恩寵を手にしたわけである。

ん、そこ、何かね？

ほう、業についてか。

これから順に話していくつもりだったが、つまりこうだ。

徳はすなわち善行、神への供物。

業はすなわち悪行、悪魔への供物。

ああ、しかし君達。若者は浅慮な行為に走り勝ちであるからして釘を刺しておこう。

つまらん悪行を重ねて業ポイントを積み上げようなどとはせんことだ。

悪魔が好むのは小悪ではない。巨悪だよ、君達。

徳は小さな善行の積み重ねでたまるものだが、業というのは意外にこれが難しい。

大量殺人などでも起こさんかぎり、とうてい悪魔の好む業足りえないのだ。

しかも、ここに落とし穴があつて、あまりにも殺人を重ねると、業ではなく英雄ポイントに転化されてしまうことがある。あまりにも異常な個人の突出は、人口に膾炙^{かいしゃ}されることで、かえって英雄視

されることがあるのだ。

戦争時における大量殺人などが代表的な例だな。

この辺りもまた神の領分になるわけだが、一つ気をつけたまえ。今の事例のように、善悪というのは、我々の観点によるものではない。

神々の視点による善悪の区別なのだ。

それは、我々人間にはとうてい理解の及ばんところにある。

女神の寵愛を受けたカーシム・シルターンも、当時は彼のスキル名のとおり遊び人で、世間では冷たい目を向けられていたという資料が残っている。得意技は古代謝罪体位『土下座』だったとも伝わっている。特にその『スライディング土下座』がいたく女神のお気に召したそうで、この辺のことは専門課程が別になるので、詳しくは古代体位の授業を取ることを薦める。

さて、再度繰り返しになるが、善も悪も神の判断とするところ。

つまり、普通に生きていても、生まれた瞬間から膨大な業徳を背負った者も時にあり、これは運命論への展開も容易にする。

そういった者のことを、『宿命の星』もしくは『禍ツ星』『凶星』のもとに生まれた、ともたとえることもある。

あるいは皮肉って『神々の戯れ(テンプレ)』という古代用語があるのだが、どうにもこの用語は研究者の間でも解釈が分かれて、諸説が乱立しているところだ。

ん、そこなにかね。

ああ、私の家名かね。

確かに私はゴンザレス家の者だ。カーシム・シルターンとともに冒険をしたといわれる聖騎士エスメラルダ・ゴンザレスの直系の子孫に当たる。

ご先祖様への興味が高じてこんな場所で教鞭をとるようになったわけだ。

騎士の家系であるからして、私はどうも異端になるようだが、何、私の双子の兄ほどではない。

ふむ、そろそろ時間だな。

今日の講義はここまで。

- 上位魔法の塔 客員教授 ガスパール・ゴンザレス 講義
カーシム・シルターンにみる業徳カルマの歴史

PLAN

日本人。

このなんちゃってファンタジー世界では、異常な響きを持つ言葉だ。

私の脳内で撒き散らされる単語ではなく、目の前の魔法使いの少女の口からその響きを聞かされたことによって、より異常性が際立つ。

魔法使いなんぞ、まさにファンタジーの象徴。

その象徴が口にした、現実的な、そしてこの世界では非現実的どころか存在さえ誰も知らぬその言葉。

呆然とし、手指から感覚が失われていく。

震える私の唇が、「き、君は、」そうもつれる舌で尋ねようとした時、

「おーい、何があつたあああああああー!!」

「無事か?」

さすがにこの騒ぎだ。夜半とはいえ村人たちは起き出し、男衆は手に鍬や鋤といったにわか武器を構え、あるいはカンテラの光がちらちらとこちらにやって来る。

魔法使いの少女、スズキは深く嘆息した。

「またの機会にしましょう。後始末が必要です」

「待つ」

すがりかけた私に、彼女は背を向けた。

「逃げも隠れもしませんよ。もっと落ち着いた場所で話した方がいい。一言ですむ話じゃありません」

確かに。確かにそうではある。だが私は、その一瞬も待てない。

ようやく。ようやく同胞に会えた。この世界に、日本人は私一人だと思っていた。もしかすると、全ては私の妄想じゃないかとさえ思ったこともあった。

それがようやく！ ようやく！！！！

幻想じゃない。

妄想じゃない。

全ては、存在した。

お父さん。お母さん。お兄ちゃん。雪江。皆存在した。

彼らは、いたのだ。ちゃんとした。

そして 奪われた。

「何があつた!?!」

男衆達に問われ、スズキが「まずはどこか会合できるような建物は？」と尋ねる。

「あ、ああ。村長の家がいいんじゃないかね」

「では移動しましょう。全員入れないなら、代表者だけをお願いします」

「お、おう」

気おされ、男衆達は頷く。

ふらふらとスズキが歩くのに、私は「おい、身体は大丈夫なのか」と間抜けな声をかけた。

彼女は、ちら、とこちらを振り返って、

「慣れてます」

一言だった。

慣れてますとはどういうことだ。慣れるものじゃないだろう、そういうのは。

「優しいのね。大丈夫、あたしの乙女の祈りで処置済みよっ」

聖騎士殿が声をかけてくれたが、直つても、痛みは直らない。痛いと思つた事実は消えないだろう。

先導の他、男衆はカルガモのように小さな少女の背中に着いて行く。

一同は揃つて移動することとなり、何故か私も奴に手を引かれて村長の家へ向かうこととなった。

頭がいっぱいで、そしてどうしようもなくもどかしくて、私は奴

の手を強く握り返した。

「どうということなんだっ この村はずっと平和だった。それが、あんたらが来たとたん、この騒ぎだっ」

口火を切ったのは、村の急先鋒の烏頭だ。次々に追隨する声も上がる。

「あんな化け物みたことがない！ あんたらが連れてきたのかね！？」

「昼間の爆音や家屋の崩壊もどう説明をつける！？」

「一日のうちに何度もこんなことがあるなんて、考えられねえ！」

「どういうことか説明しろ！！」

口々に責任の所在を求めて怒声や罵声を上げる男達の姿は、私に正気の冷や水をかけた。

最悪の空気に、スズキが無言ですつくと立ち上がり、

「うるさいですね」

ちよっ 空気読め！

読もうよ、空気！！

思わず私は青ざめて、ついにつないでいた奴の手を振り払った。

「あっ」

残念そうな声を漏らすな、お前も空気を読め！！

「出て行けっ」

一人が叫んだ途端、多くが同意して同じように叫ぶ。

「疫病神め！」

「何が勇者だ！」

黙って罵声を受け止めていたスズキは、小柄な身体で、周囲を睥睨した。

精神的に見下ろされていると感じたのか、何人かが顔面に血を上らせる。

だが、彼女は鼻で笑った。

「ふん。いいでしょう。今すぐにも出て行って差し上げます。リーダーも異存はないですよね？」

話をふられて、隣に立つ奴は透明な笑みで頷いた。

「ああ、問題ないよ。あーちゃんを迎えに来ただけだし」
聞いていない。

迎えにこなくていい。

村を出ることにはなったが、お前らにはついて行かんぞ。

しかも村人たちからの視線が痛い痛い。止めてくれ。

「ゴンザレスもいいですね？」

「んんん、いいけれど……」

微妙に言葉を濁す聖騎士殿を私は不思議な思いで見上げた。

「というわけで、我々は出て行きます。即刻に。ええ」

スズキがまとめると、その場にほっと安堵するけはいが満ちる。

いかにも、疫病神を追っ払えた、という雰囲気だ。

「あ、そうだ。一つ言い忘れていました」

スズキがいかにもわざとらしく付け加えた。

「昼間とはかく、夜の化け物はですね。ここに来ることが分かっ

ていたので、我々はそれを追ってきたんですよ」

え、とその場の空気が凍る。

「ああ、ちなみにあの化け物は一体だけじゃありません。この村が
奴らの通り道になってしまったみたいで、今後もたくさん来るでし
ょうね」

凍った空気にびしり、とひびが走る。

「でも、我々は去ります。あとは皆さんの問題なので」

そう言いおいて、スズキはあごでしゃくってパーティメンバーを
促した。

「ちよ、待ってくれ!!!」

一人が椅子を蹴って立ち上がった。

「む、無責任じゃないかね!？」

「そうだそうだっ」

「勇者なら、我々を守るのが義務だろう!!」

先ほどと手のひらを返し、逆に責め立てる彼らを見てみると、私は目をそらしたくなかった。

「はあ？」

スズキは思い切り語尾を上げて彼らを振り返る。

「出て行けといたり、守れといたり、ずいぶん勝手な人たちですわね。私たちも暇じゃあないんですよ。他にやることは山ほどありますし、優先順位でいうと、そうですね。あなたたち、最底辺です」

最底辺、との言葉に、男達は顔を真っ赤にして怒鳴った。

「なんてことを言うんだ!!」

「さっきまで、中位くらいだったんですよ？ だから私達は来ました。でも、あそこまで暴言を吐かれて、何故自分の命を張ってまであなた方を守らないといけないんですかね？ 私たちも身体は一つなので、どうせ守るなら、他の村を守ります。さっきの言動で優先順位が最底辺に落ちたんです。こういうの自業自得というんですよ。自分たちでなんとかしてください」

ちよ、スズキさん。

あなた気持ちがいいほど白黒はつきりライン引く人ですね。気持ち分からなくもないが……

こう着状態に陥った場に、「まあまあ」とのんびりした声が仲裁に入る。

「すみませんのお、勇者ご一行さま。村の若いもんは血の気が多くていかん。どれ、皆ちつと口を閉じて反省せんかい」

よぼよぼと曲がった腰で前に出て来たのは、村のご意見番の長老であった。今の村長は気が弱くて今回のような場面では役立たずでかなわんが、この長老はなかなかの曲者である。

「魔法使いさまもあんまり意地悪せんでください。みてのとおり、若い衆は頭に血が上りやすくてのお。どれ、どれ。昼間すでに手を打ってくださったと聞いておりますぞい」

「……仕上げは明日の朝のつもりでした」
「どういふことだ。」

スズキは、あからさまに、「っち」と舌打ちした。おいおい。彼女が説明する気などまったく見えて、聖騎士殿が「あたしから説明するわねん」と口を開く。男達は何人か、尻の穴を押さええとずさった。私は何も見ていない。なお、奴はまったく説明する気など皆無である。

「この村にもともとあった魔法のシステムを一部破壊して、内容の書き換えを行ったのよ。これが完成すれば、化け物、あたしたちは『災い』と呼んでいるんだけど、奴らはこの村を素通りしてくれるようになるはずだったの」

それって、まさか。

私が口をばくばくさせると、スズキはまた舌打ちした。

なんとというツンデレ。デレがないからツンツンなのか。

「誤解のないように言っておきますが、無料ただじゃありませんよ。料金はいただきます。そのことで、村長には話を通してあります」

それで長老が知っていたのか。あの気の弱い村長、すっ飛んでいって相談したに違いない。

「お、おいつ 金をとるのか!？」

まだ批判の声を上げる奴。何度もいうが、空気を読んでくれ。

喧嘩を売って何になるというのだ。

「あなた馬鹿なんですか？」

スズキは冷ややかに言った。

「なっ」

「慈善事業に命をかけるほどこちら安くないですよ。正当な報酬は冒険者なら誰でもその権利を認められているところです。あなたがどうしても主張を通すなら、あなたの全財産、孤児院にでも寄付してきたらどうなんですか？ 必要とするところに必要なものを持つている人が自分の身も省みず、全てを捧げるとあなたの主張はそういうことですよ。ほら、まずは自分からやってみせてください

よ。なんなら村を守るために化け物に向かってこい！！」

最後は臍腑の震えるような罵声だった。

誰もが気おされ、黙り込む。

「ふおふおふお。魔法使い殿の言われることももつともじゃわい」
しん、と水を打ったように静まりかえる中、長老の癖のある笑い
声が響く。

「しかしそうはいうても、ワシ等が化け物相手に立ち向かったところで、単なる無駄死にじゃ。だから、ワシ等はワシ等のできることをそれぞれがなすしかない。ワシ等にできることは何かね？ 剣を持つことかね？ 徒手で立ち向かうことかね？ 違うのう。できることといったら、命をかけて戦ってくださる方に、せめて同等に値するかも分らんが、報酬を差し上げることじゃないのかね？ 皆が己にできることを、ちよつとずつ負担することは、そんなに嫌なことかね？ ワシ等はまた稼げばいいが、勇者さんたちは、死んだらそれまでじゃ。そんな彼らにせめて報酬を支払うことは、どうしても嫌なことかね？ どうかね、皆」

長老の言葉は、みな胸に染み渡ったらしい。

誰も反対する声はなかった。

「よしよし、そういうことですじゃ。勇者ご一行さま。今夜はうちに泊まっていってください。明日の仕上げ方、よろしく頼みますぞい」

うまくまとめた長老、さすがである。

男衆は解散し、寢室に案内されるにあたって、

「計画通り」

という少女の独り言が聞こえたのは気のせいだと思う。
そう思いたい。

強い奴

「じゃあ、おやすみ」

仲間に向かってナチュラルに就寝の挨拶をかまそうとする奴に、
「待て」

私はその首根っこを押さえた。

「何を当然のように人と同じ寝室に入ろうとしている。お前はあつち、聖騎士殿と同じ部屋だ」

「そんな……」

そんなじゃないわ、ボケ！

常識を頭に叩き込んで来い。

納得のいかなさそうな絶望の表情を浮かべる奴に、聖騎士殿が口を開く。

「そうよう、リーダー。未婚の男女が野宿でもないのに、寝室を一緒にするのはハレンチなことよ。こういうことは、きちんと手順を踏まなくっちゃ！」

本日三度目のウイנקをくらってしまった。しかし^{まっぴや}瞋濃ゆいな。特に下瞋。顎割れも見事に雄雄しい。

また、奴は聖騎士殿の言葉に何か感じ入るところがあったのか、無表情に「……手順」と反芻した。

怖い。

今、下瞋に注目している間に、物凄く特大の旗が立った気がした！

聖騎士殿、道理を説いてくれたのは分かるが、余計な事を！恨みますー！！

「でも……」

と恥らうように聖騎士殿は身体をかき抱く。

「あたしも、心は乙女……リーダーと同じ寝室だなんて、本当はハレンチよね。きゃっ」

奴は無言できびすを返した。

聖騎士殿、私は貴方を、いえ、貴女を尊敬する。

「おい」

私は奴の背に声をかけた。

ぱつと振り返るその頭に犬耳と臀部でんぶにぶつぶぶと高速で振れる尻尾が見えた気がしたが、多分幻想だ。

「今日は私の大事な幼なじみを助けてくれてありがとう」

ぽかん、と廊下の暗がりにも印象的な青い目を見開く奴に、私は羞恥に蓋をして続けた。

「それと、化け物に向かつてこいなんて無責任にけしかけてすまなかつたな。忘れるな。お前も私の大切な幼なじみだ」

恥ずかしい。

死ねる。

内心七転八倒していたが、もっと恥ずかしいことを知っている。もっと苦しいことを知っている。

素直に感謝できないこと。

素直に謝れないこと。

そして、大切な人に、大切な言葉を言えずに、二度と言う機会もなくしてしまうこと。

どれだけ後悔しても、もう二度と、伝えることができない。その苦しみは、羞恥心など遥かに凌駕して、なお続いていくのだ。

そして、奴は闇の中、不意に笑み崩れた。

こちらがぎよつとするほどに、鮮やかな笑みだった。

何かとんでもないリアクションを起こすかと身構えた私に、奴は静かに「おやすみ」とだけ言って寝室に消えた。

沈黙がその場を満たし、

「つきゃあああああああ！！！！！！」

聖騎士殿の黄色く野太い悲鳴が上がる。時刻が時刻であるからして、小さな悲鳴であったが、興奮が如実に表れているため、音量を超えてダメージ倍増の悲鳴であった。

「すてきっ はあん！！ 貴女はヒーローなのねっ 聞いていたと

おりなのよ！！ 応援してるわっ ぐ！！」

親指を突き立てて、乙女走りと同じく寝室に消える聖騎士殿を、私は死んだ魚の目で見送った。

ああ、心的疲労のあまり、聖騎士殿へきちんと礼がいえなかったな。まあ、明日でいいか。もう私のライフはゼロだ。

「では、我々もそろそろ寝室へ行きましょう」

ススキのスルースキルはかなりのものがあるようだ。あの二人と旅をしているのだから当然か。

客室には、簡素なベッドが二つ。それぞれ腰をかけ、そうしてようやく。

「ススキさん。いえ、鈴木さん。話を聞かせてほしい」

そう、ようやく私は切り出したのだった。

「カロン侯爵。任務御苦労だったな」

魔界の宮城一角。

淫魔族を母に持つリュ皇子の執務室である。

武闘派の多い魔界では珍しい、穏健派筆頭のリュ皇子の執務机には、書類が山ほど積載され、今なお増え続けている。

今も書類の高層タワーを裁きながらの面談であった。

「このような状態で卿には申し訳なく思う。今佳境でな、というか常にクライマックスでな。とりあえずくつろいでくれ」

視線を左右にすばやく走らせ、手元を動かしながらの言葉だ。

「いえいえ。殿下の胸中お察しいたしますよ。どうぞご遠慮なく」

「そうか。助かる。して、人の勇者殿の返答はいかに？」

「ああ、その件でしたらご快諾いただけましたよ。『災い』の追跡を続けて聖都に向かってくれるそうです」

本当にご快諾かどうかはかなり怪しいものがあるが、リュ皇子は思わず手を止め、「そうか」と安堵の息を漏らした。

和平会談。戦闘狂魔族の戦闘行為でぶち壊し。

各国へ使者を遣わす。戦闘派魔族の戦闘行為でぶち壊し。

人間界に斥候を放つ。好戦的魔族の戦闘行為でぶち壊し。

繰り返し繰り返し三度の飯より闘いが好きで己の愉しみに打ち勝てないし勝つ気もありませんが何か？ な魔族の戦闘行為でぶち壊しの憂き目にあつて来た。

天井を見上げ、苦い涙を飲むリュ皇子に、カロン侯爵は陶然と言う。

「あの小さき人の魔法使い、なかなかよかったですよ。もう一度、今度は全力で闘いたいですねえ」

結局やらかしたのか、とリュ皇子はそのまま虚ろな目になった。

手元の書類は、そもそも人間の各国の被害状況や苦情などである。

確かに魔族は戦闘狂が多い。魔物にいたっては、理性などない。

だが、全てが我らのせいではないのだ。

ぺらり、と一枚の書類をめくる。

大陸各国連盟の宣戦布告紛いのそれは、

『最近ぶいぶい破壊活動やってくれるじゃねえか。ああん？ そっ

ちがその気なら、こつちも『大陸盟主の環』を発動して、マジ全面

戦争も辞さないぜ？』

といった主旨のものである。

聖都を擁する聖王国フェリュシオン。

魔法王国エレボス。

砂漠のトリエステ。

北方の武王国ドゥーガ。

大陸の四氏族と言われるこの四力国を筆頭に、人間寄りの世界樹連のエルフ達からも抗議の書簡が届いている。

あとは、世界警察を気取る天空城の白竜どもから書面がきたら完璧だな……とリュ皇子の目はますます死んでいく。

そもそも全面戦争の危険を説いたとて、

『やったるぜ、ヒヤッハー!!』

な面々しかいない魔族では、もう最初からつんでね？　もう私が何をしても終わりじゃね？　と無理ゲーをやらされているとしたか思えないリュ皇子。

味方なんていない。

「おいつ　愚弟よっ」

バン!!　とドアが破壊される。手で開けられたのでも、蹴破られたのでもない。大剣によって破壊されたのである。

「カロンを勇者に差し向けたと聞くぞ!!　何故私を行かせぬ!?　きやつらなど、私が一撃で葬ってくれようほかに!!」

剣鬼を母に持つ皇位継承権第四位、ドロテア皇女である。逆巻く火のような赤髪、燃え上がるルビーの瞳、己の身長よりも1・5倍はあるという大剣をぶんぶんと玩具のように振り回している。

ちなみに、第一位と同腹であるが、皇太子は『俺より強い奴に会いに行く』といって長らく行方不明である。お前より強い奴ってマジいるの？　と魔族としては弱い方の搦め手が多い幼き頃のリュ皇子の言葉は華麗にスルーされた。

あれが脳筋の筆頭だ……とはとても言えない。

「姉上……一撃で葬っては駄目です。私はあくまで、人の勇者に協力依頼を」

「ぬうん、血が騒ぐわ!!」

最後まで言わせてもらえない。

「兄上のように、私より強い奴に会いに行くぞ!　カロンの、供をせいで!!」

「喜んで」

喜々としてカロンの引き受ける。さすがにリュ皇子は顔色を失った。

「喜んで引き受けるな!　姉上もおやめください!!　今微妙な時期なんですっ　ひっじょうに微妙な時期なんです!!　止めて!

これ以上は死ぬ！！ 過労で死ぬから！！」

取り乱す弟に、「解せぬ」とドロテア皇女はどっかり椅子に座り、大剣を床に突き刺した。

器物破壊の得意な面々に囲まれ、もはやリュ皇子のストレス値は上がりっぱなしである。

リュ皇子、皇位継承権は淫魔族故に第十七位と低い。

しかし、魔界でもっとも働き、それこそ馬車馬のように働いて、報われぬ男である。

なお、淫魔族の特性として、性別反転容易であるが、女体である時、この姉に犯されかかって以来、死ぬ気で男性体を守り通している。

婚約者の少女もすでに姉に食われた。

もっとも魔界で不幸な皇族である。

あの人は今

「ひいひいひいひいっ」

「こちら青の門！！ 化け物がっ 化け物が大挙して攻めてっ ぎやあああああっ」

「いやああああ！！ たすけ、たすけぐぎゅっ」
悲鳴と怒声が満ちる。
そこはまさに地獄。

物言わぬ溶解し肥大化したオブジェたちがゆっくりとその威容を露にした時、聖国家フェリュシオンの要衝である商業都市デメルテの警報システムは一切鳴らなかった。

目視にてしかその警告を発し得ず、警備兵が気づいた時には、内臓のごとき触手にて腹を貫かれていた。

生き残った者が電子精による緊急警報を発したが、すでに時は遅く。

大挙して押し寄せた『災い』に、人々は蹂躪されるに任せた。

「ぐぎやあっ」

「おかあさん、おかさーんーん！！」

悲鳴は絶えない。

そのさまを、上空より冷徹な目で眺めている者がいた。

深くフードを被り、その容貌は分からない。しかし、その周囲には青白い鬼火が漂う。

彼は何百年も前の人物だ。

生前は衆をもてあそび、禁術にふけり、死して後は冥界と取引して蘇った死霊王^{リッチ}。

自らが筆頭魔術師を勤めた古王国トリエステにおいて、危険人物として暗殺されたが、蘇り次第襲撃し、王都を壊滅せしめた。

腐敗せし絢爛の魔術師など中二病な二つ名で呼ばれ、今でもトリエステにおいては最大級の罪人、国家反逆者として恐れられる邪

法の魔法使いアズール・ココである。

神々の代理戦争において、中立な冥界の使者として現世に遣わされ、見事その大役を果たして更に生者の世界にとどまることを許されたという。

今の世も冥界の目として、役目を負っているとも言われる。

カーシム・シルターンの『アルルヤード上位魔法の塔』攻略パーティにおいても、名を隠して参加していたとも一説があるが、その邪悪な性質・由来ゆえに、歴史にその名が褒め称えて残されることはほとんどない。

歴史の闇に埋もれた、故意に埋もれさせられた人物といって相違ないであろう。

「つち、『災い』どもが沸いてきおる。奴らめ、発生周期がこれまどと異なる上に大量発生とは解せぬが……どういうことか」

何がきっかけで、と思ひ悩む邪法の魔法使いに、

「奴らは！ 俺より強いのか！！！」

喜々として声をかけたのは、炎のような赤い髪に、地獄の炎もかくやという赤い目をした筋骨隆々の男。人食いオーガですか、と言われても仕方のない容貌。

久しくその姿を魔界より消していたマツシモ皇太子である。

「黙れ、脳筋」

非常に冷やかな目でアズールはマツシモを見やると、「ぐぬう」とマツシモ皇太子は鬼のような形相で黙り込んだ。赤子が見たら火がついたように泣き出し、大の大人の男でも、失禁してへたりこむレベルの形相だが、アズールはふん、と鼻で笑う。

この戦闘狂、栄養補給も忘れてひたすらに世界を彷徨い、死闘を繰り返しては、「我が覇道は止まらぬ！！」と咆哮し、服を意味もなく破り、次の死地はいずこそと突き進む内、砂漠で行き倒れた。

指一本動くこともままならぬ状態で餓死しかかっていたところを、劣等竜で飛行中のアズールに何か汚物が砂漠に倒れていると発見され、嫌々ながらその宿星のために見捨てておけぬと救われたのであ

る。

ゆえに、マツシモはこの魔法使いに頭が上がらぬのだ。アズールはそのことを重々承知している。

彼は背後の鬼人を無視して手元の水晶球に目を凝らす。

「星は本来一つ。運命線がずれている……介入……異界の神？ おいおい、今代の代理戦争ではないのか。何ゆえ異界の神が……星が一つ、二つ、三つ、四つ目が現れる？ ぬう、やはり俺の占道では限界があるな」

そうして、彼は呟いた。

やはり、聖都。何かある、と。

「しかし、どこに警告したものが。ふとっちょ泣き虫サントス（伝説の大教皇）はもう死んだし、トリエステの美しき王女もはや過去に身罷られた。話の分かる輩と言うのはなかなかおらんものだ。

このままでは魔族と人間のドキドキわくわく大戦争だ。そこ、本当にドキドキわくわくした顔は止める」

凄惨な大戦争を妄想して、涎を垂らしそうになっていたマツシモ皇太子は、はっと目を瞬かせた。

「よいではないか。外法の者よ。これも神々の間引きではないか。

何、我ら魔族は猛者揃いよ。人間など根絶やしにしてくれる」

「脳筋は死ね」

アズールは絶対零度の視線を突き刺す。

「このままでは冥界から苦情が殺到するわ。運命線が本来の形になり。歪んでおる。歪められておる。『災い』はその一端よ。歪んだものは元に戻さねばならん。人と魔が協力してな。さて、不甲斐ない我が弟子も奮闘しておるが、あれは元々魔法を使うのに向いておらん。今頃どうしておるか」

精霊の一種。

番の電子精つかいを使って、固定器による遠距離通話が可能である。青の門の緊急用の電子精の番は、聖都フェリシオネにつながっている。

緊急コードは直ちに聖王の下に知らされ、今は円卓会議が開かれていた。

「なんとということだ……！」

第一王子アーサー・フェリクションの沈痛な言葉に、面々は恐るべき報告を受けとって以来、痛いほど満ちていた沈黙の呪縛を解かれた。

デメルテは商業都市ではあるが、その要塞は類を見ない。また、各種冒険者ギルドがあり、この町を拠点とする冒険者の数も少なくない。

しかし、不意打ちとはいえ、彼らをして一切の抵抗まならぬまま蹂躪された。

にわかには信じがたいが、電子精の音声からは、死に臨んだ人間の絶叫、悲鳴が聞こえてくる。それを耳にして、嘘であると断じることができなかった。

「魔族め、もはや我慢なりません……！」

戦姫の名も名高いアーサーの妹であるクリスティナ王女が怒声とともに、円卓に拳を叩きつける。

「今こそ、『大陸間盟主の環』を発動する時……！ こうなっては全面戦争するしかありませんわ……！」

ここにリュウ皇子がいたら、「ああ、脳筋どもの仲間ですね。よく分かります」と目から光を消して呟いたであろう。

「待て」

威風堂々たるその声の主は、聖王ブルーノー五世である。二人の父親でもあった。

「『大陸間盟主の環』には、それぞれ各国の同意が必要。古の血判契約書に各国代表者の署名が必要となる。あるいは、デミ・ヒューマン亜人や白き竜

の方々の協力も仰がねばならぬかもしれん」

「しかしっ 各国が協力体勢に同意するでしょうか？ 今のところ、他国への被害状況も報告されていますが、一都市が壊滅など被害甚大なのはわが国だけ……」

更には、利害関係が絡む。

誰を使者に立てるのか。

「その役目、私に任せてもらえませんか？」

進み出たのは、小柄な黒髪の少女。人とは思えぬほどに『美しい』。まるで人が『美しく』『儂く』と形容した時、それは彼女のような形になるであろうと思わされるほどに人外の美貌である。

その背後に、同じく黒い髪色をした少年も控える。

おお、とその場に明るい空気が満ちた。

「聖女殿。貴女が……」

しかし、アーサーだけは悲痛な表情を覗かせる。

「ミチル。貴女にそんなことはさせられない」

少女のか細く折れそうな手を握り込むアーサーに、彼女 ミチルは、ゆっくりと首を横にふった。

「いいえ。私なら中立ですもの。行きます。ううん、行かせて」

しかし、としぶるアーサーに、

「いいじゃん。俺がミチルを絶対守るよ。あんたは心配すんなって背後から礼儀？ それなにおいしいの？ とばかり、茶化すような自身に満ちた野次を飛ばしたのは、もう一人の少年。

「タクマ。君は樂觀視しすぎる。ミチルは戦ったこともないのだぞ

！！」

「あら、お兄様。だったら私がついていきますわ！」

名乗りを上げるクリステイナ王女。

「クリスッ」

アーサーは眉根を寄せて妹姫をたしなめようとしたが、

「よい。聖女殿のお言葉に甘えよう」

ブルーノー五世の鶴の一声で押し黙ざるを得なかった。

「大丈夫よ、アーサー」

ミチルは王子の手を華奢な手で包み込み、にこつと笑う。

「大丈夫。皆は私が守るから。皆、救ってみせる」

そう、彼女は付け加えて。

恐るべき善意（前書き）

コミック、ベセルク12巻のネタばれがあります。

恐るべき善意

「スズキさん。いえ、鈴木さん。話を聞かせてほしい」

そう切り出した私に、スズキ いや、鈴木はじつと感情の伺えない瞳で私を見つめ、やがて口を開いた。

「その前に、一つ、私の方から貴女に聞きたいことがあります」

まさかそんな切返しが来るとは予想だにできなかったが、彼女の真剣な目に、これはミスを許されない問いだな、と気を引き締めうなずいた。

「貴女は。ここに。この世界に、無理やり連れてこられましたか？それとも、自らの意思できましたか？」

その質問に、息が止まった。

「私は、自分の意思で、」

声が震える。両手をひざの上に組んで、その指先がぶるぶると震えだす。

「自分の意思で、くるわけなんか、ないっ」

怒りで。

理不尽への怒りで。

目の前が真っ赤に染まる。

「私は、平凡だった！ なんのとりえもなく、普通で、多分世界に必要となんかされていない人間で……いてもいなくても、世界は変わらなかつたと思う。でも、あの世界がっ あの場所が！！ 私の全てだった！！ 家族がいた！ 友人だっていた！！ 好きな人だつて……告白なんてとてもできなかったけれど、好きな人だつていたんだ！！ 叶うかも分からない、それでも将来の夢だつてあつた！！ そのために大学だつていきたかつた！！ あの日、あの日、私は、その進路のことで母親と喧嘩したんだよ。それでなつていったと思う。死んじゃえつて、大嫌いだから死んでしまえつていったのさ！！！！ 馬鹿だよ。本当に大馬鹿だ！！ 罰があつた

たのか!!!? もう二度と謝れない。お母さん、ごめんなさいって、それだけなのに、伝えられない!!! 親不孝で最悪の娘のままだよ!!! こんなわけの分からない世界につれてこられて、赤ん坊からやり直し!? こんな、こんな終わり方ってあるか!? 交通事故じゃない!!! 通り魔でもない!!! あの馬鹿で勘違いでスイーツで糞やるうな夢見る少女のおかげで!!!! 私、こんなっ こんなっ

乱れる息で私は無茶苦茶に吐き出し、そして片手で顔面を覆い、うなだれた。

「私は、フェリユシオン国民なんかじゃない。日本人だ。日本人なんだ。……. こんなの」

こんなの、認めない。

認められない。

馴れ合わない。

人の名前なんて呼ばない。

私は日本人だ。

私の名前じゃない。

こんな変な名前じゃない。

周囲の人なんて皆知らない。

私は日本に帰りたい。

これは拉致だ。

酷すぎる。

帰してくれ。

今すぐにだ。

そうじゃないと。

私は。

この世界の人間になっってしまう。

以前の世界を、忘れてしまう。

過去にっしてしまう。

嫌だ。

それだけは、嫌なんだ。

「……分かりました」

つめていたらしい息を、鈴木は漏らした。

「貴女は、味方、かは分かりませんが。少なくとも、敵ではないようです。昼間のことは正式に謝罪します。財産もできうる限り、補填してお返しします」

「……？ な、どういう」

「すみません。八つ当たりでした」

鈴木はあっさり言った。

「あの鉄面皮で感情どっかに置き忘れてきたんじゃないかっていうくらい冷たいリーダーが、あんまりにも貴女のことを好きで好きで仕方ないようでしたので、てっきりハーレム補正の敵方さんかと」

「は？」

面を上げた私の顔は、相当間抜けだったと思う。

「嘘みたいな真の話です。私達、不幸補正がかかっています」

「……は？」

もう一度私は繰り返した。鈴木は真剣な顔で、冗談を言っているようには見えない。

「何から話したもののやら、私も相当切羽詰っているんですよ。話が前後したらすみません」

「い、いや。それはかまわないが」

「色々推測も混じってくるので。まずは、事実や実体験からお話しましょう。私、何歳に見えますか？」

「は？ え、ああ。十六歳くらいか？」

ちんまりしていて、十三丁四にも見えるが、落ち着いた感じなので、少し年齢をあげてみた。だが、あまりにも、中身と外見がそぐわないと思う。そぐわな、い？

はっとした私に、鈴木は深くうなずく。

「もう数えるのは止めてしまいましたが。少なくとも、六百歳は超えていますね」

「待つてくれ。君はエルフには見えないが」
「構成はこの世界の人間と同じものですね。ただ、私、不老不死なんです」

あまりにもさらっというので、流してしまっところだった。

「は！？ 不老不死！！！？」

「最初は自分でも気づきませんでした。あ、最初っというのは、生まれてから数年してくらいで、自我が形成されて後ですね。その時は、別の名前を持っていたかと思いますが、もう忘れました。それに私は鈴木晶子です。他の者になった覚えも、そんなことを許した覚えもありません」

はつきりと。

彼女の怒りの形を見た。

無表情で、三白眼で、落ち着いていて、腹黒そうで。

でも彼女は。

とても。

とても怒っている。

私と同じく。

あの理不尽を、許していない。

「それでまあ、色々とありましてね。色々というのは、まあ貴女の想像の限界を超えた不幸のオンパレードと思ってください」

怖くて聞けない。

「それですすね、一回自殺しました」

「！！！！！！！！」

思わず中腰で立ち上がりかけ、ゆっくりと寝台の上に腰を下ろす。「確実に死にました。首の骨が折れました。でも。死ねませんでした。違っな。死に続けられなかつた。蘇生したんです。最悪でしたよ。意識、ずつとあるんです。痛いし、死ねないし、もうね、それ以来、なるべく死なないように気をつけたんですけれど、死亡率が高っつて、まあ廃人になりかけました」

淡々と。実に淡々と彼女は続ける。口を挟むことはできない。そ

んな迫力があつた。

「私、不老不死ですが、身体は普通どころか、むしろ弱くつて。魔法の才能も絶望的で。頭の回転も悪くて。酷い目にありましたよ。でもね、人間、死ぬ気でやれば何とかなるものです。時間だけはありました。学んで。学んで。ないものを、絞りつくして。今の私があります」

彼女は暗い目で私を見る。

「ようやく人並みになって。それで、私、ようやく動けたんですよ。なんでこうなった。どうしてこうなった。原因を追究して、いえ、諸悪の根源を見つけ出して、そいつを殺す。蛆虫みたいにひねり潰す。殺す。いや、殺すまい。地獄の苦しみを味あわせて、死ねない恐怖を教えてやる。気が狂うことなんて絶対許さない。そんな慈悲など欠片もやらない。許せない。絶対に許せない。そんな妄想でご飯が十杯軽くいけるくらいの精神的余裕ができて、世界を放浪するようになりました」

いや、鈴木さん。

貴女、今の本気でしたよね。多分オブラートに包んだ氷山の一角でしたかね！？

気持ちには、凄く分かる。分かるが、私は鈴木を感じた苦しみは、多分理解できない。私は死んだことも、蘇生させられたこともない。それで分かるといったら大嘘だ。

「それでですね。世界を放浪する内に、気がついたんですよ。色々な、痕跡があるつて。先人がいたんだつて」

私は瞠目した。

「古代文字。古代文化。衣食住。ところどころに、日本の痕跡がある地方がありました。サブカルチャーらしきものもみただけがあります。ねえ、覚えていきますか？ 私達が捧げられたあの時……」
真つ黒なクレヨンでぐちゃぐちゃに塗りつぶしたら、こんな目になるだろうか。

そんな光のない目で鈴木が私に尋ねる。

私の喉がぐびりと鳴った。

「……覚えていて。たくさんのはいがあつた。皆、抵抗していた。いやだといっていた。でも、」

「無理やり捧げられましたよね。神への供物でしたね」

そっだ。

私達は、捧げられた。

「私、生前、うちの兄貴が好きだった漫画がありました。ベルルクっていうんですがね。これ、ネタばれ自重なんであれなんですが、ある人物が、自分の願いと引き換えに、大切な仲間を異存在に捧げるか否かって選択するシーンがあるんですよ」

その漫画、私も知っている。

内容はうすらぼんやりしているが、そのシーン、あまりにも私達に酷似しすぎていて、はつきり思い描くことができた。

「その人物はね、結局『捧げる』ことを選択します。仲間に恨まれ、その悲鳴に包まれて。彼は己のしたことを知っているんです。己がなした結果を、その罪を知っていて、なおそれを愉しんだ。罪ともいね。でもね、『彼女』は違う。そのことを、罪とも思っていない。悪いことだとも思っていない。ただ浅慮なんです。だから。だから」

簡単に、私達を捧げた。

あの声。

覚えている。

今でも鮮明に思い出せる。

異世界に行きたい。自分の知っているキャラクター達を、助けたいの。かわいそうだから。救いたいから。皆を助けてあげたい。お願い、私を異世界に連れて行って！！

そう願った少女の叫びに、『神』は含み笑いで答えた。

汝の願い、叶えよう。

ただし、汝のみでは叶わぬ。

汝と縁のある者で、『××』の高い者を順にその魂を捧げてもらう。

どういうこと、と尋ねた彼女に、『神』は答える。

お前の血縁友人知人を。

お前と一緒に異世界に連れて行く。

彼女は答えた。

そんな。

でも。

ううん。

大丈夫。

皆、分かってくれる。

悲鳴が響き渡る。

『私達』はそれを聞いている。

彼女には見えない。

ガラス瓶の中に詰め込まれ、ただその場面を見せられる。

意味が分からない。でも異常だと肌で感じている。

周囲の様子は分からない。

でもたくさんの方がいると感じる。

皆、力を貸して。お願い。あなたたちの力が必要な。

大丈夫、私が皆を守るから。

皆を救ってみせる！！

なんという勘違いした善意。

恐るべき書意（後書光）

ある ふうふの ねがい

死なない。

違う。

死ねない。

それは呪いじゃないか。

ああ、そつだ、と実に軽い調子で『神』は付け加えた。

様式美、というのがあつたな。
オフショーン
附加をつけるか？

それは何、と彼女は尋ねる。

特別な力。お前の好きなように。願えば全て叶う。

代わりに。お前が連れて行く人間の。

幸運が、お前の力となる。

彼女は首を傾げ、そして笑った。

皆の力を借りるのね！ いいわ、お願い、皆、あたしに力を貸して！！

止めて。
それは搾取だ。
幸運を、失う？ それってどういうこと。
どうなるの？
幸運を失ったら。
その真逆は？
不幸じゃないの？

誰よりも綺麗で、ええと傭くって守りたくなるような容姿にして。黒髪でストレート、身長は155センチくらいがいい！
皆を守る力。人を癒せる力がほしい！ あと、守護とか、結界とか、えっとそれから浄化の力！！
えっと、ロマンスも欲しいなっ 王子様と結ばれるの。あ、あたしだけを守ってくれる騎士様とか。
聖なる獣とかに好かれて、私だけになついてくれるの！
大親友がいて。

彼女は楽しそうに、具体的に、そしてこれでもかと願う。
止めて。
止める。
お前が願っただけ。
誰から奪われるの？
私は、何を失っていくの？
この子、こいつ、頭がおかしいよ！！
何なの。
想像力がないの！？
馬鹿なの！！！？
ゆとりなの！！！？
気持ち悪い。

ああ、逆ハーレムですね。分かります。ああ、チートですね。分かります。俺TUEEEEですね、わかります。

私もたくさん読み漁った。私オタクだもの。でも、それは。紙面で、自分に関係なくて。だからよかった。

でも、これは！

代わりに、私達は代わりに。失う。

そして襲い掛かるだろう不幸は。災いは。いかほどのものになるの？

いいとも。全て叶えよう。全て賄^{まかな}われる。

笑い含みに『神』は請け負う。

まかなうのは、私達だ。私達から失われていく、搾取されていく！

110

止める！！

止める！！！！

止めて！！！！！！

たくさんの悲鳴が聞こえてくる。

彼女には、聞こえない。

聞こうともしない。

だって彼女は想像力なんてない。

誰かが幸運を手にした分だけ、誰かが不幸になる。

お前が願った分だけ、私達が不幸になる。

そして、私達は。

彼女の絶大な幸運と引き換えに、たくさんの不幸を背負って、この世界へと。

時代も。
場所も。
生まれも。
何もかもばらばらに。

切り刻まれて。
心も体も記憶もぐちゃぐちゃにされて。

生まれなおした。

あるいは。

肉体はそのままに。

突然投げ出され、悲惨の限りの目に合う。
死にたい。死ねない。時が来るまでは！

誰がどれだけの不幸を背負うかなんて。

それこそ『神』のみぞしる。

そして、その呪いは。

恐ろしいその呪いを、知っているか？

彼女へ、幸運を供し続けるために、『神』は一つの呪いをかけた。

彼女が現れるまで、誰も死ぬことはできない。

だって、彼女は、一番最後に現れる。

それまで、私達は。

苦しまなければならぬ。

その幸運に見合うだけの不幸を。

業を。

捧げなければ、ならない。

どうして忘れていたの。

そう。

だっておとうさんとおかあさんが。

忘れさせてくれたの。

あのひとたちは。

わたしが あまりにも おそろしい ほしの もとに うまれた
と なげいて。

たくさん の ぎせいを はらって。

わたしを まもって くれました。

おうちから では だめ。

しんで しまう かもしれない。

いいえ、 しぬことも できない おそろしい。

なんて 可愛いそうなの。

わたしたちの ちから で。

おまえを まもって あげよう。

ながくは もたない けれど。

わたしたちのいのちをささげる。ふつふふたりのいのちをもつて、うんめいのめがみよ。

めいかいのじょうよ。

まもつてくれ。

だからこのこを。

さあ、おまえは。

このうちからでたいだなんておもわない。

このむらからでたいだなんておもわない。

でるときはおまえをまもつてくれるひととともじ。

かわいいむすめよ。

かまつてやれなくてごめんね。

あいしているよ。

おまえのことを

あいして

「ださい」

必死に祈る。

だが、その甲斐もむなしく。

「お、かあさん。おか……あ……。さ……ん」

娘は虚ろな目でひたすらに母を呼ぶ。

フレデリカは、必死に娘の張り付く髪をかきわけて、なでてやる。

「私はここよ。私はここにいるわ」

それでも、娘は必死に母を呼ぶ。どこにも母親がいないと、すで見えていない目で母を探す。あるはずのない両手でその袖を握ろうとする。

フレデリカはわっと涙を流した。

「酷いっ こんな酷いっ この娘が何をしたの!? どうして普通に暮らせないの!!!? 守っているのに!!! 守っているのに!!! 目を離したら、ちよっただけ目を離したら!!! 両手がなくなっ……うあああああ!!!」

初めてのことではない。

娘が言葉を喋りだすか出さない頃から、ウィルド一家を災厄が襲った。

落下するはずのないものが落下し、作動するはずのないものが作動し、彼らの娘は怪我を負い、そして、

死んだ。

苦痛を味わい、必死にもがき、死ぬ。

それなのに。

「ああああ、こんなことってこんなことってないわ!!!」

死んでも、息を吹き返す。

その時、想像を絶する痛みが、娘の身体を襲う。その悲鳴は、その悲鳴は!!!!

はたで見えていられない。聞いているのが辛い。それでも目をそらさず、せめてそばにいるしかない。

せめて私が代われたら!!!

「駄目だ！ やはり、祝福を受け付けない！！ この世界の神の加護がないとしか思えない！！ 何故！！！！ 何故だ！！！！」

温厚なはずの夫が地面に拳を叩きつけて、悔し涙で頬を濡らす。

「業が……業の数値が、振り切れて測れないなんて。こんな幼子が何故！？ 惨い、神よ、あまりにも酷すぎます！！」

彼らは、何の手も出せない。

娘の身体が、自力で再生していくのを見守るしかできない。

「ジャック……あなた。やはり、邪法を使うしかないわ」

フレデリカは血の気を失った顔で、それでも無理やりぎこちない笑みを浮かべて夫を見上げる。

「フレデリカ。奇遇だな。僕も同じことを考えていたのさ」

生真面目なはずの夫は、にやりと笑って答えてみせた。

私達つて、なんて気のあう夫婦なのかしら、とフレデリカは乱れ髪のまま肩を震わせる。

「アズール・ココ。冥界と取引した邪法の魔法使いについて、トリエステに禁書があると聞いたわ。彼にならない、冥界と取引しましょう」

「僕のフレデリカ。同じことを考えていた。でも、もう一つ、手段がある。神と人の距離は遠い。願いが聞き届けられるか分からない。でも、亜神なら？」

はっとフレデリカは娘の額を撫でていた手を止める。

「人から神へ至る中途の者なら……そうよ、業について適任の亜神がおられる。そうよ、カーシム・シルターン」

その目に希望と絶望、半々がせめぎ合う。

「とても、年若い亜神だ。そして、業徳カルマの専門家エキスパートだ。その功績を認められて、亜神に末席を連ねることを許されたという。そして、とてもとても情に弱い人だったときくよ。だからこそ、未熟な僕の声を拾い上げてくれるかもしれない」

「ええ。あなた。なんでも試みましょう。できうる限りのことをしましょう」

「それでこそ、僕のフレデリカだ」
夫婦は泣きながら、笑った。

結果として。

彼らの声は年若い亜神に届く。

しかし、その亜神は困った顔でこう告げた。

すまんね、俺ってむしろ人間に近いのさ。 たった百歳ぼつちの亜神家業でね。

だが、見捨ててはおけんよ。上司にお願いしてくる。とはいえ、冥界の領分だと思っし、きつと君らには、命を代価にしてもらわないといけないだろうなあ。お二人さん、覚悟はあるかい？

「ええ、覚悟なんて！」

「お願いです、娘を……！」

困っちゃうね。俺ってば元もと優柔不断な遊び人なんだよ。気が弱いんだよ。そんなでもできるだけのことはするからさ。まあ期待半々してくれ。

あとなあ、俺の見立てでは、その娘は、不自然に業をしょってるなあ。まあどんなヤブが見ても不自然か。

いちばんいいのは、リセットさ。プラスとマイナスをなかつたことにするのさ。

お、上司から連絡きたぞ。ああ、やっぱりそうか。ごめんよ。申し訳ないが、やっぱりお二人さんの命がいるよ、すまんなあ。

「いいえ、いいえっ 叶うなら……！」

いやー、いまどき見上げたご夫婦だなあ。軽くごめんな。

死んでも神様になつても性格は変わらないのよ。俺まだ半分人間だし。

お二人さんよ、俺を挟んでもらったからには、ちよつとでもいいようにしてやりたいよ。まずは準備しておくれ。

不自然な業と徳をゼロに戻そう。そして、その状態を固定する。ただし、永遠には無理だ。

「そんな……いいえ、かまいません。それでもいい、少しでも、少しの間でも」

悪いなあ。この娘の業がはかりきれないのは、常に業が加算されているからだ。その加算も、とても大きな異界からの力で、手が出せない。

その分を減らす法則を作つてやらなければならないが、死ぬまでなんていう期限のない固定は、新たに法則を乱す。異界の力で捻じ曲げられたものを更に捻じ曲げては何が起こるかわからない。

とりあえず、条件付けで法則を誤魔化そう。期間を区切れば、なんとかなるはずだ。

あとは、大人になつたお嬢ちゃんに賭けておくれ。

「ええ。私達の娘ですもの」

「ああ」

夫婦二人は手を握り合い、うなづく。

この村を固定の器とする。期限はきつかり二十年。その年、来る時、来るべき者が来て、全てを再び『リセット』する。再び業は加算され、加速していくだろう。

「来るべき者とは？ この娘はその時どうなります？」

なあに、代わりに、もつと凄いのがやって来るさ。そいつが、君らの娘さんを助けしてくれるよう、俺がそう運命を導こう。おっと、俺は人の心をいじくるのは嫌いなさ。運命なんてものも実は嫌いなさ。だから、来るべき者が、その機会を間違えぬよう、後押ししてやるだけだ。間に合わなかった、すれ違って、伝えるべきことを伝えられなかった、そんな後悔がないように、ちよつとだけ力を貸すだけさ。

これでも奇運の巫神。カーシム・シルターン様だ。

そんでもって、お嬢ちゃんの辛い記憶も代価としてもらっていい。う。

「ああっ ありがとうございます！ ありがとうございます！
！！」

止めてくれ。記憶はいずれ戻す。『リセット』されれば、あるべきところへな。あと、あんな、こんなこといっちゃなんだが、これも上司命令だよ。

「それはいい」

この世界の本来の古き神々は、大体今ぶち切れてるのさ。神々の代理戦争とは別に、異界の神が好き勝手ちよつかいかけてきたようでさ。過去も未来も運命が捻じ曲がってるらしい。それを正常に戻そうとそのお仕事の一環さ。恩に着る必要はないよ。

「いいえ、いいえ！ あなたは必要以上によくしてくださいました」
「私達は、あなたに感謝しております」

うわあ、止めてくれよ。俺もまあ、その娘の先輩だからさ、あ、これ独り言な。うん。

それじゃあ、君らに『叡智』と『預言』を残していくから、君らの運命の日まで力を尽くしておくれ。

人の世は人のもの。神は神。お互い節度を守って、自分の力で精一杯生きるんだ。そんなでもって、辛いときは弱音を吐いて助けられて叫ぶがいいさ。そしたら、きつと人でも神でも誰かが気づいてくれるのさ。そんな生き方が俺は好きだよ。

ま、意見を押し付ける気はないよ。あ、これだけは言っておく。祈る時は、俺じゃなくて、運命の女神様にな。俺の上司なんのでない俺……うん、頼むよ。じゃあ、また会う日まで！！

あの時、と鈴木が口を開く。

「あの時、たくさん、無数の人間がいました。そして、きっと、時代も、場所も、ばらばらに、ぐちゃぐちゃに、この世界に投げ込まれたのだと思います」

私は息をつめ、手元を穴があくほど凝視しながら、ぐつぐつと煮え立つ頭で反芻した。

時代も。

場所も。

ばらばらに。

投げ込まれて。

「つまり、各地に残る日本文化の痕跡が、その先人達によるものだと」

「まあ、そういうことですね。あと、私は実際に転生者に会うのは、あなたで三人目になります」

面を跳ね上げた。

「そのうち一人は、自分の境遇を不幸だともななんとも思っていないませんでした。むしろ、私は非難されましたね」

「!？ どういう」

「これは完全に推測なんです。たくさん人間がこちらに投げ込まれるにあたって、全員が全員そのことを理不尽に感じたり、恨んだりしたわけではないようなんです」

にわかには理解しがたかった。

意味が分からない。

「ある転生者に言われましたよ。『彼女の志を尊いと思う。失われる命を救おうとすることは、けっして悪いことじゃないよ。むしろ僕は彼女を応援したいと思う』と、ね」

爆発するかと思った。

頭が、爆発して、言い表せない怒りで、目の前がスパークするよ
うな、声にならない。

「選別、がなされたと思います」

鈴木は恬淡として感情を乱さぬ声で告げた。

「彼女に賛同するもの。彼女を怨んだ者。そもそも最初の生贄選別の段階からきっちり分けられていたのか、あの『神』との対話の場

面で各々の反応を元に選別されたのかは分かりません。サンプルも少ない。間違っているかもしれない。でも、多分、おそらく」

鈴木はいいよども、それでも言葉を続けた。

「もしかすると、我々は、彼女に幸運を提供し続ける生贄というだけではなく、『悪役』としてこの世界に連れてこられたのかもしれない」

ざわつと、足元から脳天に突き抜けるそれを、私は言葉にできない。

そう、私は。

わたしは。

思い出していた。

インクが白い紙に滲んでいくように。

なめらかに。

なだらかに。

なんの違和感もなく。

幼かった私の情緒不安定は。

そう。

『死』

繰り返される痛み。痛み！！

泣き叫び、のた打ち回り、わけの分からないままに肉体が再生されていく激痛。

あのひとたちは、私を抱きしめ、たくさんの犠牲を払って、それこそ文字通り命を犠牲にして、私に『普通』の暮らしをくれたのだと。

今、ようやく。ようやくと、私は思い出していた。

それが。それが！私がああ馬鹿を怨んだから？ そんな理由で、私は業を背負い、代わりにこの世界の両親が全ての重荷を引き受けて、命を捧げたと。

そんな理由で。ちくしょう、そんなくだらない理由で！！！！

「まあ、この辺はかなり推測ですね。裏づけとしては、その転生者

は不幸補正がかかっていなかったし、彼女に賛同していた、という点です。業徳ポイントについて、彼の場合徳の方が高くてですね。因果関係はそのくらいしか思い浮かばなかったんです」

ただね、と彼女は壮絶な微笑を浮かべた。

「私は、自分が『生贄』だろうが、『供物』だろうが、『悪役』だろうが、どうしてもいいんですよ。気に食わない奴は叩き潰す。力が足りなければ血反吐が出るほど努力すればいい。それでも駄目なら志を同じくする仲間を作ればいい」

私は、諦めない。

そう、不屈の意思で少女は笑う。

決して。きれいな笑顔ではない。

憎しみと。怒りと。怨みと。人間が持ちつる負の感情を煮詰めてなお凝縮したような醜いそれら。

そして、一かけらの挫けぬ鋼の意思。

私は、気がつくと涙を流していた。

私達は、尊厳を踏みにじられた。未来を奪われた。

でも、『自分自身』は決して奪われない。それは私だけのものだから。

醜くても、汚くても、けっしてほめられたものでもなくても。

その悲しみは。憎しみは。怒りは。絶望は。大事な大事な思い出は。

全て、『私』を私たらしめる。

それだけは、奪わせない。奪われない！

もういい年をして、それなのに子供のように涙が止まらない。

「力を、貸してくれますか」

いつの間にか、鈴木が立ち上がり、いまだふらつくような足で私の目前に立つ。

「至らぬ私に、力を貸してくれませんか」

三白眼で、無表情で、毒舌で、尊大な少女の声は、どこか不安そうな響きをわずかに帯びていた。

至らないのも、なんの力もないのも、そのことに胡坐をかいていたのも、私だ。

なんて強い子だろう。なんて子だろう。

ありがとう。

あなたが、今、ここに。

私の前にいてくれて、本当にありがとう。

私は、泣きながら、彼女の手をとり、しっかりと握り締めた。

契約は、成された。

今をもって、『リセット』とする。

あなた。

あのこは、大丈夫かしら。

大丈夫さ。僕達の子なんだから！

ええ。そうね。きっとそう。

僕達のかわいい娘。どうか、

お前の幸せを、

ふたり祈っているよ。

ぼくらの代理戦争

暗黒の太陽が天に昇り、擦れた黒い木々が手招く。

冥府である。

荒涼とした大地に、一本の道が長く伸びている。

その先には、人面の蛇が大口を開けており、そこが冥府の深部への入り口だった。

アズールよ、呼び立ててしまいましたね。

「冥府の御方、お声があらばいつでも」

邪悪な魔法使いアズールは膝をつく。

わたくしの、死者の書が書き換えられてしまいました。

本来死すべきさだめにない者が死に、生きるべきさだめにな
いものが生きておる。

冥界はこれを看過できにゆ。

女王、王、赤子の三面六臂さんめんろっぴの巨人はそれぞれに口を開く。

彼らは、一つの身体に三面の頭と腕がついた、異形の面相だった。

我らは本来中立な立法者。いかにもLaw 「ロー」サイド

であるかのように指されることもあるが、中立である。究極、冥府

はLaw 「ロー」サイドにもChaos 「カオス」サイドにも

つかぬ。

王が思案げに言えば、女王がため息を零す。

しかし、こたびの異界の介入、見過ごせません。これはIa
w 「ロー」サイド、chaos 「カオス」サイド、神々の総意。
冥府も動かざるをえないでしょう。

冥府の立法者の内、赤子が顔面をくしゃくしゃにしてむずがる。

許さぬ！ 許さぬ！！ 僕の死者の書をぐちゃぐちゃにした！
ゆるさない！！

おお、坊や、むずがるのをお止めなさい。そなたの嘆きは冥府
を振動させる。

女王は慰め、金の縁取りをした死者の書をめくる。

恐ろしいこと。死の運命を捻じ曲げるだけではあきたらず、死
を妨げるとは。この者らの苦痛、嘆き、いかほどのものか。

彼らは一つの人格を三つに分け、とりとめもないことを言い合い、
まとまらない。

じつとアズールが耐えていると、薄闇に別の神格が浮き上がった。
醜い、しわくちやの老婆である。その姿も、御霊分けしたごく一
部の神格を投影してきたに過ぎない。

冥府の。久しいのう。

まあこれは、運命の女神よ。そのお姿、お久しぶりですこと。
前回の代理戦争ではお世話になりましたね。

前回代理戦争。

law 「ロー」サイド、chaos 「カオス」サイドはそれぞれ代理の人間を立て、世界の命運を決める神々の代理戦争を行った。

それぞれのサイド代表の人間を、『英雄』、『呪われし者』と呼び、各陣営の点数のとりあい合戦をしたのだ。

前は、law 「ロー」サイドの勝利に終わっている。

くかか。異界の若造めが、我らの世界に好き勝手に介入してきおる。ただし、きゃつは上位神よ。うかつに手出しはできぬ。

確かに。まして、この繊細な世界に、我らは直接介入できません。

その『お作法』も守らぬ匹夫ひつぽゆえ、仕置きがいるのう。

老婆はきひひひひ、と下品な笑い声を響かせた。

law 「ロー」サイド、chaos 「カオス」サイド、合意を得た。こたびも代理戦争を行う！

はっ、とアズールは視線を上げた。しかし慌てて目を瞑る。何万分の一の分神とはいえ、神の威光に目を潰されてはかなわない。

ただし！！ 相手は異界の神！ その陣営！ 心せよ！

ざわざわと老婆の髪がうねり、次第にその干からびた肌に生気が宿る。そう、老婆は若返りながら激を飛ばす。

ルールは、常どおり、星マーキングとされた生命、物、場、奪い合い、潰しあい、屈服させよ！

若々しく、それでいて恐ろしいまでに獰猛な女神は、その杖を床に叩きつける。冥府の立法者は各々うなずいた。

承知。本来それぞれの星は秘匿されますが、こたびの代理戦争、law 「ロー」サイド、chaos 「カオス」サイド、両陣営共闘ゆえに、その星は開示されます。

女王はぱらぱらと書をめくる。やがて名前を選び、その指でなぞると、紙面から金色の文字が剥離し、宙をただよう。

名を写そう！

王が女王の解き放ったいくつもの名前を宙に開いた巻物に写していく。

アズールよ。前回の選定者にして剪定者よ。そなたは、星を集め、陣営を整えなさい。

敵の陣営の星は明かされぬ。まして異界の神は代理戦争を知らぬであろう。しかし、きゃつはその子飼いを我らが世界に解き放った。それを星と見立て、代理戦争を実施する。

異界の上位神よ。僕らの世界で好きにはさせにゆ。

冥府の立法者が口々に言えば、恐ろしき女神は血も滴るような笑みで口をがっぱりとあけ笑った。

代理戦争。我らが大呪法じゃ。この世界のルールに組み込んで、思う存分蹂躪してくれるわ！！

女神は黄金の頭髪を振り乱してげらげら笑い、アズールに指示する。

はじめてのえがお

冥府の君より手渡された今代の代理戦争における星ぼしのリストを手に、アズールはそれらに目を通していく。

「マツシモ・ベルセルク以下略。魔神。魔界出身。 chaos 「カオス」サイド」

やはり、と眉間に深いしわが刻まれる。

あの脳筋皇太子が砂漠で行き倒れているのを発見した時、アズールは彼の命運が尽きていない、いや尽きてはならぬ人物だと星を読んだ。

ゆえに助けた。

また、彼はほとんど人類（魔を含む人型）最強の領域にいる男、リストにあがらぬはずがない。

「ドロテア・ベルセルク以下略。魔神。魔界出身。 chaos 「カオス」サイド」

マツシモの同腹の妹であったか。確か、女版マツシモと聞いた。

正直今から疲労で目の前が暗い。

「リュ・リュリュリュリュ・リュ以下略。魔神。魔界出身。注釈有り。 law 「ロー」サイド」

別腹の異母弟。

さすがに、魔神は強力な駒であるとして、魔神皇族関係者の列挙が多い。

しかし、この注釈 なるほど、そうか。実になりふり構わんなアズールは納得し、次、と視線を走らせた。

ずらずらと名前を読んでいき、時にその注釈にも目を通す。

やがて、彼は一つの名前に辿り着き、僅かに目を見開いた。

「ユーリー・ジャバウォック。ヒューマン。トンレミ村出身。 chaos 「カオス」サイド」

以下、備考欄。

彼の者、第X期代理戦争におけるchaos「カオス」サイドの代表、『呪われし者』の転生体。魂に重大な傷、欠落有。前世より呪いが継続。魔剣の魂への定着有。分離不可。要注意。

もはやアズールの眉間のしわは修正不可能なレベルで深く深く刻まれている。

「前代『呪われし者』 あのエレボスの皇子の今生の姿とは……」
どうにも気が引けて仕方ない。

彼の前生は、激しい宮廷争いのため、土牢の中で成人するまで幽閉されていたというエレボスの皇子である。

謀反防止のため、舌と四肢を切断され、すでに死んでいるだろうところを十数年驚くべき生命力で生き続けたため、神々に見出された。

成人するまで言葉も知らず、光も知らず、友は己の体を這いずる虫のみであったという。

当然愛する者などおらず、母の腕に抱かれたこともなく、ただ生きるために生き、chaos「カオス」サイドの代理人として見出され、孤独のためにその選定を承諾し、戦い、やがて死んだ者だ。恐るべき闇の抱擁をして、だれにもだかれたことがない、あたにかい、と彼は言った。その安らかな深い色をした目を、その最期をアズールにはどうにも忘れられない。

その転生体とは……

「胸糞悪い」

アズールは嘆息し、詮無きこと、と他の者を確認していく。

「エルマ・ワーロック。ヒューマン。デメルテ出身。注釈有り。
……ああ、我が弟子か」

一瞬誰のことかと思っただが、うん、我が弟子だ。あまり魔法適性はなかったが、師の自分をしてぞっとするほどの精密な魔力操作を身にかけている。魔力回路が焼ききれても超回復によって回路再生を行い、戦術級魔法の使用を可能とさせた。

確かに、リストにあがってくるにふさわしい人物だ。いや、それよりもその由来ゆえか。

次々と目を通し、各国著名人、放浪のハイエルフヤ、猫人、邪妖精、吸血鬼、竜族などの変り種もありつつ、最後に、今代の大将となる者の名前を拾う。

本来、law 「ロー」サイドは『英雄』、chaos 「カオス」サイドは『呪われし者』と呼称するが、今代は前代未聞の両陣営共闘である。

代理戦争は、互いに駒を潰しあい、取り合い、その魂の屈服や場の制圧によつて得点加算されるが、ある種のゲームと一緒に、王将を取った場合、ゲーム終了となる。ただし、総合得点で争うため、王将を取った側が勝つとは限らない。

「今代の王将となるべき人物は」

再びアズールは瞠目することとなった。

この人物、ふさわしいのか、果たして。

あるいは、誰よりも適任なのか。

注釈に目を通し、やがてアズールは巻物をくるくるとまとめて、赤い紐を巻きつけると、懐に入れた。

「やれやれ、老人をいつまで働かせる気やら」

嘆息交じりに、冥界の一本道をゆっくりと歩き出したのである。

ユーリー・ジャバウォック。

前回代理戦争時における、chaos 「カオス」サイドの王将である。

本人はあずかり知らぬことではあるが、その業は、今生においても尾を引く。

彼は、喜怒哀楽が理解できない。

「私は母親失格よね。私、あの子が、あの子が怖い。怖いんだよ」

すすり泣きしながら、自分を生んだという人が、一緒に暮らす身体（からだ）の大きな人に訴える。

身体（からだ）の大きな人が、その背中を撫（なで）でる。

「気にするな。あまり自分を責めるものじゃない。お腹の子に差しさわりがある」

ユーリーは手洗いにベッドを出て、その夫婦の会話を扉の隙間から聞いていた。

でも、なんとも思わない。

あの人（ひと）が何故泣いているのか分からない。

冷たいのも熱いのも分からない。

どうして胸にぽっかり穴があいて、ずっとふさがらないのか分からない。その穴はずっとずっと昔からあって、生まれた時からあって、多分もう自分の一部なのだろう。もしかしたら、その穴はどんどん大きくなって、真っ黒い穴が自分になるのかもしれないとすら思う。

不気味だといわれ、村の子供たちからも、日々殴（う）ったり蹴（け）られたりする。

でもどうでもいい。

どうだっていい。

そう思っていた。

「おら、ちょっとは泣けよ！」

翌日、道を歩いていると、村の子供につかまった。からまれ、無言（もくごん）でいると、突き倒された。

あとはいつもどおりの暴行だ。腹と頭は守ったほうがいい。まるまって、彼は耐える。

「きつみわりいな！ ほらっ 泣けったら！ 泣いてごめんなさい
って言ったら、許してやんぞー！！」

年長の子供三人は、笑いながら彼を蹴り続ける。

どうでもいい、どうだっていい。

飽きたらその内去る。へたな抵抗はかえって暴行を長引かせる。

「おい」

その時、xxxの声が聞こえた。

「お前ら、道の往来塞ぐな。邪魔なんだよ、どけ」

まるで、地獄の底から、響くような、酷く暗くて熱くてうねるよ
うなその声に、彼は必死に守っていたはずの面を上げようとした。

「あー、なんだよ、お前。生意気なチビだな」

年長の一人がうるさそうに言えば、

「ああ、こいつ。ウィルドさんとの」

「マジか？ ふーん……」

もう一人がいいことを思いついたと笑う。

「おい、チビ。てめえ、こいつに蹴りいれる。交通税だ。そしたら
とおっていいぜ」

屈託のない笑みで、やれ、と促す。

そうしたら、ざわり、と空気が揺らめくようなけはいがして、咄嗟に頭を腹の方に押し込めた。

「下種が」

とてもとても。暗い、今度は冷たい。その声が呪詛を呟いて、あとは怒声と悲鳴が聞こえた。

「なんだこいつきまわりい！ おい、放せっ 放せよっ」

鈍い音。何度も何度も人が殴ったり蹴られたりする音。他人が殴られると、こつこつという音がするのか。

変に感心した。

長いのか短いのか分からない時間が過ぎて、気がつくとき、あたりはしんと静まり返っていた。

彼はゆっくりと立ち上がり、×××が地面に倒れているのを見て、首をかしげた。

そろそろと近寄って、しゃがみこみ、観察する。

話しかけようとして、舌がもつれたが、人と長らくしゃべっていないので、仕方ない。

「ね、え、い、いた、い？」

×××は、地中に顔を半分突っ込んでいたが、ひどく緩慢に仰向けへと転がって、ぺっと土を吐き出した。口中が切れていたのか、血痰まじり、鼻血も出ている。人の顔に思えないありさまだ。髪の毛は血と泥でぐちゃぐちゃに顔面に張り付き、痙攣する腕を持ち上げて、髪を払った。

「失せる」

一言だ。

「い、い、たい？」

「会話のキャッチボールもできないのか。糞がき、失せる。とつとどっつかいけ。行かないならぶっ飛ばすぞ」

ぶっ飛ばされたのはxxxの方だと思う。

xxxは何度か立ち上がろうとして失敗しながら、それでもよろよろ立ち上がると、びっこを引きずり歩き出した。

彼が手を伸ばすと、汚いものみたいにはねのけられた。

行き場をなくした手が空中を彷徨い、彼は頭がぼうつとする。

しかし、xxxは行ってしまふ。

そのあとをとことこと追いかける。

ついてくるなど怒鳴りつけられたが、聞かずにただひたすらあとを追う。

xxxは、どんどん村の中心から遠ざかり、森の中へと分け入っていく。

「……ど、こ、いく、？」

ようやくなんとか声を絞り出す。これまで一か月分しゃべったような気がするが、無視される。彼はしゃべるのがあまり得意ではない。

言葉がうまく喋れない。

村の子供はそれをからかう。彼は喋れないのではなく、喋りたくなくなる。しかし、xxxに邪険にされても、何故か喋りたくなくなるのではなく、もつとうまく喋れたらいいのにともどかしく思う。

xxxは森の少し開けた場所にたどり着くと、腰を下ろした。何

かをじつと射殺しそうに睨みつけているけれど、ただ目の前には森が広がるばかりだ。

わからなくて、理解不能で、彼も少し距離をとって座る。

お互い喋らない。どうして×××が気になるのかと彼は不思議に思う。

×××なんかどうでもいい。

でも、こんな目は見たことがない。なに、これは？ 彼はひどく懐かしいような、それとも汚らわしいような、目がそらせない。

灰色の世界に、それはあまりにも眩しく、醜く、ああ、そうだ。誰か、彼に昔囁いた。

よ。教えてやろう。

それは、『』というのだ。

汝、選定を受けるか。

そうだ。

なんでもいい。

なんだっていいんだ。

誰もいない。ひとりぼっち。嬉しいのも哀しいのもない。そんなもの感じたたくない。でないと、心が耐えられない。

ここは暗い。寒い。誰の声もしない。僕の声もない。だって僕には舌がない。

手もない。足もない。

どこだろう。

どこだったっけ？

ここはどこ？

まだ僕はあそこにいるのかな？

これは夢なのかな？

どっちが現実なのかな？

誰がいる？ どこ？

皆同じに見える。皆生きてるの？
僕の夢なの？

ああ。でも。

×××は。

その目は。

その怒りは。

僕のじゃない。僕はからっぽだから、これは、僕じゃない。

これは、別のものだ。じゃあ、ここは現実だ。

僕はあの場所にいない。

ここは、あの、土のなかじゃ、ない。

手の冷たいこわばりがとけ、彼は引きつるような笑みを浮かべた。
ようやく。はじめて。

浄化のちから

ある日突然、彼女は这个世界に投げ込まれた。

意味が分からず、わけも分からず、そこは戦場で、火の手があちこちに上がっていた。

怒声と悲鳴が聞こえ、女の金切り声、すすり泣きがし、恐ろしさにあとずさるうとした時、

「女だ！」

その鋭い叫びに、発見された、ああ、もう終わったのだと。本能的に理解した。

あとはお察しのとおり。彼女は人間として、女性として、あらゆる限りの苦痛を味わい、放り出された。

あとは坂道を転げるようにして酷い暮らしをし、梅毒らしき病で鼻がもげ、局部は壊疽して、うらびれた風のびゅうびゅう吹き抜ける裏路地にむしろひとつにくるまっていた。

涙ももう枯れ果てた。

何故こうなった。どうして。あと二月で結婚式を挙げる予定だったのに。準備が本当に大変で、何度か彼とはけんかもした。

でも楽しくて、嬉しくて。友人たちが、ウエルカムボードを作成してくれた。手先の器用な友達がビーズでつくったティアラはきらきらしていてもきれいだっただ。花嫁の白いウェディングドレス。鶏がらみたいな体型がコンプレックスで似合わないよって言ったら、こづかれて、「俺がみたいの」って彼が言ってくれて、彼女は嬉しいのと同時に恥ずかしくて「寒い」といったらすごく機嫌が悪くなってあれは困ったなあ。お母さんは、「美津子がとうとう花嫁にねえ。あたしも年をとるわけだわあ」といって、お父さんは気に食

わないのかむすつとしていて、でもお母さんが「あれはね、俺の美津子が若造に取られる。さびしいっていえないだけなのよ。頑固だからねえ」とけらけら笑って教えてくれた。姉さんは、「まさか美津子に先を越されるとはっ」って頭にチョップくらわして、「しあわせになれよ！」って全身くすぐられた。「さびしいから、たまにはあたしと遊びなさいよ！」と、どっちが年上なんだか分からない。そのあとみんなでショッピング。帰りにおいしいものをいっぱい食べて、

しあわせな思い出が走馬灯のように脳裏をよぎり、彼女は声もなく、涙もなく泣く。

こんなところで。

一人。

誰にも知られずに。

死ぬの？

それとも、死ねないの？

どうしたらあの場所にもどれるんだろう。

ああ、でもきつと。もう戻れない。

だって、私、もうもとの私じゃない。

しあわせな花嫁さんになれないよね。

こんなに汚れてしまったもの。

ウエディングドレス、似合わないよ。

着られないよ。

哀しい。哀しい。哀しい気持ちの中に、うらみが、憎悪が、おきび燠火
のようにくすぶっている。

もう動く力もないけれど、彼女の中に確かに存在する。

その憎しみに惹かれるようにして、『それ』はやってきた。落ち
てきた。

よ。なんじの ぜつぼうが いとおしい。

なんじ せんていを うけるか

もう動かない。

舌がもつれて言葉を告げることまでできない。

それでも、確かに。

彼女は。

イエス、と受諾した。

それは、ずいぶん昔のお話。

千年以上も前の話。

彼女は、いまだに世界をさまよっている。

『 』を求めて。

大陸間盟主の環。

元々は、神々の代理戦争におけるLaw 「ロー」サイド陣営の協力体制を指す。

盟主には『英雄』がなるのであるが、今回この中心には、じよじよに人口膾炙くわいあつされるようになったフェリユシオンの聖女、あるいは神子みこの影があつた。

「次は、いよいよ白き竜の山脈ね」

外の風を感じたい、と馬車の外に出ていたミチルが呟くと、御者

を務めていた青年が肩越しに、

「ああ。神子よ。彼らは気難しいというけれど、きつと君なら大丈夫だよ」

そう励ましの言葉をかける。彼はハイエルフのディランバーク氏族であり、その王子でもあるジーク。その氏族はすでに同盟に参加の意思を示し、ジーク自らミチルたちのパーティに参加して協力することを申し出ていた。

「あんまり無理はするんじゃないぞ！ ミチル！ いざってときは、俺が守ってやるけどな！」

これは獣人族のゴルドー。大型猫科の獣人で、朱金の鬣たてがみのような豪華な頭髮に、金色に近い虹彩の目で、ほとんどライオンを想起させる人物だ。彼らの一族もすでに協力を約束してくれている。

「ふう、これから交渉にいくっていうのに、獣人は野蛮で嫌になっちゃうな。神子、いざというときは僕に相談してね」

魔法の発展著しいエレボスで最年少の賢者オルカ。やや小柄だが、毒吐きでその存在感はパーティでも随一である。

「てめえっ くそがきっ ぶっ殺すぞ！！」

気炎を上げて今にも飛び掛りそうなゴルドーに、ミチルは「もうっ」と怒った顔で仲裁に入る。

「二人とも、けんかは止めなさいっ ほら、ヨナスだってあきれてるわよ！」

北方のドゥーガ、武断の国であるが、その精鋭たる黒騎士団団長であったヨナス。

国王命令ほか、本人の強い希望もあって、ミチルたちのパーティに同行してくれることとなった。

話をふられたヨナスは、馬車に平行させるように馬を走らせていたが、

「聖女殿のいうとおりです。皆、少し気を引き締めるべきでしょう」
そう同意する。

「っち」

「ふーんだ」

注意された二人はかなり大人げない対応だ。それを幌の中から黙って観察していた黒髪の少年が頭の後ろで手を組み、からかうように口を開く。

「ミチルも苦勞するよなー」

「タクマったら」

そう彼女が再度たしなめようとした時、

『HIIIIiiiiiiiiiiiiIIIIIIIIIIIIiiiiiii
iiiiiiiiiaaaaaaa
AAAAAAA!!!』

その恐ろしい絶叫は聞こえてきた。

全員戦闘体勢に入る。

「ミチルっ 馬車の中に!!」

ハイエルフのジークが叫び、背中の矢筒から精霊の矢を抜くと、ぎりっとながえた。

「くっ、魔族め!」

各人憎憎しげに吐き捨て、それぞれの得物を構える。

薄暗い森の深奥より、それは姿を現した。

半透明の袋につまった血と臍物。かろうじて人の形をしている。

巨大で残酷な醜悪の限りを尽くしたそのオブジェ。

「魔族のやつら、とんでもないもん放ちやがって!!」

「デメルテを壊滅させた原因です。皆さん、気を引き締めて」

「分かてるよ! xxxxx火球!!」

圧縮言語による専制攻撃の魔法を放ったのは、最年少賢者のオルカだ。

彼らは一人一人が人外の領域にある一騎当千。

デメルテを蹂躪し、壊滅に追い込んだそれも、連携して追い詰め、「ミチルっ 浄化の力を！！」

「ええ、分かったわ！」

ミチルは馬車を飛び出し、神から授かった『浄化』の力を使う。あたたかく優しい光が巨人を包み、やがて光は小さく収束していく。

そこには、一人の傷だらけの女性が倒れていた。

ミチルは近寄り、「危険だ！」との声も聞かぬふりで、彼女のそばにひざをつく。

そして、そっと抱き起こし、彼女を抱きしめた。

「辛かったね。苦しかったね。もう大丈夫だよ」

やがて目を覚ました女性は、虚ろだった目に次第に理性の光を取り戻すと、ぼろぼろと涙を流し、震える手を必死にミチルへ伸ばそうとする。その指先を、しっかりとミチルは握り返してやった。

「大丈夫。もう辛くないよ。大丈夫だから」

女性は極度の疲労のためか、再び気を失った。

ミチルもまた涙を流しながら、「ゆるせない」と下唇をかむ。

「どうしてこんなこと。私、まだまだ力が足りないよ。くやしい」タクマが進み出て、その頭をぽん、と叩いた。

「ばーか、ミチルはよくやってるって！こんなことする奴がおかしいんだよ。白いトカゲちゃんが何か知ってるかもしれないねーし、だからこうして急いでるんだろ」

「うん。タクマ、ごめん。あと、ありがとう」

ミチルは心を奮い立たせ、泣くなんて恥ずかしいな、と笑顔になる。

「がんばる。みんなの力がないとだめなもの。あと、できれば」そう、できれば。

ユーリーが仲間になってくれたらいいのに。どこにいるのかな？

そう彼女は呟いた。

< 神さまメモ >

EXスキル。 『浄化』

- 神官職、巫覡ふげき職専用のスキル。

- 異界の神の神子、聖女における場合、隠しEX
スキル 『洗脳』 が併用発動。

I MISS YOU .

自国商業都市デメルテ壊滅の報復措置として、フェリクション王国は魔界に宣戦布告。

とつて返す足で魔界の蛇人村を急襲し、女子供にいたるまで虐殺。なお、この闘いには、デメルテに縁者のあつた者たちの志願兵が多く参加していた。文字通りの報復戦であつた。

また、同時にフェリクション国王ブルーノー五世は大陸間盟主の環の発動を聖女ミチルを通して要請し、これを各国は受諾。

ディランバーグ氏族をはじめとするエルフ、ニブル獣人連合も賛同し参戦。

白き竜の峰にある天空城、白竜たちもまたフェリクション王国の聖女の協力要請に応じた。

対する魔界側では、動きが揃わなかつた。

一部、いやほとんどの過激派が個別に撃つて出るゲリラ戦へと突入していた。

個対個における、魔族側の優勢は圧倒的である。

しかし、圧倒的個に対する、多数の弱者の連携は、時に圧倒的個を凌駕する。

戦局は混乱している。

「最近、嫌な感じだな」

私は仕上げた呪札をマーチャント&アドベンチャーズ支部に納めながら、受付のおねえちゃんに話しかけた。

おねえちゃんは、「はいはい、じゃあこれで」と受領した後、「ですよねー」

とめいっばい頷いてくれる。

ここはフェリクション聖都。色々あったが、結局私は一人で都市部に出てきて、日々をつつましく暮らしている。

色々というのは、便利な言葉だが、ご寛恕いただきたい。

まあ、あれだ。結局私にできることなんぞ何もない。謙遜と力量不足の区別はつくつもりだ。

長老も言っていたが、「自分ができることを、せいっばいやれっばい」のだ。情けない気もするが、奴や鈴木のを引つ張るつもりはない。身の程知らずにはなりたくない。逃げの言葉だと、責めなければ責めればいい。甘んじて受けよう。実際私は臆病者だ。

「デメルテが襲撃を受けてから、もう空気が最悪っすよ。殺伐殺伐」このおねえちゃん、見た目色っばいののに、中身が残念すぎる。おそらくがっかりしているのは、私だけではあるまい。

「皆目の色を変えているからな。戦端が開かれてから、呪物の需要も鰻上りで、私のようなぼっと出の呪物下請けですら食うに困らんくらい発注が来る」

「そうなんすよー。需要に供給が追いついてない感じ？ ってなわけで、ウィルドさん、馬車馬みたいに働いてくださいね。血い吐いてもいいっすよ」

労災おりるっすから、安心してくださいっす、とその眩すぎる笑顔に全私がドン引きした。

血反吐が出るまで働けと。

「そっついやー、聖女様が旅立たれた後、すれ違いで勇者パーティーが行が来たらしいんすけど、残念でしたね。聖女と勇者のパーティーだ

「だったら、魔族ぼこぼこつすよ。そしたらはやく決着がついて万々歳だったんすけどねえ」

「……」

私は己の薬指にはまる銀色の指輪に視線をおとした。

「まあ、そんなこともあるだろう。さて、私は次の仕事があるので、これで失礼させてもらおうよ」

「はいなー、またのお越しをお待ちしてるっす！」

色々な意味で濃すぎるおねえちゃんだった。

踊る怪魚と奇運の道化亭。

何やら物凄く微妙な名前なのだが、この由来を聞くと、小一時間ほど髭面の主の話に付き合わなければならぬ。

ここは一階が昼間はランチ、夜は酒の飲める店で、二階からは下宿を営んでいる。現在の私の仮住まいである。

「おやつさん、ココマート定食頼みます」

帰りしな、定食を頼むと、にゅっつと髭面の亭主が顔を出し、「

……まかせろ」と、明らかにホラー系聖林映画における肉体派殺人鬼の笑顔で出迎えてくれた。分かりにくいたとえばとえで申し訳ないが、詩の才能は皆無ゆえ、その辺ご賢察願いたい。

ともあれ、これがあるから流行はやらないのだろう。気の毒だが、私の財布のために、もうしばらく閑古鳥に鳴いていていただきたいものだ。

ちなみに、ココマート定食もしくはバコタール定食の二つがあるのだが、前者の方が安い。バコタールの方が肉が多く、デザートもつくのだが、贅沢は敵だと内なる私の心の声が絶叫してやまないの
で、ココマート定食しか食べたことがない。

「ギルドの方は、どうだった」

おやつさん、顔は鬼人系だが、心は優しく、人恋しいタイプゆえ、下宿を営んでいる。しかし、その願いに反し、交流関係がとても悲

しいことになっているので、彼の笑顔の洗礼を受けてなあとどまり続けた下宿メンバーとの会話を何よりも楽しみにしているらしい。

「ご飯を頼むと、必ず世間話を仕掛けてくるのだが、とても頭のいい人なので、私も楽しく会話に興じる。」

「やはりどうも殺伐としているよ。呪物下請けを回った後、冒険者ギルドにも顔を出したが、かなり雰囲気が悪い」

勇者パーティーのうち、鈴木の評判がこのギルドでかなり悪く、私は憂鬱になった。

鈴木ははつきりと、自分は報酬なしには働かないと明言している。また、国のためにも働かないと、それも白黒はつきり口になっている。前者は冒険者として当然のことだ。後者は角が立つというより、対外的にまずかろうと思う。納得すくで、この世界のために動く気なんか微塵もありませんから、という彼女のポリシーゆえの言動であるので、私は何も言わなかった。

ただ、彼女のことを中傷する輩があり、それも匿名でびらを配布したり、噂したりする。

どれだけ暇人なのかと思うが、過去鈴木に叩きのめされたりした輩、あるいは同業者の嫉妬によるもののようなのだ。

影で人を中傷する前に、自分で名声を高めればよいものを、だから駄目なんですよ。きつとこの陰険さから見て性格は最悪で根暗、将来性も才能も皆無でしょう。陰口を叩くのが関の山なんですよね。ああ、かわいそうですね。同情します。と、ギルド内で発言した鈴木に、マジで勇者の面影を見た。暗黒の勇者だ。

ギルド内の空気が、凍りつく瞬間、何人かが腕をまくって彼女に近づいていったが、彼らのその後を知るものはいない。

本当に彼女は日本人なのだろうか。まあ私も過去の盗んだバイクで走り出し、夜の校舎の窓ガラスを叩き割りました的比喩表現の黒歴史があるので、人のことは言えん。

「ん、この人参ソテーうまいな」

「おお、分かるか？ ちよっと味付け変えたんだがな」

てれつと熊髭のおやつさんが眦を下げる。なんだ貴様。ちよつと
きゅんとしたではないか。

「……つぐー!!」

思わず薬指を押さえる。

これも駄目か！ これも判定黒なのか！！

「お、おい。どうした」

「……変態の呪いだ」

私はテーブルに突っ伏して、息も絶え絶えに答えた。指が食いち
ぎられるかと思っただわ。

この指輪。おっそろしいことに、^{エンゲージ}祝福の指輪　く死が二人を分
かつまで、愛することを誓いますか？』という神のギフトアイテ
ムである。

鈴木と腹を割って話し合った翌日、奴に無理やりはめられた。
はめた瞬間、

デロデロデロデロデロデロ。村人はのろわれました。

と、変な音が！ 変な効果音と変な宣言が聞こえたんだ！！ 本
当だ！！！！ 嘘じゃないっ
物騒なそれに慌てて必死に外そうとしても、

この装備はのろわれています。装備解除できません。

と声が聞こえてきた。本当なんだ！！

いかん、興奮して動悸がしてきた。

深呼吸だ、ビークールビークール。クールになれば、苦勞など
せんわ！！ 思わずがっきと、フォークを皿に突き立てる。

「お、おい。トマトが大変なことになっているんだが」

おやつさん、すまない。食べ物を粗末にはいけない。テーブルマナーも最低だった。謝罪する。料理はおいしくいただけこう。ただ、これだけは言わせてくれ。あの無茶苦茶しやがった後、頬を染めて、「……約束だから」とのたまった奴の指に同じものはまっていた。その顎に、下方から拳を突き上げてやった私は悪くない。

本人の意思確認。

しろよ、まずはっ

断るがな！

もう私の中では、奴「キモイの不滅の等式ができてしまっている。どんなに顔がよかろうが、勇名をはせていようが、ストーカーに人権はない。顔がよくてもあれは駄目だ。どっちかっていうと、私の好みはおやつさ……私はその後三十分ほど悶絶して、おやつさんに大変心配をかけた。

ぐったりと自分の部屋に引き上げた私は、手のひらを陽光に透かし、指輪をじっと見つめた。

あれこれ言ったが、これは必要なものだ。

神のギフトアイテムは伊達じゃない。奴ですら、これを手に入れるには相当大変な思いをしたらしいが、この恐るべきアイテムによる婚姻という最大の祝福により、私の業はある程度被われている。感謝すべきなのだろう。だが、まずは説明が欲しかった。光のない目で押し迫ってくるから、死すら覚悟した。

実力行使の前に、一言説明を願う。それも贅沢なのか。

「……まあ、身勝手は私もか」

自重し、私はベッドに仰向けに倒れた。

結局、頼りきり、依存している。本当は文句など言えた義理ではない。

「……馬鹿な奴」

もっといい方法がある。

私を見捨てればよい。

この指輪。

祝福による被いの効果だけならただの凄いアイテムだ。だが、代わり心変わりを許さず、結びつけた二人の業と徳を按分あんぶんする。

私にとっての呪いというより、奴にとっての呪いであろう。

今、奴はどこにいるだろう。無事だろうか。鈴木は無理をしていないだろうか。聖騎士殿はあれで頼りになる人だ。まだ会ってもいないが、回復役もいると聞いた。彼らが怪我をしたら、いや、しないように見張って欲しい。

私は動けない。動くわけにはいかない。それでも。

「……会いたいな」

無意識に零れた言葉を。

私はとても恥じた。

嵐

魔界。

魔王の間である。

各民族の中でも、筆頭となる上位魔神たちがそこに集っていた。「あたくしの。かわいい蛇人が汚らわしいカス！ クズ！！ 汚物！！！！」どもに皆殺しにされましたの。あたくし、溜飲を下げずにはおれませんわ」

口火を切ったのは、蛇のような目をした九頭竜デボラ公爵である。いらいらと手元の扇で自らを扇ぎながらの言だ。高く高く天をつけとばかり鋭い三角錐のタワー状に巻き上げた緑色の髪が、その剣幕にあわせてざわざわと蠢き、零れ落ちる。その頭髪は、何千何万もの細い蛇であった。爬虫類嫌いには大変きつい光景である。

「最近の人間どもの調子の乗りっぷりはいただけませんなあ。まっことエレガントではありません。デボラ公に私は賛同しますよ」まっしろな髭をそよがせ、これは吸血公メルキオラ。ちなみに、その甥に当たる第一世代眷族が、勇者ユーリーのパーティに討たれているが、「強き者。その心意気やよし！」とまったく気にしていない。むしろ「グレイト！」とスタンディングオベーションしかない賞賛っぷりを発揮した。

一見紳士に見えるが、中身は良識人まっさおの武闘派である。

「くくくくく！ 血が騒いで仕方ないわ。私が先陣切つて、きやつらを蹂躪してくれよう！！」

大変嬉しそうな、これはドロテア皇女。すでにその大剣を、場もわきまえずに振り回しそうなご機嫌具合だ。

「いいえ、皆様。お手だし無用ですわっ あたくしがこの手で自ら！ あの汚物どもを地獄の業火にこんがりくべてやりますのよ！

あるいは生きたままで踊り食いをしてやりますわ！！ 九つの頭で手足をばらばらに引き裂いてやりますの！！！！」

デボラ公は手元の扇子でせわしなく扇ぎながらぴしゃりとはねつける。

「デボラ公。愉しみの独り占めはいただけませんなあ」

「我らに任されよ。主はたおやめ、任せるにはいささかもものたりない」

「俺がやる！ 俺がやるう！！ お前らいらん！！」

誰もかれもが俺が私がワシがいや僕がと挙手して口々に主導権を握りたがり、まったく収拾がつかない。

協調性？ それは食べ物ですか？ それとも武器ですか？

魔族とはまさに超個人主義の集まりだ。

「よし！ いいことを思いついたぞ！！」

ドロテアが喜々として提案する。

「皆好きに人間どもを襲撃すればよい！」

おおつと超個人主義者たちは一斉にどよめいた。その目に浮かぶ尊敬、きらめき、喜びは、ドロテアへと一心に向けられている。

「さすがですぞ！」

「殿下！ なんというすばらしきお考え！！」

「賛成っ」

「我も賛成！」

「わらわもさんせい〜」

大団円である。

「陛下、よろしいですかな？」

よぼよぼで、目が長く垂れ下がる眉毛で一切見えない宰相トロンプが尋ねると、

「よきにはからえ」

トップからして自重しない。

こうして魔族の「皆好きに人間たちを襲撃しようぜ！ だってあつちが勘違いして先に手を出してきたんだもん！ ヒヤッホー！

やるぜやるぜやるぜえええ」なムードが蔓延し、一番トップも許可した結果、人と魔族の戦端は開かれてしまったのである。

この時、ストッパーになってしかるべき人物が一名いたのであるが、その時彼は度重なる心労のため重度の胃潰瘍を発症し、緊急手術を行っていた。

後に彼 リュ皇子はこの顛末を聞いて、

「もうつんだ。これは無理ゲーだったのだ。無理。絶対無理だった。奴らには道徳、理性、協調性、何もかもが欠けている。あいつらに道理を説こうとしていた私が間違っていた。すまぬ、勇者よ。私は無力だ……っ」

とそのまま首を吊ろうとしたため、その執事が慌てて止めに入っただという。

「殿下っ ご心痛お察しいたします。おお、なんとお気の毒な」

この老執事、リュ皇子の幼少より仕えており、その成長を見守ってきた。歳は関係ないと豪語する好戦的魔族ではあるが、リュ個人への愛情は本物で、いつも影から栄養ドリンクを皇子に差し入れていた。彼はまず医者を呼んだ。

宮廷医はリュ皇子に、魔族においてはほとんど例のない、罹患すれば不知の難病とされる『鬱』^{うつ}診断を下した。

難病診断された病人の寝所を、姉のドロテアが急襲し、「軟弱なっ 我に続け！」と人間界に引つ張り出すのはまた別の話だ。その後を、カロン侯爵が喜々として追っついたのである召使が目撃している。

胃潰瘍は完治していない。そろそろリュ皇子には死相が見えてきている。

魔界側の事情とは、かくもお粗末なものであった。

扉を叩く音がする。

寝転がっていた私は、むくりと起き上がり、嘆息交じりに「どうぞ」と言い放った。

「ぬ、邪魔をするぞ」

赤い頭髪の身長二メートル（メートル）の大男が扉を開ける。見事を通り越して圧倒される体躯の持ち主だ。存在するだけで、まず映画のモーゼの十戒がリアル再現される光景を何度も見た。赤子は火がついたように泣き出すし、大人の男でも腰を抜かす。炎のような頭髪が、あまりの気迫にうねうねと蠢くかにすら見える。しかし、慣れとは恐ろしい。

「アズールが用があるそうだ」

はあ、と私は曖昧にうなずいた。

この人物の正体はすでに聞いている。

魔界の皇太子だそうだ。それを顎でこきつかう魔法使い。

さすがに鈴木のお師匠様なだけある。

私はゆっくりと立ち上がる。

そう。私は。

ここから動かない。動けない。

まだ、決め手が。

それとも。

何か事態が進展したのか。
予感がする。

嵐が来る。

そして、嵐の前は、静かなのだ。
今は、その静けさだった。きっと。

悪食な怪物のとおりみち

「入るぞ」

魔界の皇太子がノックもせず扉を開け放つと、

「ご苦労」

下宿先の隣人は、背中を向けたまま魔界の皇太子を適当にねぎらう。

皇太子はさつさと入室すると、我閉せずとばかり、どっかと椅子に腰を下ろしてしまう。

私もその後が続くべきかどうか迷っていると、隣人は、「呼びたててしまったな、入ってくれ」と促した。

「ああ、いや、何か進展でも？」

そう応じながら、私は隣人の部屋へと一歩足を踏み入れた。

薄絹一枚を通すかのような違和感があり、それもすぐに突き抜けた。

人払いの魔法だと隣人はいう。

「ふむ。二人とも、この星図をみるがいい」

隣人 古トリエステの大罪人。邪悪な魔法使いアズール・ココが、卓上を指し示す。

なぜこのような歴史上の大物が私の下宿先の隣に部屋を借りているのだろう、と時々なんともいえぬ気持ちになるが、事態はこの世界に投げ込まれた時より動き出してしまっている。

魔法使いが指差す先には、漆黒の平面図がある。よく見れば、その暗黒に、無数の点がさんざめく煌いている。その様は、息を呑むほどに荘厳で美しい。

その点とは、『星』である。

時に瞬き、時に消失する。

神々の代理戦争における、『星』たちの勢力図であった。

「この星図において、動くブラックホールのような軌跡がある。見

よ、星ぼしが消えていく」

言われるとおり、光を放つ星ぼしは、宇宙に無数に広がりながら、まるで悪食の怪物が通ったかのように黒い道筋となっている部分がある。

私は息を呑んだ。

「異界の神の陣営、その星は分からぬ。が、この軌跡を見れば、異界側の王将の動きが読める」

魔法使いは金の指し棒で星図の黒い道を辿っていく。

「フェリュシオン聖都を起点とし、ディランバークの森、エレボス、トリエステ、ステップ草原、ドウーガ、白き竜の峰」

くくく、と魔法使いはむしる愉快そうに喉を鳴らした。

「まるで星ぼしを食い荒らす怪物の通り道を見るようではないか」

「……勇者たちはどうなんだ？」

「案ずるな。奴らの輝き、この俺でも目が痛い。この赤き巨星、青き炎、白き輝き、翠の瞬き、奴らは無事だ」

星を棒の先でなぞると、その名前が浮き上がる。

赤の星　勇者、ユーリー・ジャバウォック。

青の星　魔法使い、エルマ・ワーロック。

白の星　聖騎士、ガブリエル・ゴンザレス。

翠の星　僧侶、白雪

エルマとは誰のことかと思ったが、鈴木はこちらの世界の名前である。

彼女は、この名前を捨てた。

しかし、この世界のルールで代理戦争を行う以上、その『星』として列挙される名前は彼女が捨て去ったものとなる。

彼女の意に添わぬ名前を無理やり与えた存在、かの陣営と戦っための『名』。

実に皮肉な話だ。

「まずは、自分の身を考えることだな。ウィルドよ、お前が敵にとられては、代理戦争も終了のお知らせだ」

私は苦い気持ちで椅子を借り受ける。

「私が王将といわれても、納得いかんのだが」

はじめ、鈴木 of 師匠だというこの魔法使いが現れて、一切の事情を説明した時、王将が自分だと聞かされて、私はパニックになった。しかし、鈴木に、私は約束したのだ。

力になる、と。ともに立ち向かうと。

その言葉を嘘にするわけにはいかなかった。

力がない。

能力がない。

だから、そのことを言い訳に全てから逃げるのか？

大体は逃げる。それが賢い生き方だ。

だが、逃げていい時と、絶対に。どんなに無様でも。情けなくとも。みつともなくても。

逃げてはいけない時がある。

恐ろしいと思う。今にも全て投げ出したいとすら思う。まして納得はしていない。していないが、私は『選定』を受けた。今、一番の強敵は、恐怖心に折れそうになる自分自身である。

「納得するものではない。何、至上最低最弱の王将と自覚して、動かずにいてくれるのは、こちらとしてありがたいことだ」

けなされているのであるうか。まあ、前線で一騎当千の働きをせよといわれても、しり込みして辞退するのが関の山なのでありがたいはある。

「代理戦争における駒のとりあいは、主に魂の屈服、場の制圧にある。星の寝返りは、まさに魂の屈服の最たるもの。だが、この動き、本来ありえん」

魔法使いは星図の黒い道筋を指し、声を低くした。

「英雄、呪われし者。確かに絶大なるカリスマを発揮しようが、この食い荒らし方。おそらく、『洗脳』系のスキルを持っているのかもしれない。本来はありえぬことだ。そのようなスキルが代理戦争において許されれば、魂の屈服が勝利条件の一つである以上、ルール

無用の無双状態となる。これまでの代理戦争においては禁じ手とされてきたこと」

「その禁じ手を、異界の神が守るとでも？」

「で、あるな。ゆえに、こちらの星の敵王将への接触は厳禁とし、各方面には通達してある。時遅く、時期を逸してしまった面もあるがな」

その時、黙って聞いていた皇太子が口を開いた。

「聖女は強いのか!？」

「黙れ」

魔法使いが大変冷たい目で皇太子を見やる。

「脳筋は口を閉じているがいい。安心しろ、マッシモ殿下。お前は最終兵器だ。いずれ、ふさわしい局面のふさわしい時を選び、世界最強の存在に近いお前をして、もう無理だかんべんしてくださいと弱音泣き言を吐くまで、延々強敵と戦わせてやるわ」

「なにいつ」

マッシモは物凄い形相で立ち上がる。びびった私が椅子ごと思わず後退すると、

「必ずだぞ!!! 約束だぞ!!! 俺より強い奴と、必ず戦わせる!!!」

目を爛々と輝かせ、皇太子は耳まで裂けんばかりに口端を吊り上げながら喜び勇んで魔法使いに飛びつこうとする。

しかし、何か障壁のようなものに阻まれて、「あがつ」と顎を空中にそらし、再び椅子にどすんとしりもちをついた。

私は……とても生温かい気持ちになった。

魔族つて、皆こんなのですか？

「あれは放っておけ、話を戻すぞ。今回の『大陸間盟主の環』の発動において、フェリユシオンの聖女が立役者になったという。おそらく、このパーティ内に誰か王将がいる」

「可能性として高いのは、要となる聖女もしくは神子と呼ばれる存在ではないのか？ 私達の……」

すでに魔法使いには、鈴木より私達の事情を話してある。魔法使いは察したのか、うなずいた。

「異界の神へ願ったという少女。いかにも条件に一致する。おそらくは、聖女　というより、異界の神子と称すべきであろうが、そやつが王将の可能性が一番高い。勇者たちには、この存在との接触は特に避けるように告げてあるが、そろそろ事態収拾の時だ」

異界の神子が、聖都に帰ってくる。

魔法使いの言葉に、私は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

「本当に……私のスキルは役に立つのか？　今日は、呪札を納入する際、買取額の交渉をしたのだが、ことごとく笑顔でかわされたぞ」
「その手の類のスキルなのではないだろう。商人職に見られる『交渉』と似たスキルかと思ったが、名称も異なるし、実際交渉有利になる効果はないようだな。妙なEXスキルだ。各陣営王将　過去の英雄、呪われし者ともに、その選定を受けて、特殊スキルを手にするのが通例だが、今回の戦闘系スキルとはかけはなれたEXスキル。俺にもその実態がよく分らんのだが、ある程度推測を」

その時。

扉をノックする音がした。

人払いの魔法は、味方には効果がない。

「私は思わず立ち上がった。」

扉が開く。

「あーちゃん」

奴が、立っていた。長い旅路でもっと薄汚れてしかるべきところ、相変わらずの清涼感満載な姿。

「ただいま」

その指には、銀色の指輪が光っていた。

「ぼーい・みーつ・がーる？」

「ただいま」

そう告げた奴は、そのまますたすと歩いてきて、「触るよ」ともなんとも言ったか言わないうちに、人のことを抱きしめてきた。

まさにぎゅっつとという感じで、人の肩口に顔面をうずめて何か吸ってやがる。

「こわい！いいいいいい！！！！」

死にたい。いつそ死なせてくれ。気づけば、奴のパーティーメンバ―全員お揃いだ。衆目監視の羞恥プレイですか。

私の目は今死んだ魚の目です。

『祝福の指輪エンゲージ』死が二人を分かつまで、愛することを誓いますか？』の力、さすが神のギフトアイテム、半端ではございません。

もともと勇者のくせに血と汗の臭いなどとは無縁ですとばかり、フローラルな香りをぶんぶん振りまくとんでもない奴だったが、これにフェロモンが加わった！以前より無駄に撒き散らしていたが、指輪の力で、対限定個人向けの！甘い香りが！！

恐怖とは裏腹に、正直指先から力が抜ける。

砂が口から出る。内臓も出そうだ。勘弁してください。

これは新手の拷問か。これに耐えることが試練なのか。

「勇者よ。今代の王将の口から抜けてはならんものが色々抜けている。そろそろ勘弁してやれ」

魔法使いよ、あんたはいい人だ。これからリスクトする。今度夕飯奢ろう。

奴がしぶしぶ拘束をほどくと、私は体勢を立て直し、全力で奴との距離を取った。

「あーちゃん、どうして」

私はとにかく急いで聖騎士殿の後ろに咄嗟に隠れた。「あらあら」

と聖騎士殿は笑っている。すみません、お帰りなさいと挨拶してから、奴に向かつて、

「身の危険を感じたからだ！ 近寄るな!!!」

威嚇してやった。もともと抵抗しても無意味な力の差があるが、自らの身体も裏切る状況では、奴との距離をとるのが唯一の防御方法である。どうせ貧相な身体だが、私は状況に流されてなどという尻軽にはならんぞ。最大級感謝もしてはいるが、他の方法で借りを返す！

「んふふつ リーダー駄目よ！ キティちゃんはね、あんまりかまいすぎると、嫌われるのよ！」

ちよ、追加ダメージが。聖騎士殿、あなた、キティはない。それはない。

奴がその言葉を「んふん」と真剣に心のメモに刻んでいる様子を見て、もう私はどっと疲れていた。

だが、初顔合わせとなる勇者パーティの回復役を見て、癒された。猫妖精族ケットシーの女の子。白猫だ。彼らは二足歩行のそのまんま猫の姿をしている一族だ。身長は、成人しても人間の子供くらいにしかない。ここまで見事な白猫はじめて見た。翠の目は宝石のようだ。白い外套を羽織り、金の垂れ房のついたトルコ帽のような青い小さな帽子をちょこんと被っている。その手には、自分より大きな櫂の杖を持っている。にくきゅうふにふにしたい。にくきゅうふにふにしたい。大事なことから二度言いました。

かわいい。目が合うと、にこつと微笑み、ぺこんとお辞儀してくれた。

「はじめまして。白雪バイシュエといます。よろしくおねがいます」

「あ、う。こちらこそ」

慌てて挨拶したが、どもった。かわいいは正義、猫は正義。猫、万歳。

「師匠。ただいま帰りました」

私がおたついている間に、鈴木が魔法使いに挨拶している。この

二人、師弟関係にあるらしいが、魔法の伝授の他に、何か別のものを継承している気がする。

「状況は？」

「はい。各地の『災い』狩りを行いました。数がかなり増えています。また、やはり『災い』は聖女パーティーの痕跡を追っているようです。今も聖都へ続々と集まっているみたいですね」

それから、と彼女は鞆をまさぐり、黒い包みを差し出した。

「なんとか、サンプルを入手しました。『災い』を聖女が浄化した結果、人に戻った例が報告されています。あるいは、人とならずに、光と消えた事例も。核となった人間は、異界の人間とおぼしき者から、この世界の人間まで様々のようですが、はっきりしたことは言えません」

「ふむ。やはり、『災い』はその性質から見て、『寄生物』のよ
うなものらしいな」

魔法使いはうなずき、「せめて、浄化されたという人間に事情聴取できればな」と呟いた。

「それは難しいでしょう。浄化された人間は、全て聖女に骨抜きです。まず協力は取り付けられないと思います」

鈴木は難しい顔で答えた。

すると、魔法使いは、白猫さんに尋ねた。

「『浄化』は本来、神官、巫覡ふけきの領分だが、こちらの手で『災い』を人の姿に戻すことは難しいだろうか」

「それは、とつてもむずかしいと思います。前例がないことと、おそらく大神官クラスが何人も用意周到に準備して、それでもできるかどうかわかりません。この世界の本来の法則にあてはまらない異物だから、『災い』なのです」

「で、あるうな。とりあえず、『寄生』の実態でもつかめただけよしでしょう」

私は、そこでようやく口を挟んだ。

「『寄生物』というのは、どういうことなんだ？ 以前、映像球

の上位魔神があれば宇宙空間からやってきているらしいといっていたが」

「まさしく。大本は、宇宙空間より飛来している。寄生物の本体というべきか」

私はそこで、まさか、と瞠目した。

まさか。

そんなこと。

「ふむ。察したようだな。我らも同じ結論に」
言いかけた魔法使いは、はっと目を見開き、「ちいっ」と舌打ちした。

「いかん！ 奴ら、人払いの魔法が効かぬとは！」

まさか、直接に！！

そう魔法使いが言うと同時に、再びドアがノックされる。

本来、ここに訪れるべき人物はどこにもいない。

いい、とも悪い、とも言わぬうちに、扉が開かれる。

そこには、小柄な黒髪の少女が立っている。

背後には、威風堂々たるただものならぬ男達。

少女は儂く、華奢で、庇護欲を抱かずにはいられないような、まるで精霊のような容貌だ。

桜桃のような唇が開き、透けるような白い頬にばら色がさす。

「会いたかった！ ユーリー！！」

彼女は花が咲き零れるかのようにして大輪の笑顔を咲かせた。

みえざるEXスキル

「会いたかった！ ユーリー！！」

頬をばら色に上気させ、彼女は駆け寄ってくる。その長くみどりなす黒髪は、天使の輪をきらきらと放つかのようだ。

細く華奢な指先を祈りの形に組み、大きく零れ落ちそうな潤む瞳で、奴を見上げる。

「ずっと、ずっと……探していたの！」

感激で言葉にならない、そんな感じだ。

私達が恐ろしいほどの緊張と警戒で動けず、口をつぐみ事態を静観する中、彼女はいてもたってもいられないとばかり喋り始めた。

「あ、ごめんなさいっ 私は、ミチル。フェリユシオン国王の要請を受けて、今活動しています。えっと、一応聖女とか、神子って呼ばれているの。あ、これは周りが勝手に……全然そんなじゃないの。ただ、悪いものを払う力があるだけ。あ、ごめんなさい。私あなたにずっと会いたくて、探していて、嬉しくって、うまく言えない」

奴は黙って聞いている。

その目には何の感情の揺らぎも見えない。

何を思い、何を感じているのか。

傍目に伺うことはできない。

そのことが、ぞっとするほど恐ろしい。

私こそ、うまく言えない。時々、私は、奴の目に、『人』が人に見えていないのではないかと思うことがある。

今まさに、そんな風に思えた。

それを思い出してしまったことが、たまらなく恐ろしかった。

だが、もし魔法使いの推測が真実であれば、この恐ろしい生き物が、『敵』になってしまうかもしれない。

あの目で、自分が見られたら。

その時、私は

「私達、魔族との戦いを本当は望んでいません。でも、たくさんの人が傷ついて、私はそのことを許せないの。本当は哀しいことだと思っっているけれど、どうしようもないから。せめてこれ以上傷つく人を見たくないから。でも、私ひとりじゃ、力が足りない。だから、お願いです。大陸の勇者よ、私達の仲間になつて。力を貸してください！！」

彼女は勢いよく頭を下げた。

説明下手だと思うし、独りよがりにつっ走っていると思う。だが、真摯な態度だ。

迷いのない、全身全霊で平和を願い、その実現のために、人々の力を借りようとしている。

一切の躊躇もなく。

一切の。

なんだこれは。

茶番か？

全身、氷水「こおりみず」に浸かったように、痛みと寒気が私を襲う。おこりのように、全身が震えてくる。喉が痛い。ひりひりと、焼け付く怒りで血反吐を吐きそうだ。

姿かたちが変わっていても、私には分かった。『あの女』だ。

神よ。

答える。

お前の。

神子とやらは。

何の迷いも。

何の後悔も。

なにひとつとして。

わたしたち（いけにえ）のことなんて。

なにひとつ。

覚えても。

いないのか？

たくさんのひとが。

傷ついた。

たくさんのひとが。

悲しんだ。

本来、その咎とがを、負うべきでなかったひとびとが、その負債を背負ってくれた。

私は、彼らに。

なにひとつ、報いていないというのに。

「……けるな」

熱の塊が喉を突き抜ける。

警戒に、異界の神子、ミチルのパーティーの連中が、ざっと布陣を引く。その中に、一人女性も混じっている。

彼らは、皆『洗脳』されているかもしれないし、あるいは自分の意思で神子に共感したのかもしれない。

その彼らは、私に敵対意思ありと見て、いつでも攻撃できるような態勢に移行している。

私は弱い。最弱だ。だが、知ったことが。

「ふざけるなといった。クソ神子が」

淡々と、呪詛を飛ばした私に、ライオンに似た朱金の髪の男が形相を変えた。

「クソあま。てめえ今なんつった！？ 殺すぞ！！」

あまりの殺気に、しり込みしそうになるが、殺されたっていい。

今いわずして、いつ！！

「部外者は黙ってる！！！！！！！！」

一喝した。

私のあまりの剣幕にか、ライオン男は一瞬息を吞んで、何か言い返そうとしたところを、仲間の金髪の男に制される。

「君は、勇者のパーティーのメンバーかね？ ああ、先にこちらが名乗るべきだったか。私はフェリユシオン第一王子のアーサー・フェ

リユシオン。聖女の後見人でもある。君が聖女をいわれなき誹謗中傷で貶めるようなら、こちらも黙ってはいない」

私は緩慢に、その男に視線を向ける。

「ならば私も名乗りましょう。私はアリア・ウィルド。トンレミ村出身、ただの村人です。でも、本当の私の名前は大沢明日香」

何を言っているんだ、この女は、という露骨な雰囲気蔓延する中、神子だけが、その大きな目を更に見開く。

「え、あなた」

「黙れ。今、私は、その殿下と話している」

ひっと神子が悲鳴を飲み込むと、男達は彼女を引き戻し、殺気交じりに円陣を組んだ。

「ねえ、こいつ、殺していい!？」

小柄なエレボスの賢者の服装をした少年がいうが、やはりフェリユシオンの第一王子がそれを止めた。

「待て。今、話をしているところだ」

「殿下。感謝いたします」

「感謝するか否かは、話の後だ。まずは聞こう」

理性的な人で助かった。しかし、彼の目にも間違はなく敵意が浮かんでいる。

「信じがたいかもしれませんが、私を含め、無数の異界人がこの世界に望まずして放り込まれました。中には、望んで来た者もいると聞いています。その際たるものが、その神子です。彼女が、ここに来るために、私達の世界では犠牲を強いられました。望まない者まで、全て一緒に、時代も、場所も、ばらばらに、この世界に投げ込まれたのです」

「……」

「放り込まれた人間の末路は悲惨でした。彼女に与えられた特別な力。どこから来ていると思いますか？ 一人の人間の絶対なる幸福特別に恵まれた容姿、力。全て無から生み出されるものではありません。代わりに供物が、犠牲が強いられました。彼女以外の異界人

他にも、それぞれが、怒りを表明し、手に手に武器を構える。実に異常だ。

脳みそが腐っているとしか思えない。

言葉は何故ある。

「ミチルは悪くない」

「タクマっ」

うわあつと彼女は黒髪の少年にすぎる。

そうか。

謝りもしないか。

「自分勝手に、人に責任をなすりつける。どうしようもない人間だ。僕も転生者だけれど、君のことは醜いと思う」

一人の白髪の男が進み出て、告げた。その目は爬虫類を思わせる金色だ。

「理解が得られなかったことを、残念に思います」

私はそう告げ、後ろに下がった。私には私の仲間がいる。

彼らが、下がれ、と合図してくれた。鈴木は黙って私に譲ってくれた。彼女の方がよっぽど言いたいことがあつただろうに。

気がつくくと、足が震えすぎて、平衡感覚がおかしい。

たくさんの人間の悪意と殺気を真正面から受けて、私は今更心臓がきりきりと絞られ、吐き気と眩暈を催していた。

ふと、その私の肩に手がおかれる。

「あーちゃん」

奴は笑っていた。

どこまでも、暗く、光のない目で。

魔剣

実におかしなことだが。

目の前に憎悪の象徴がいて、それにうらみつらみを吐き出しておきながら、私は酷い気分の悪さに襲われていた。

神に、異世界　物語の世界に連れて行って欲しいと願った彼女は。

私の頭の中で何度も何度も惨殺された彼女は。

私の憎んだ以上に、あまりにも。

あまりにも、こども、だった。

明確な悪意などない。

ただただ、浅はかなのだ。

もっとと冷徹で、もっととはっきりと誰にも分かる『悪』であったなら、こんな消化不良の自己嫌悪するかのような思いにさいなまれはしなかっただろう。

だが、現実には、彼女はあまりにも子供だった。

震え、泣きつくその姿は、愚かで思慮のない十代の少女でしかない。

ただ愚か。ただ想像力がない。それだけなら、日本のどこにでも溢れていただろう。そのことをもって、その結果をもって、これを責め立て、なぶり殺す？

どれほどとち狂っていいようが、悪意のない子供を、ただただ怒りの赴くままに痛めつけたいと思えるほど、私はもう若くなかった。

その浅はかさと思かさが、現実にもたらした惨禍と、とても等価ではないのだと。

私は、最初から。

分かっていたのに。

現実には、彼女を目にするまで、きっと私は信じたくなかった。もつと全身全霊をかけてうらむことができる酷い存在なのだと信じていたかった。

そう。

私は恨みたかった。憎みたかった。

この怒りをぶつけ、ぐちゃぐちゃに彼女を痛めつけたかった。

でも、その対象が、こんなにもこどもだなんて。

憎むにすら値しない存在だなんて。

それこそ、神は残酷に過ぎるだろう。

だが、もう賽^{さい}は投げられてしまった。

その責任を。

私は、取らなければならぬ。

彼女が死ぬさまを、見なければならぬ。

大人が、よつてたかつて、無知でどうしようもない、でもいつ変わるかもしれない可能性を持った、その愚かな子供を蹴り殺す光景を、私は見なければならぬ。

そうすることを、許した。

だから。

もう後戻りも、同情して己を誤魔化すことも。

私には許されないのだ。

見たくないから。嫌だから。そんな理由で、自らの責任、その結果から目をそらすことを、『大人』は許されていないのだから。

そして多分、私は、ずっと。子供のままでいようとしていたのだと。

もう、それを止めなければいけないのだと。

痛いほど、感じていた。

「あーちゃん」

肩口に、奴の指が食い込む。

「いいんだよ、あーちゃん。見たくなかったら、眼を瞑ってたらいい

「戦く私に、奴はいう。」

「汚いの、俺だけでいいもの」

奴は穏やかに笑っていたと思う。咄嗟に返す言葉を失って、馬鹿野郎と怒鳴りつける前に、しびれを切らした賢者が、浅はかにも室内で攻撃魔法を放つ。

それを奴は剣の一閃で叩き落し、いや消滅させ、

「弱いもの苛め、あんまり好きじゃないんだけど」

恬淡とした口調で一言呟き、敵陣営の短気な連中の理性の糸をぶつた切ることに成功していた。

「なめるなああああつ」

血管が明らかに数本ぶち切れたらしいライオン男が飛び出す。

魔法使いが焦った声で、「馬鹿者どもめが！ 通常空間で戦術級は止める！！ くそ、致し方ない！！」と何か印を切つて、叫んだ。

英雄と。呪われし者がここに集った！ 彼らにふさわしき舞台を！！ 選定者アズールが、神々に要請する！！！！！！

選定者アズールの要請を許可する。

恐ろしい、地を這うかに思える声が聞こえた。

その時。

濾紙ろしの端を火であぶったかのように、めらめらと世界は端より青白い炎で燃え上がった。

一瞬にして、全ての色が反転した。昼間は夜へと書き換わり、質感は平面へと。

めくりあがり、現れた世界は、

「……は!?」

もとの下宿ではない。のっぺりとした荒野。地平線は遠く、どこまでもどこまでも果てしない無限の虚空。

黒く、灰色にねじれ、原色の絵の具で塗りつぶしたかのような厚塗りの空。

異様な大きさの月が、今にも落ちてきそうに世界を覆う。

寂しくて、荒々しくて、何も無い。同時に荒野がねじれるように身悶え、ごうつと突風が吹きつけた。

「古来より、神々の代理戦争の最終決戦はこの地にて行うのが決まり!!! いかなる破壊も世界に影響は与えん! 思う存分やるがい!!!」

やけくそのような叫びとともに、魔法使いは精神力を使い果たしたかのようにどつと荒地へと座り込んだ。

「ああ、よかった。俺、加減するの苦手なんだ」

奴の声が遠く聞こえたか、聞こえないか。

鼓膜がおかしくなるかと思うほどの大音響がし、巨人の足跡のような穴がいくつもいくつも大地に穿たれる。

ぱつと、二つの影が後方へと飛ぶ。

ライオン男は、全身の毛を逆立て、その腕に賢者の少年を抱きかかえている。

白髪頭の爬虫類男は、信じられない、と馬鹿のように繰り返した。

「なんだっ お前!!! お前はなんなんだっ」

その面は紙のように白く血の気を失って、傍目にもびっしよりと汗をかいている。ぎよろぎよろと爬虫類じみた目が焦点を失いながら、

「ありえないっ僕は! 白竜族なんだぞ!!! ぼくはっ 誰よりもつよいんだっ」

そう狂ったように叫び、彼は絶叫しながら飛び掛った。

「馬鹿っ 止める!!」

ライオン男が焦って制止の声を上げるが、遅かった。

奴が、白竜族と名乗る白髪頭の剣を受け止め、それは全身全霊の力であったために、奴の剣を叩き割ることに成功する。

「みるっ やった、ざまあ」

みる、と続けることはできなかった。

「いやああああああああああああああああああああ!!」

神子の悲鳴が荒野に響き渡る。

白竜族の青年は、縦半分に裂かれていた。どう、っと地面に右半分と左半分が分かれて倒れ落ちる。

「な、何が起こった……」

参戦していなかったフェリユシオンの第一皇子が、動揺するまいといて、隠しきれぬ震える声で問う。

「剣は、折れていた。そうだろう」

自分に言い聞かせるかに彼が誰ともなく問うと、魔法使いが答えた。

「あれに、剣など意味がない。鉄の塊も勇者の剣も全ては力を加減するためのもの。剣は奴自身だ」

魔剣の定着、まさかここまで進んでいたとは、と魔法使いはむしる苦々しげに吐き捨てた。

意味が分からない。

あれは、圧倒的というより、もう別の生き物だろう。

白竜の青年も、ライオン男も、決して弱くない。素人目にも、彼らが達人を通り越して、サーガ級の實力の持ち主であることは容易に推し量れる。

その彼らをして、あれほどたやすく蹂躪してみせる奴は、本当に人の精神状態を保っていられるものだろうか？

「止めてええええええ!! ユーリー、止めて!! それ以上力

を使っちゃだめえっ！！！！！！」

神子がライオン男達の前に身を投げ出し、両手を広げて彼らをかばう。

「私は、私はっ 皆を死の運命から救うためにきたのっ アーサーを死なせないっ ゴルドーも、オルカも！！ 何より、ユーリー！ あなたを！！！！ あなたはこれ以上、その力を使っちゃ駄目なのっ 心が、心が飲み込まれてしまう！！ 魔剣に食い尽くされて死んでしまうのよ！！！！！！」

彼女の必死の叫びは、嘘ではなかった。

その真摯さは、真実のものであった。

だが、相手が悪かった。

奴は、不思議そうに、それこそ異物を見る眼で、彼女を視界に納め、

「ならないよ」

一言告げた。

「えっ」

勢い、ぽかん、とする彼女に、奴はいつそ無邪気にすら思える笑顔を浮かべる。

「魔剣に飲み込まれたりなんか、しないよ。だってあーちゃんがいるもの」

ざわつと全身に鳥肌が立つ。奴の目は、笑っていない。なんだあれ。なんだあれは。

「皆生きているのか死んでいるのか俺の妄想なのか分からないけれど、あーちゃんは生きているもの。あーちゃんは俺じゃないから、だから俺は大丈夫。飲み込まれたりなんかしない」

断言する奴に、神子は次第に驚きから困惑へ、困惑から怒りへと顔色を変える。

「そんなはずないっ ユーリーは、ユーリーは、前世でとっても哀

しい運命に翻弄された人なの！！ 現世でも、その呪いの、魔剣の呪縛が断ち切れなくて、苦しんでいるのっ 全然大丈夫なんかじゃないのっ あなたは、感情がわからない。愛することを知らない。だから、私が、」

私が救ってみせるから！！！！

彼女は迷いを断ち切り、決意に満ちた表情で、祈りの形に手指を組む。

「まずいつ」

魔法使いが声色を変えた。私も何かを叫んだと思う。分からない。誰の叫びで、誰の悲鳴なのか。

「『浄化』！！！！！！！！！！」

薄暗くどこか絵本の中のような世界に、光が満ちる。奴の表情すら、私には見えなくなつた。

哀しき者

「『浄化』……！！！！！！！！！！」

世界は白濁し、光に包まれ、

そして。

光は収束した。

「……っ あ。 あ」

じぼり、と口から血を吐き出す。

どうして、と問う。

背後から刺し貫かれ、その鋭い剣の切っ先が、容赦なく、ぐっと再度押し込まれる。

「あああああっ」

私は。

彼女を、そう、彼女を。

神子パーティのメンバーだった、影の薄い女を、呆然と見詰めていた。

「み、美津、子さ、ど、どして？」

神子はわけがわからない、とばかり、嗜血と共に尋ねた。

ぶるぶると震える腕で、美津子と呼ばれた女性は答えずに剣を押し込んだ。

「あああああああつ」

絹を裂くかのような悲鳴が虚空に響く。

彼女は、美津子は、蒼白の頬にただ静かに涙を流していた。

誰もが、言葉を発することができなかった。

動くことすらも。

異様な雰囲気にも包まれる中、ようやく動いたのは、ライオン男だった。

その豪腕が、容赦なく女性を弾き飛ばす。

鈍く、骨と肉の断裂する音がして、彼女は地面に受身すらとれずなぎ倒された。

「このアマアツツ！！！！ ミチルに、化け物の姿から救ってもらいながら！！ 恩を仇で返すたあああどういうりようけんだあああああああああ！！！！」

「ゴルドー、それどころじゃないっ 剣を抜いてくれっ 急速回復をかける！！！！」

「お、おうっ」

しかし。賢者の少年は、勢いよく噴出した腹腔からの血に、顔色を失った。

「くそっ 回復を受け付けない!!! 何故だ!」

彼は必死の形相で回復呪文を唱える。

「くそがあああっ この女、殺す!!!」

ライオン男が絶叫し、更に彼女を痛めつけようとした時、

「……止める」

それを止めたのは、フェリユシオンの第一皇子だった。

「アーサーっ てめえっ 何故止める!!!?」

「……」

「てめえっ ことと次第によつては、お前をぶっ飛ば」

その喉もとに、フェリユシオンの第一皇子は剣を突きつけた。

「……ッ!!!?」

ライオン男は挑発はしたものの、まさかの事態に思考が硬直したらしい。

フェリユシオン第一皇子は、その目に酷く冷静な光を浮かべている。

「……疑問に思わなかった。そのことを、疑問に思う」

「ああん!?!」

「『大陸間盟主の環』。発動してはならぬ」

「はあっ!?!? 何を言ってやがる!?!?」

噛み付くライオン男に、第一皇子の表情はあまりにも真剣だった。

「あれは、発動を前提とはしておらぬ。発動せぬことをこそ、最大の抑止力とする、見えざる均衡装置だ。発動した時は、人も魔族も泥沼の戦争しかない」

ゆっくりと、彼は剣を下ろした。

「我が妹の戦姫の血気盛んなことは以前よりのこと。あれが賛同し、声高らかに主張したとしても。私は。国王は。いなし、止めるべきであった。あるいは、そのはずだった」

しかし、と彼は恐ろしいまでに思いつめた目で続けた。

「何故疑問に思わずに。我々は賛同してしまったのか。また、各国は何故、受け入れた。魔族のたずなの取り方は心得ていたはずだ。お互いの領域を侵さぬ。デメルテの壊滅も、血みどろの報復戦を始める前に、調査を行うべきであった」

そして、何故と、彼は自問するかのように。

「今、何故、そのことを。疑問に思うのか」

もう遅い。何もかも、遅きに失した。

その絶望と後悔の声色は、本物だった。

白雪が美津子の治療にとととと走って駆けつける傍ら、不意に、鈴木がぽつんと呟いた。

「 EXスキル」

彼女の師匠である魔法使いがうなずく。

「で、あるう。ウィルドよ。お前のEXスキル、とんだダークホースのようだったな」

EXスキル『説得』

交渉有利にはならない。自らの言葉でもって、洗脳者へ直接に対話可能。条件達成時、洗脳解除。

私の言葉は、届かなかったわけではなかった。

わずかな輝ひび。

矛盾を感じる心に鎚を穿ち、何度も叩きつけ、やがて。

彼らは、疑問を浮かべ、彼らの心のままに、行動に移した。

その結果が。

美津子という女性。

彼女は、『災い』の核だったのだろう。神子の浄化の力によって元の姿に戻り、そして意思を奪われた。

彼女は感謝すらしたかもしれない。

何もかも。

勘違いをしていた。

神子？

違う。

そうじゃない。

そうじゃなかった。

『災い』。

その哀しき存在。

宇宙の果てより来る者^{きた}。

選定を受けてより、初めて、私はその悲鳴を耳にした。私のスキル固有の効果ゆえか、その声が私には痛いほどに聞き取れる。

私は、驚き、あまりの惨さに、ひざ折れた。

「……嘘」

何故、分からなかったのか。

何故、気づかなかったのか。

あれは、最初から。

泣いていた。

悲鳴を上げていた。

私は、彼女を知っていた。

知っている。

だってあのこは、

「……ゆ、雪江？」

雪、お前なの？

どうしてお前が。

私だけじゃなくて、どうしてお前が!!!?

「いったいどうし」

誰かが私に声をかけた。そう思ったその瞬間。

大地から無数の『災い』が沸き出でた。

その触手は、我先にと神子を目指し、彼女のパーティーメンバーに切り払われる。

それでも無数の触手が何度も何度も、狂ったように彼女を目指す。ようやく見つけた、そういわんばかりに。

全ての『災い』の源。

それは、宇宙の彼方より飛来する。

その存在は、数千年前から、確認されていたと。

数千年も。

数千年も!!!!!!

知っているか。

私達は。

時代も。

場所も。

ばらばらに。

ばらばらにい！！！！！！！！！！！

この世界につ 投げ込まれっ

場所を選ばすっ

時にもとの肉体のままっ

死ぬこともできず。

死ぬこともできず！！！！！！！！！！

肉体は、どのような環境下においても、再生される！！！！

雪江。

雪。

私の、妹。

お前は。

まさか。

私だけじゃない。お前が、まさかっ

こんなの、ないだろう。

神様よ、お前が憎い。

お前を殺してやりたい。

ありがとう。

こんなに、こんなに、なんの躊躇もなく、憎める存在を。

許せない存在を用意してくれた。

お前を。

絶対に、私は。

異界の陣営、その王将の屈服を認める。

我らの勝利！ ゆえに、大呪法はなれり。

敵陣営の敗北により、罰則ルール適用、異界の神の力を一時的に抑えます。

今こそ、集うがよい！……星はじよ！……！

その姿が恥ずかしいと。
みられたくないのだと。
その悲鳴は！！！！！！

この世界の大地に降り注いだお前の憎しみ。お前の痛み。お前の
絶望。

新たに憎しみと悲しみを生み出して。

異界の神の陣営に勝利しました。

声が、聞こえた。

情報開示請求可能になりました。

機械的なその声は、問うた。

だから、私は、呆然としたまま、尋ねた。

何故、と。

何故、私達が、選ばれた。誰でもない、私達がと！！ 何を基準
に！！！！？

その開示請求は、異界の神の領分のため、不透明な箇所があります。しかし、代理戦争勝利により、下層情報の読み取りが可能です。それでも開示を望みますか？

望む、なんでもいい。教えてくれ。納得のいく理由を！！

異界の神子、鈴木美千瑠。参照します。父、鈴木竜間。母、
鈴木雪江。旧姓大沢雪江。

「！！！！！！！！？」

鈴木？ 旧姓、大沢？

ふと彷徨う視線が、鈴木を捕らえる。彼女は愕然と杖を握り締め
ている。

え？

何？

なん、なんだ？

異界の神は、鈴木美千瑠による世界分岐にあたり、もともと
彼女と『因縁』の値が高い者を選びました。

「……いんね、ん？」

語彙参照。もっとも近い意味の言葉になります。因（原因）
と縁（条件）により、果（結果）はもたらされます。全ての事象は、
それのみにより孤立して存在しているわけではありません。因縁と
は存在の相依性です。

「いみ、が」

要求により、安易表現にレベルを一段階下げます。鈴木美千
瑠の人格形成は、彼女一人によって成されたものではありません。
生来の性質のほかに、周囲の環境など原因と条件があります。

全ては縁よつて起よこります。現象は依存して起よこります。
異界の釈尊べつのがみの言葉を参照します。

これありてかれあり

これ生じるがゆえにかれ生じ

これなければかれなく

ゆえにこれ滅すればかれ滅す

分かりやすい例えに置き換えます。

生 ありて 苦 あり
生 生じるがゆえに 苦 生じ
生 なければ 苦 なく
生 滅すれば 苦 滅す

因縁（原因）より果（結果）は生ず。

これが因果です。

ある因が果を生じ、その果が因となって別の果となり、またその果が因となってまた別の果となる。

子が親となり、その子が親となり、またその子が親となるように。

あなたがたもまたある因に縁って生じた果であり、また同時に別の果の因となっているのです。

因果の無数の連なり。

異界の神は、鈴木美千瑠が縁起する時間線上より、因縁性の高い者を抽出し、あらゆる時代から選び出しました。

たぶん、ほとんど意味が分からなかった。

私は、麻痺した頭で視線を彷徨わせ、再び鈴木と目を合わせた。

「……ようするに、時代も場所もばらばらに、この世界にぶち込まれた私達は、もとの世界においても、存在する時間軸がばらばらであったと。そして、その時間軸は、私の兄の娘である鈴木美千瑠が存在する時間軸線上に彼女とかかわりの深い人間を選んだと。つま

りそういつことですか」

肯定します。

その言葉に、私は。
ようやく理解した。

私のいた時代に、鈴木美千瑠は存在しない。だから、私はこの世界が分からなかった。
物語の世界だと。

しかし、私はどの話なのか、検討もつかなかった。

自分が相当なサブカルチャー好きであったにもかかわらず、この世界にまったく覚えがなかったのは。

これが、未来に生ずる物語だから。

そして、もつとも因縁の深い者。その未来の母親である、雪江。

だからなのか？

そんな理由で。

雪江は。

私達は。

神とは、この因縁よりある程度自由になる存在。ゆえに、未来から過去に干渉可能です。しかし、それは神々の間では禁じられています。歪んだ因果を正すために、異界の神との決戦が可能です。

あなたは。

選択しますか？

呆然と、周囲を見渡す。

いつの間にか、たくさんの人がそこにいた。

知らぬ顔。

やたら筋肉質な女性。以前うちをぶっ壊す原因になった上位魔神。カロン侯爵といったか？ そいつがもってきた映像球に映っていた苦勞していそうな皇族の魔神。

他にも、たくさん。見たこともない人々。

その中より、一人のしわくちやの老婆が進み出て、がらがらと地の底より響くようなたけり狂う大声を上げる。

星ぼしは集った！ もっとも深き苦しみを背負ったものよ、その血縁たるものよ。大地に苦しみを撒き散らしたものの姉よ。ゆえにお前は、その妹に代わって、選定された！ 選択するがよい！ 我は運命の女神。もしお前が選択するなら、この星ぼしの中より、最強の四人！ 異界の神のもとへ送ろう！！！！！！

倒れそうになる。

なんだ、それは。なんなんだそれは。

「あーちゃん」

もう立つこともできぬ私を、奴が支えた。
がくがくと膝頭が震える私に、奴は言う。

「いいんだ。選んでいいんだよ」

それは、どういうことだ。おい、分かっているのか。異界の神と戦えって。なんで、なんで私達が。

あんずるな、異界の神の陣営を打ち倒したことにより、異界の神の力は人が倒すことができるまでに我らが押さえ込んでおる。しかし、我らはゆえに動けぬ！！ 異界の神子は、異界の神がゆるさぬかぎり、決して死なぬぞ。ゆえに、お前たちも解放されぬ。も

し歪んだ因果を、お前の望む形に修正したいと願うなら！

異界の神、力減すれども、ひとのよにはないもつともおそるべき戦いとなるうー！！

百年の時を、勇気あるものたちよ、過ごすこととなる！ あ
るいは千年の時をー！！ 万の時をー！！ お前達は老いず、戦い続
けることとなるー！！ 臆しても恥ではない！ 辞退してもよいー！！
他に自ら行かんとするのであれば、交替するがよい！ あるいは
選択せぬこともまた選択ー！！！！

「だ、だめだ。それは、だめだ」

でも。雪江。

ゆきえ。

どうしたら。

一人の赤髪の大男が進み出る。魔界の皇太子だ。

「外法のもの、アズールよ、約束は守ってくれたようだな。このマ
ツシモ、異界の神とは、相手にとって不足はない。俺はゆくぞ」

ほとんど彼と同じような気迫をもった大柄な赤髪の女性も進み出
る。

「兄上、私も行こう。このドロテア、血がたぎって仕方ないわー！！
ー！！」

鈴木が、蒼白の顔面で、それでもふらつく足で前に進み出ようと
するのを、魔法使いが制した。

「不詳の弟子に代わり、師である私、アズールが行こう」

鈴木は息を呑み、そして、震えるままに一筋の涙を流した。

「お前は待つておれ。スズキよ。お前に魔法の才はない。お前にあ
るのは努力の才だ。ないはずの魔術回路を起こして、焼き切って、
再生し、また焼き切る。そんなやり方では、この闘いは乗り切れん」

鈴木は、ただ働きを嫌がる。何故なら、その魔法の代価は、己の
身体を焼く痛みでもってまかなわれるから。

その師であるアズールは、無言で泣き出した弟子の頭を撫でた。

「ユーリー・ジャバウオック。俺も資格があるなら行くよ」

最後に、奴が進み出た。

相違なし。この四人、間違いなく、もつともつよきもの……！

待つてくれ。

私は、まだ、選択していない。

選択せずにして、彼らを死地にやろうと。

それは、

それは、

でも、私は、卑怯にも。

選択せぬまま、止める、と言えないまま。

雪江が。

だって、

ああ、

「……や、」

止める。

涙で、視界がぼやける。私は、私は、奴へ手を伸ばし、引きとめようとした。

あまりに酷い。

百年の、千年の、万の。

その時を戦い続けるなんて。

誰にも、そんなの誰にも言う資格なんてない。権利なんてあるわけがない。

そうしたら、私は、強い力で抱き寄せられ、言葉を、発することはできなかつた。

その言葉は封じられた。

「……だいじょうぶ」

奴の顔が、こんなにこんなに近いのに、見えない。声が、喉が引きつれて、出ない。

導ごう！… 異界の神のもとへ！…！！

まっ

待ってくれと、言葉は間に合わずに。

彼らは。

消えた。

私は、血の通わぬほどに冷たくなった指先で、痙攣するままに口元を抑えた。

卑怯者。

私は、最低の卑怯者だ。

震えがほとんど地面の感覚すらわからぬほどに達し、しゃがみこんだ私を、聖騎士、ゴンザレスが抱きしめる。

「よしよし、大丈夫よ、信じて待ちなさい。卑怯なのはあたしもいつしょ。あたし、自分が行きますっていえなかったわ」

そう私の頭を撫でるゴンザレスの手に、私は涙腺が崩壊した。

鈴木も泣いていた。彼女も、踏み出そうとして、そしていえなかったのだ。ゴンザレスは二人まとめてその腕に抱きしめる。

百年も戦い続けて、奴は。ユーリーは。正気でいられるのか。

その心は、無事なままに帰ってきてくれるのか。

ユーリー。

ユーリー。

お前に、伝えていない言葉がある。

無事に。

お願いだから。

無事にかえって、お願いだ。

おねがい、かみさま。

全部ささげます。

もうわたしは、しんでもいい。

だから、ゆーりーを。

ゆーりーをぶじにかえして。

おねがい。

おねがiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!

WHO

女神は、その手に一本の錫杖を携え、大地にたたきつけた。隆起する大地より、水がめをもった青白い女が伸び上がり、

これより、一秒の時が、異界の神の元にて七日の時となる。

更に女神が空中に杖を振るう。

残された者たちよ、見守るがよい。

宙から踊るように女達は姿を現す。

その手にそれぞれ、水がめを持つ女達は、上下左右、重力とは関係なく四方に散ると、水がめを傾けた。

ほとばしる水は空中にゆらぐ水鏡となり、鏡面に金色の炎が走る。まるで業火のごときそれは、何かの形をとり、

【一年十五日】

これは。

これは、カウントだ。
愕然とした。

目まぐるしい勢いで、数字は変わっていく。

【一年四十七日】

【一年七十日】

【一年九十一日】

これほど、時が経つのを恐ろしいと思ったことはない。
これほど、一秒の時を重いつつたことはない。

私の一秒が、彼らの七日間。

私の一時間が、彼らの 二万五千二百日。 ほぼ、七十年。

私の一日が 彼らの千六百八十年!!!

私は、震えすぎて合わせることも困難な指をぎりぎり組み結び、
額に押し当てた。

もう、どうすることもできない。

どうしようもない。

ひとの力では、どうすることも。

そんな時、ひとは。

ひとは、祈られずにはいらぬのだと。

神でも悪魔でもいい。

なんでもいい。

お願いだ。

彼らを。

ユーリーを。

お願いだ!!!

どれほどの時が経ったのかすらも、私には分からなかった。

ふと気づくと、茫然自失状態から己を取り戻した鈴木が、まだ目
も赤いままに前へ進み出た。

「このような時に申し訳ありません。いずれか、日本からの転生者、
あるいはトリップ者の方、集まっていただけませんか」

このような時に、いったい何を、と思う。

しかし、鈴木表情はあまりに真剣だった。

「今、ここに正気を保ち続けている全ての転生者、トリップ者の皆さんが集まっていると信じ、お尋ねします。あなたのこられた西暦、こちらの世界に放り出された年代、場所等、なんでもいい、情報を教えてもらえませんか」

意味が分からず、ぽかんとする者もいれば、魔法使い職らしき面々は、はっと顔を見合わせる。

彼らは口々に情報交換し、それぞれの杖を用いて空中に何か書き付けていく。それぞれの名前。

星のようにきらめく名前は、点と点が結びつき、線となり、線と線が二次元をなし、それに更に加わって三次元となる。

杖の先端は光、その光の奇跡は何かの図形　いや、立体の何かをなしていく。

「それぞれの人間を星として、配置すればいいのか」

「これだけの要素では」

「いや、待て、これに　を加えるということだな」

「これに、　を通せば」

「まさか！　おい、これは!?!」

「三次元の　ではない」

「X、Y、Zに、　の要素を加えるのか!?!」

彼らは興奮し、やがて、それは傍目にも、はっきりと、

「立体魔方陣」

鈴木が静かに告げた時、我々は巨大な蜘蛛の巣、あるいは銀河を見上げていた。

その中心には、鈴木美千瑠。彼女とその母である雪江を結びつけ

なのだ。

瞬間的な憎悪の高まりさえも、もう、彼らには、そんなエネルギーなど残っていない。

たかが数十年しか生きていない私でさえも、恨み続けることは己自身を削りとする行為だと、気づいてしまった。

更に長くの時を苦しみ続けた彼らが、それに気づかぬはずがなかった。

これほどの犠牲。これほどの苦痛。

それは果たして、この少女の幸運と、本当につりあっていたのだろうか。

今この瞬間も、戦い続ける彼らの苦痛と恐怖、そして勇気、それらと本当につりあっているのだろうか。

「違う、違うの。あたしは、皆を。皆を救いたかったの。違うの、違うの」

泣き続けるミチルに、もはや誰も関心を払わない。

もういい、と一人が背を向け、また一人が背を向ける。

ゴルドーと呼ばれたライオン男や、オルカという賢者の少年、黒い甲冑の騎士、彼らでさえも、戸惑ったようにして、遠巻きに見るその眼は、これまでの盲目な愛に揺らぎを感じさせるものだった。

「み、皆っ どうして、どうしてそんな目で見るの!？」

「ミチル……」

「嫌っ そんな目で見ないで!!!みないで!!!酷いよ、私、みんなのためにっ 皆のためにがんばったのに!!! がんばったのに!!!!!!」

黒い甲冑の騎士が何か痛ましげなものを見る眼で、静かに一礼すると背を向けた。その後を、ハイエルフの青年が追う。

「どござって、どござって!？」

彼女はさすがのように他の仲間をみやる。しかし、彼らは顔を見合わせ、「わりい……」とゴールドが背を向けた。「ごめん、ごめんね、ミチル。でも僕」と賢者オルカもまた。

「アーサーはっ アーサーはわかってくれるよね!？」

しかし、フェリユシオン第一皇子のアーサーは、「そなたばかりが悪いのではない。しかし、事態はあまりにも」と首をふり、すまぬ、と告げる。

「……酷い。みんな酷いよ。皆自分勝手すぎる!! あたしは皆のためにつ みんなを救いたくて、それなのに、どござって。どござってわかってくれないの。わかってくれないのおおおおおお」

嗚咽する彼女の元に、一人だけ、黒髪の少年が残っている。

彼はそつとその肩に手をかけた。

その感触に、絶望に濡れていた少女の頬に希望の赤みが差し、

「……あなたは残ってくれたのね、あなた、夕、」

振り仰いだ目に、驚愕がよぎり、彼女を凍りつかせる。

「あ、た、たくまっつて、だ、だ、だれ?」

一瞬、声をかけかねるままはたで聞いていた私は、何を言っているのかと思う。仲間ではないのか。下宿先に一緒に訪れていたメンバーの一員だろう。

しかし、ミチルはその目に今度ははつきりと恐怖を宿していた。

「あなた、だれ？ ど、どうしているの？ おはなしのキャラじゃない、し、わたし、あなた、元の世界でも、え、いつか、らいたの？ え、いつからそば、だってあなた、え、だってあたし、あたし、あなた、しらな」

タクマという少年は、そう呼ばれていた少年は、何故か表情が窺えぬ。

私は、ミチルの異常なようすだけでなく、そのタクマと呼ばれていた彼の、尋常ならざるふんいきに気おされ、また周囲の面々が警戒に身構えるのを感じた。

圧倒的プレッシャー。

身体を折り曲げ、嘔吐したいようなその重圧の前に、

礼を言おう。

少年の口から中身が反転し、全ての因縁があふれ出した。

ミチルという愚かな少女、彼女に与えられた絶大なる幸運と能力をもってしても、とうてい代価がつりあわぬ犠牲と絶望。

そのエネルギーはいつたどこへ消えていったのだろうか。

鈴木美千瑠、彼女の母である雪江を主軸とする、たくさんの人々の血と肉と涙で作られた四次元の魔方陣。

その力が封じていたもの。

多分、それは。

今、目の前に。

物語を、閉じる時が来た。

かれらのラストバトル

時は巻き戻る。

導こう！！ 異界の神のもとへ！！！！

運命の女神のはからいによって、姿を消した四人の異種混合パーティは、突如として、崖の大地に立っていた。

暗く蠢きたゆたう暗黒の海の中から、無数の菌糸類のごとく細い柄を突き出し、不安定なバランスの『かさ』を虚空に開く。

その無限の気の遠くなる光景の中に、彼らは出現した。

更に、でたらめのフォルムの塔が、逆さまに空から生えている。

はつとアズールが息を呑んだが、ドロテアが周囲を見渡し、鋭い声を上げた。

「ここは ！？」

事象の地平線。

暗黒の宇宙。

宇宙の地平面。

笑い含みの声が聞こえてくる。

ようこそ、ひとがこられるはずもない『果て』へ。

お前達を歓迎しよう。

「 異界の、神」

ユーリーが静かに呟く。

いかにも。いかにも。

今にも上機嫌に腹を抱えて笑い出しそうなのはいである。

ここは、本来ひとの観測できぬ、到達不可能なたそがれの向こう。

「こんな場所に、本来ひとは知覚も存在すらもできない、はず。しかし アルルヤード上位魔法の塔、あれのおかげか」

アズールが察して呟いた。逆さまに生えるその塔は、時間と空間を彷徨うアルルヤードの塔。その塔は、アズールたちの世界と、この『果て』の世界に二重存在する。そして、同時にこの『果て』に放り出された彼らと元の世界とを、布を縫い合わせるかのようにつなく針でもあった。

この知覚される海や崖、大地、全ては、彼らの世界からみた認識に過ぎない。

かかかかかか！ 愉快ぞ愉快。さあ、わたしに見せておくれでないか。

ひとの限界、超えてみせよ！！！！

白い爆発的な光が、視界をホワイトアウトさせる。

白濁とした空中に、不意にぽつんと黒い染みが浮かぶ。

黒は点から円へ、円から巨大な蕾へと姿を変えた。

「ぬっっ」

マツシモがうめいた。

なんと禍々しい蕾か、それはいかなる花を咲かせるのか。

黒い色が零れ、蕾が花開けと結び解けた。

巨大な漆黒の花びらが、一枚、二枚、と惜しげもなくもげ落ちる。

花弁は大地に触れるか触れぬかの内に、炎と溶け出してたちまち地獄の光景を作り出した。

虚空に浮かぶ黒の花弁の中心、陽炎となって揺らめくそこから、白の指先が現れ出でた。

何かが生まれ出ようとしている。

アズールはぎよっと目を見開いた。

NNン野尾p@絵p@お鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴
呼アン@に尾rんえいrdtyfぎjこp@「」::@亜ぺア鳴呼工
rhblれ』@prk¥-あ09絵bにkねr@krdtふゆ8
位おp@:;!!

産声を上げる何か。

白い翼、臍物、目玉、乳房、硝子質、甲殻、宝石、炎、氷、癩の強い子供が、破壊の衝動に任せてでたらめな材料からでたらめなオブジェを作った。

そんな何かが、産声を上げる。

「実に醜悪醜怪」

「だがそれがよい！」

マツシモとドロテアの咆哮が重なる。

「救われん脳筋どもだ。だが、今はそれも心強い。勇者よ、心の準備はよいか？ 女神ではあるまいが、臆しても恥ではないぞ」

アズールの問いかけに、ユーリーは静かな笑みで答えた。

「もっと恐ろしいものを知っているよ」

だから大丈夫だと請け負う彼の表情には、何の力みもない。

アズールは、ひよっとすると、このひとの勇者は前生ぜんせいでの不完全な記憶が、魔剣と同じく魂に定着しているのではないかと疑った。

エレボスの渾皇子こん。

かつて。

エレボスは「呪術」の国であった。

「呪」を行うためには、その「血」が尊ばれる。なお血は濃いほどよい。それゆえ、血族婚姻が盛んな国でもあった。

また、エレボスの大官貴顕が顕著に気狂いし易いのは、濃縮された血族のせいかもしれず、その気狂いこそ、神霊をよく降ろした一因とも云える。

この「陰」の血は鬱々として、神霊を内に呼び込む。しかして、代々の皇族がその内に呼び込んだ神霊は、

「狂」

であった。

ところで、エレボスには三祀ある。三祀とは、

「星辰」

「月」

「太陽」

この三種の信仰である。「天体の運行」に照らして、皇位も「巡る」慣わしであった。

渾皇子は当時天体の運行の元に朝廷を斜陽の日となった「太陽」一族の出自である。その中でも、他に類を見ないほど古い家柄の「日」氏出身の妃、

「界」

より生まれた。

この界妃は、「太陽」派が衰退し、その重臣の失脚が相次ぐ中、何ゆえか当時の皇帝である遊帝の不興を買って、重刑に処された。

実際、四肢を切断された上、生きたまま塩漬けにされたと云う。

なお、この母の肉を渾皇子は口にしたとも伝承えられる。渾皇子は塩漬けにされた界妃の壺とともに、湿気の多い土獄に繋がれた。幽閉である。

そのまま成人するまで生き抜いたのは、彼の恐るべき生命力のほかに、真実は、力を失った「太陽」派が、高貴な家柄の皇子を生かそうと奔走したのだろう。

だが、それは果たして。

本当に慈悲であったのか。

その地獄は。

いかなるものであったか。

彼の「狂」は、血ではなく魂にまだ定着し、もはや一体となり、離れえぬ。

因業。

彼の最期を思い出す。

たれにも抱かれたことがない。

常人なら発狂しかねない、おぞましい異形の内側に抱かれて、渾皇子は嫌悪よりもあたたかい、と笑った。それほどに彼は魂がひとの温もりに飢餓していた。もはや人でなくてもいい。母のように包んでくれるなら、悪神でも、化物でも。

そうして息絶えた。

なにゆえにか、とアズールは瞑目し、印を切る。

またかつて、アズールは古トリエステに仕える宮廷魔術師であった。

危険人物とされ、主君に逆賊として討たれ、後に冥府より蘇えては、笑いながら彼を弑した。

その王妃に「禁術に習い、衆を惑わし、法を破り、恩人を害し、全てを貪らんとする戒律破りの者よ、お前には永遠の劫火が待っている！ お前の前には救済など一切ないだろう！！」と罵られたその邪法の魔法使い。

だが、今は。

「さあ、来たれ。我が友よ。俺の盾となり、剣となるがよい」

はるか過去に殺した朋友ともでもあり、敵でもあるトリエステ国王。若き頃の姿で双剣を携え、召喚される。

自由自在に敵を呼び出しおつて。いずれ貴様、冥府の深奥に送ってくれるぞ。

古トリエステ王は、苦虫をつぶしたような顔で吐き捨てるが、さあんと双剣を十字に構えた。

「さもあらん。が、いまはその時ではない！」

己の手持ちは自由に使える、とアズールは確認して、浮かべる笑みは、残忍極まりない。

自分の体は自分で守る。攻撃特化の残る三名は、自由にやればよい。

「盾があるゆえ、俺の心配はいらぬぞ。思つ存分戦え」

「言われずとも……！」

火蓋は切つて落とされた。

決着がつくまでは、百の年月、千の年月、ひよっとして万の歳月を。

諦めぬ限りは ……………

かれらのラストバトル（後書き）

たれ：文語的表現。誰。

彼女の選択

今この時も、異界の神と戦う四人を異なる時に置き去りにして。

私たちの前に顕現けんげんしたのは、これもまた『神』であった。

礼を言おう。

タクマと呼ばれていた少年。その彼の中に潜んでいたもの、いやそのものは、視認できない、大きな存在だった。

見えぬ。見えぬというより、色、形、実体を認識できない。しかし、そこに『在る』。

その圧倒的なプレッシャーに、何人が気をやって倒れる者すら続出した。

私は、お前達という異界の神に封じられていたまた同じく異界の神。

s いわば、この世界の、law 「ロー」サイドにもchaos
「カオス」サイド各陣営の神々の立場に似た関係にある。

その『声』に敵意はなく、むしろ私たちに理解すら示す語調であった。

この世界のlaw 「ロー」サイドにもchaos 「カオス」サイドが互いに争うのは、もっとも近い意味で言えば、お前達の世界でいう『揚棄おしり』のためである。

あるいは、止揚しやう、独語で、aufhebenアウフヘーベン。ヘーゲル哲学における弁証法的否定である。

対立する定立テーゼと反定立アンチテーゼの合において、高い段階へ上昇する認識と運動の仕組みを指す。

例えばAという事象を認識する時、Aは蕾であるという古い前段階認識と、やがてものごとくは変動することから、蕾が花となれば、Aは花であるという新しい現段階認識が対立する。

この時、蕾は花によって消えるから、蕾は花に否定されるといえる。

しかし、やがて花は果実となり、反定立であった花という現段階認識ですらも偽であったとされる。

植物のこれらの諸形態は、蕾と花という形態をとる時、互いに否定するが、それすらも否定して植物の真理としてその果実があらわれる時、どの諸形態もこの有機的統一に必然であったと総合シンテーゼにいたる。

定立と反定立は互いを排斥しながらも、より高い段階での総合に至り、またそれが定立となって反定立と対立し、更に総合へ至り、らせん的に発展していく。

因縁果のごとく、途切れることはない。

花は直接原因（因）である種と周囲の環境など間接条件（縁）によって、その果が生じていく。そして、その果もまた新たな因縁となって別の果を生ずる。

存在とは、それ自体によって独立に存在しない。実体は存在せず、ただ相依相関する関係性のみがあるだけなのである。

それを、自性こせうがない、無自性むこせうという。

縁起えんぎとは、存在のその相依存性を指す。

存在は互いに依存するために、それ自体、自性を持たぬ。自性を持たぬゆえに、それ固有の実体を持たぬ『空くう』である。

自我もまた、同じ。

それのみによって自我はあるわけではない。

我によって汝があり、汝によって我がある。

今のお前達に、この意味が分かるだろうか？

この世界もまた、同じであると。

つらなりであると。

次々と投げかけられる言葉は、途中から『神』なのか、自分の思考なのか境がつかなくなる。

頭が割れるように痛い。

この生成消滅する宇宙において、我々『神』もまた一つの前段階であり、対立する現段階から合へといたろうとする。

その認識と運動。

分からない。意味が分からない。そんなこと知るか。そんな壮大な話なんぞどうでもいい。

いま、今　！！！！！！！！

私たちは苦しい。辛い。

自分自身と、その大切な人と、その周囲だけでもう両手がいっぱいなんだ。

それすらも取りこぼして、取りこぼさせられて。

そんなことを許せと。

それを我慢しろと。

お前は。お前達は　！！！！！！

お前達の苦しみは、理解している。

対立する運動において、私もまたお前達の位相に落とされ、
望まぬ業じむをとることを強要された。

しかし、対立において、定立を否定し、私は一部を保存して、
合一へいたる。ゆえに。

お前達を。

もとの世界に戻すこと、可能である。

もとの時間軸へ戻すこと、可能である。

選択せよ。

急に投げられたその言葉に、私たちは、私は、呆然とし、

「か、かえられるの？」

誰かが震える声で呟いた。

「……か、帰れるのか」

ふらふらと前に進み出る者、その場でがくんと、膝をつき、滂沱の涙を流す者。

「……帰りたい」

かえりたい。

「元の、時間に？ 元の場所に、あの日に、帰してくれるのならば……！！！」

帰してくれ。

どうか。

誰かの言葉だったのか。それとも私の声だったのか。

一人、ぱちんと弾けて消えた。

また一人、弾けて消える。

かえっていく。

人々は、選択し、己の時代へと。場所へと。

鈴木が立ち上がり、ゆっくりと歩き出す。ふと、その背後を振り返って、私には見えぬ誰かを見つけたのか、目を見開き、眼球が溶

けて消えるかと思うほど涙を流しながら、ぺこりと頭を下げた。

そして彼女も消える。

皆選択して行く。

そつだ。雪江は！？ 雪江はどうなる！！！？ それにユーリー
たちは！！！？

あんずるな。皆それぞれに選択していく。お前の案じるもの
もまたすでに選んだ。異界の神と呼ばれるもの、戦う彼らもまたい
まこの時、すでに終結しておるのだ。しかし、いま時間の流れは一
定ではない。

よく分からないが、皆無事なのだな。

そうか。

雪江。

ユーリー。

私はもう枯れたと思った涙が再びあふれてくるのを感じた。

すでに、ほとんど人影はない。

皆、選んでいく。選んだのだ。

私は。

私は。

身体こゝろみずの感覚がない。

指先が、氷水こゝろみずに漬かったように冷たい。

帰りたい。

帰らなければ。

ここは、私の世界じゃない。夢の世界にはいられない。

でも、ここは、この世界は、

戻らぬこともまた選択。会いたいものに会いにゆき、決めるがよい。

そう聞こえるか聞こえぬかの内、白い空間の先に、ユーリーが目を見開き、立っていた。

あまりにも唐突な出現、しかし、私はひ、と喉が鳴り、熱い塊を呑み込んだ。

その姿は酷いものだ。

鎧は碎け、再生し続ける肉体はまだ血と肉が弾けている。ところどころ剥き出しの骨。

私の目にどつと熱いものが溢れた。もう見えない。見ることもできなない。

視界がぼやけて、奴が見えない。

「……りー」

声が、出ない。彼が何か言う。しかし聞こえない。

すまない。

ユーリー。ユーリー。

帰りたいんだ。

まだ、何も、何も成してなくて。

まだ、何も、言えてなくて。

後悔して、ただ憎くて。辛くて。否定して。でも否定しきれなくて。

怖かった。

この世界を。

お前を認めるのが。
本当はもう。
ずっと前からもう。

でも、帰らなくちゃいけない。
何もかも放り出してきた。
きつと、多分、

お前に告げたい言葉がある。
でも、もう声が、どうしても声が出ないんだ。

すまない。すまない。

卑怯だ。

私は最低だ。
それでも、私は、

私は、選択した。
そして、願う。

かえ、

ぼやける視界、
最期に、ユーリーが、

笑うのが見えた。

その笑みは。
その口元が。

「

」

『

』

SAVE OR COPY

小野田美津子が帰還しました。

【記憶消去】選択。

T b 宇宙は上書き保存されました。宇宙分岐しません。

鈴木陽一が帰還しました。

【記憶保持】選択。

T b 宇宙は新たに分岐しました。

鈴木雪江が帰還しました。

【記憶消去】選択。

彼女は【 】のため、……同位存在からの未来軸の干渉を観測しました。秘匿されます。T b 宇宙は上書き保存されました。宇宙分岐しません。

鈴木美千瑠が帰還しました。

【記憶保持】選択。

彼女は因果分水嶺のため、T a 宇宙は上書き保存されます。
宇宙分岐しません。

……

…

視界の先で。

ユーリーが笑うのが見えた。

ぼやけて見えぬはずが、

はつきりと。

彼は。

何よりも。

誰よりも。

暗い。

あの、

私が

恐れた

光のない、真っ黒な

「
』
『
」

「
『かえさない』
」

ぜっ
たい。

大沢明日香が帰還しました。

帰還、……エラー。再起動します。

大沢明日香が帰還しました。

帰還、……エラー。再起動します。

大沢明日香、帰還できません。

因果の収束を観測。

A b 宇宙に固定されず。

大沢明日香、帰還できません。帰還選択はありません。

さうしゅわ

「 『かえさない』 」

ぜったい。

全身に悪寒が走る。
背筋がぞつとした。

私は。

私は、呆然としていた。

カエル。

帰りたい。

お母さんに会いたい。

お父さんに会いたい。

お兄ちゃんに会いたい。

雪江。雪江に会いたい。

帰りたい、と選択した。

しかし、身体の軸が一度ぶれるようにして、その後何かに阻害された。

もう一度、もう一度……！！

エラー。

大沢明日香の帰還選択は不可能です。

かたかたと身体が震えてくる。

「な、なんで。どうしてだっ」

帰して。私を、帰して!!

両手を天に伸ばし、すくいあげてと絶叫する。

答えない。

答えない、ない。

沈黙だけがその答えだった。

何かは、遠ざかった。去ったのだ。

もう、二度と。

あ。

ああ。

「あ、ああああ」

気がつけば、奴がぼろぼろの姿で私の目前に立っていた。

その姿は、本当に酷いものだ。

砕けた鎧は、自己修復機能がついているにもかかわらず、中々再生できないでいる。

肉が弾け、肋骨がのぞく。

髪は生乾きの血糊がべったりとつき、頬の裂傷はあまりに無残で目を背けたくなる。

右腕は、ぶらんと不自然に垂れて、多分、腱が切れている。右足もびっこを引きずっているのか、そもそも変な方向に擦れている。

他にも、数え上げればきりが無いほどに 酷い、ひどすぎる姿だった。

私を見つめるその奴の目は、多分、もう、見えていない。

焦点を結ぶことができずにいる。

だから、私が泣いているのも、きつと見えないはずだ。

それなのに。

「ごめんね。あーちゃん、帰してあげられない。それだけは、ぜったい、ゆるさない」

無言でいる私に、奴が左手の指先を震えながら伸ばす。

その指に、指輪が光っている。

息を呑んだ私に気づいたのか、奴は静かに笑った。

「指輪、なんのために無理やりはめたか分かる？ これね、神様の名のもとに、二人を分かつことはできないってアイテムなんだよ」

嫌悪と恐怖で心が擦じ切れる。

感謝が憎悪へと変わっていくその動きが、手に取るように分かる。

「帰れないよ、あーちゃん。俺が絶対帰さない。そのためなら、なんだってする。できるんだよ、俺は」

その震える指先が、私に届く前に。

私は、その手を、思い切り振り払った。

「触るなあっ！！！！！！！！！！」

絶叫した。

帰れない。

帰れない。

帰りたい。

【エルの物語、フェリクション、ヒスパニア、エレボス……中略……アルルヤード上位魔法の塔、アズール事変、いずれかのキーワードに覚えのある方、連絡求む。連絡先は ×××……】

これが始まりです。

さあ、皆さん。

本日は私、若輩ながら精神年齢七百歳超の鈴木陽一が幹事を勤めさせていただきます。

エルの世界の記憶保持者の会、記念すべき第××回目の会合を開催させていただきますと思います。

そこっ 口笛吹くな！！ 俺はっ TSエルフっ娘じゃないっ

あれは！ あれは！！！！ 黒歴史だったんだ！！！！

泣くぞ！ 泣いちやうぞ！！！！ 精神年齢七百歳に思えないとか言うな！ エルフの精神構造はひとと違うんだよおお！！ 若造なのっ 俺若造だったの！！ あれ、本当に目から汁が出てきた……これは心の汗なんだ。そうなんだ……

乾杯。乾杯だああああ！！！！ ハイエルフに乾杯だああああああああ！ デイードリットは正義なんだよおおおおおお！！ でも俺はちがうんだよおおおおおおおお！！！！

ぐすっ ぐすぐす

すみません、陽一さんがインナースペースに引きこもり状態になりましたので、私が代わりに司会を……

先日、『エルの世界』の第一巻が発売されましたね。皆さん、衝撃というか、本当に感慨深いものがあるかと思っています。ようやくです。

まだ読むことができない方もおられるかと思っています。私も……大で初めて『彼女』の原稿を見た時から、発売されることがわかっていたはずなのに、いざ書店に並び、いざ手にとって、読み始めるまでに、時間がかかりました。

でも、読んでよかったと思います。

懐かしい。

とても懐かしいです。

あの世界が憎かった。辛かった。でも、いまは。ただただ懐かしいのです。

あれはきつと本来の世界ではなく、私たちという異分子によって運命が変わった世界でしょう。

この『エルの世界』は、本来の姿なのかもしれません。

我々の世界も、我々というイレギュラーを内包した時点で、またすでに本来というべきか、それとは別の姿になっていることは明白です。ミチルちゃんの例をとってもね。

さて、『エルの物語』についてです。

色々違う部分もありますが、改めて読むと、ああ、これはと思う部分もあれば、こういう改変があったのかと思う部分もあり、興味深いです。

特にリュ皇子……あの方、高慢な魔族の姫という設定だったんですねえ。

【ここでどつと笑い】

ふふ、初期の段階で知己を得て、その苦労っぷりを時々拝見していましたので、笑っちゃ悪いんですけど、正直おかしいです。しかも、エルの婚約者で、正統ヒロインの当て馬にもなれない、かなりモブ雑魚っぽい感じ……まあ、後に実はエルが好きだったけれど、プライドが邪魔して素直になれなかった、という悲恋オチではないかと睨んでいます。彼女、そういうの好きそうですし。っと、脱線しました。

エル、そうエルです。

私は、残念ながら、彼にはあつたことはありません。

この物語では、粗筋にとどめますが、残虐な魔族の侵攻に人々が苦しめられている世界。エルという魔族の少年は、一人『優しさ』の心を持ち、本来殺される運命にあつた亡国の人間の姫を助けてまいります。

この亡国の姫は仲間を募り、分断された人々の輪をつなげて、魔族への抵抗を挑みます。

そして彼女に共感し、魔族を裏切り、人の側に立って戦うことになった魔族の少年の運命は……というのが大まかな粗筋ですね。

二本の魔剣を巡り、過去から未来へ運命の小車^{おくるま}は回る。と、キャッチコピーがなんだかなーという感じですが、この間国際電話した際聞いたら、これ日本側出版社の編集がごり押ししたらしいですよ。あ、またずれました。

ともかく、これからの時間軸上に帰ってくる【記憶保持者】の人もいるでしょうが、今後はこれまでのキーワードで探するのが困難になりますね。

すでに重版かかっているらしいですし。

まあ、相互扶助会の名の、単に酒飲みの集まりですが。

救われた部分はとても大きいです。

できれば、次の会合もぜひ持ちたいです。

さあ、もう一度乾杯しましょう。

懐かしい、あの世界に。残った我々の同士に。帰ってきた我々に。そして、未来軸に帰ってくる仲間！

乾杯！！！！

あなたは。

この物語が崩壊する

可能性のある

枠の外を覗きますか？

YES このまま読み進めます

NO ここでこの物語は終わりです

蛇の足の世界

注意 : 彼らの言葉は、現代語訳となっています。

すが
あのう、すみません。トーノさん。ちょっと相談があるんですが

何。レポートなら見ないよ。調停者試験は、次がもう佳境だからね。

いやあ、そうじゃなくてですね。実はっすね、非常に申し上げにくいんですが

ごめん、凄くいやな予感がする。聞きたくない。

反省の色なし、と。

すみませんすみません。

中略

アー……これはなかなか……見ない現象だな。

きよ、教官、どうですかね。もうメモリーパンパンなんですけど。このままだとパンなんですから。

うん。まあ。よし。いいだろう。これ、移し変えるぞ。

えっ

ええっ

珍しい事例だ。有限メモリーから一つ上の階層に移す。世界分岐にも耐えられるだろう。

ほ、ほんとうですかー！？ よかったー。俺の最終試験首つな
がったー

教官。と、いうことは、この宇宙の果ての限界はなくなるっ
てことですよ？

ある意味な。本来、候補生に与えられた有限の宇宙ではあり

えないことだが、これほどの事例はイオウいわくパーンさせてしま
うには珍しいサンプルだからな。もう少しこの成長過程を観測して
みたい。

ありがとうございます。

うほっ 教官愛してますっ

イオウ。お前は、少し先生とお話しようか。誰が勝手に進化
増進存在に強化プログラムを投下していいと言った？

みぬかれてるっ!?! なんで、あっ アーーーーーッッ

……

取り残された、調停者候補生トノはふと、生成消滅する宇宙の
一つを見やった。

そして、今回の連結におけるデータ参照する。

なるほど。

データ参照下、因果分水領となった少女の母親は、

未来軸において、【弥勒みろく】となる可能性あり。人の世に転生
しながら艱難辛苦を具になめ、末法の世に現れる存在。宇宙の限界
を憂いたか。

ふ、と彼は嘆息した。
今回暴走したイオウの育成宇宙における進化増進存在。
自分の育成宇宙における数々の人格神。

こいつら、全部『ぐる』だな。

下位存在の、限界を突破しようとするそのあがき、嫌いではない。

お前らの目論見どおり、宇宙の果てはしばらく遠いぞ。

更に下位の人間たちは、ある日突然、宇宙の寿命が延びたと観測
することになるだろう。

理由も原因も分からない。
突然の延命。

彼ら『神々』が更に上位存在に気づいていたとまでは言わない。
それは分からない。
だが。

それとも、『こいつ』は気づいていたか。

そう呟いて、調停者候補生トーノは育成宇宙を背に、遙かな時空
の回廊を歩き出した。

A
b
の
世
界

ユーリーは、何かに背を預けたまま、ぼんやりと両脚を投げ出している。

誰もいない。

どこにもいない。

視界も白濁している。

死ぬのかな、と思った。

彼の肉体は超回復ができる。でも、それは、意思の力と連動している。

ああ、でも死ぬわけにはいかないな、とも思う。

あーちゃんとながっているもの。

彼女に酷いことをした。

うらまれるだろう。

一生涯だ。

でも、それでもいい。

その方がいい。

彼女は、もう自分を見たくもないだろう。

かつての世界の妹さんを救えば、恩を売れるかとも思った。

あの時、彼女の苦しむさまをみて、ユーリーはいつそ喝采したい気持ちだった。

あれほどの苦痛を取り除けば、きっと彼女は、自分のことを好きになってくれるだろう。

そのためなら、百年、千年、万年の戦いなど、ちっとも恐ろしくない。

そう思った。

だから、きつと罰があたったのだ。

くださったのは、きっと彼女の両親。

かみさまなんて信じてない。あいつらはただの化け物だ。でも彼女の両親の怒りなら、甘んじて受けよう。

昔、ユーリーは村を出てすぐ行き倒れた。

死ぬかと思つた時、暗い一本道に立っていて、そこに彼女の両親がいた。見知らぬ男もいて、「カーシム」と名乗った。

君は、アリアが好きかい？ 彼女とずっと一緒にいたいと思
うかい？

そうか。どうか約束しておくれ。アリアを守ってくれろと。

この指輪を持っていくがいい。これは、私とフレデリカの魂の力。私たちは消滅するけれど、その犠牲と対価にこたえ、これに神々が力をくれた。

君は、この指輪に因果を結ぶだろう。たくさんの人を助けなさい。世界に奉仕しなさい。やがて来る『災い』をくじき、助け、これに糸を結びなさい。いつか、その降り積もる『徳』と因縁の糸がアリアを不幸から守ってくれるから。

君に、過酷な運命を課す私たちをどうか許してね。いいえ、許さなくていいのよ。でも、どうか、御願ひ。お願いね……

ごめんなさい、と思う。

彼らの願いには最後の最後で答えられなかった。

彼女を、誰よりも不幸のどん底に突き落とした。

俺なんか目をつけられるから、最初から不幸になる運命だったのかな、と唇の端が歪む。

一応笑ったつもりだったけれど、

「何がおかしい」

急に声をかけられて、ユーリーはぎょっとした。

冷たい指先が、頬に添えられる。頤に滑り、また戻り、ばりばりに乾いた血と髪の毛の辺りに触れて、そっとかきあげる。

「あ、あーちゃん、ど……どうして」

視力が回復していない。何故超回復しなかったと後悔が走るが、もう遅い。

気がついたら、全身強く抱きしめられていた。いや、痛まぬようにやんわりと、でも強く強く。

悪寒にも似た震えがユーリーの身体を走る。

温かい。

「ばかなやつ。本当にばかなやつ」

何度も頬を撫でられ、頭を撫でられる。

温かい何かが顔面に落ちてくる。

なみだ？

「痛かったろう。つらかったろう。苦しかったろう。どうして自分で自分を傷つける」

痛くない。つらくない。苦しくない。

それはあーちゃんだ。

あーちゃんを傷つけた。

俺が傷つけた。

「お前が憎いよ。憎くてたまらない。でも、」

ぼたぼたと落ちてくるしずくを、ユーリーは唇で受けた。

「正直に答える。お前は、私に憎んでほしいのか？」

「……それで、あーちゃんの気が済むのなら。すむはずもないけれど、憎んでくれてかまわない」

「……」

ユーリーは模範解答のできた自分に満足した。

でも、ああ、でも。

自分は、弱い。願わずにはいられない。

「……も、もし。もし可能なら。俺、のこと。嫌いに。嫌いにならないで」

小さな子供にもどったように、たどたどしく、それでも言わずにはおれなかった。

かろうじて動く左指先で、感触を頼りに、彼女の衣服の端を握る。指先が汗と血で滑って、うまく握れない。

最悪の憎むべきかたきにもなれない。

そうしたら、たくさんのお雪が落ちてきた。

何度も何度も頬を撫でられる。

「ばかやろう。嫌いに、嫌いになれたら！ なれるわけないだろう。こんなぼろぼろになって、こんな酷い怪我してっ」

「痛くないよ、あーちゃん、慣れてるよ」

「慣れるなっ 慣れるもんか！！ 私が、私が慣れない……こんな

風になるな。私が苦しい。ばかやろう。ちくしょう、責任とれ」

「とるよ。とるから……ごめんね。帰せないから……不幸せかもしれないけれど、苦労させないから……」

途端に、頭を殴られた。多分、大分手加減していたのだろうけれど、とても痛い。

「そういう意味じゃないっ もういい。もういい。私がお前を死ぬほど幸せにしてやるからな。もう、二度と。二度と、こんな目にあわせない」

ユーリーは見えぬ目をまん丸に開けて、それから、本当に心からの笑みを浮かべた。

彼女は、なんて。

なんて、

「あーちゃんは、やっぱりヒーローだ。俺なんかより、ずっと」

もうずっと昔から分かっていたけれど。
そんなこと。

昔苛めていた幼馴染が勇者になって帰ってきた件なんだが、
彼女は、勇者を未永く幸せにしてやったと聞く。
その彼女自身については、また機会があれば。

さいしゅうわ（後書き）

完結しました。

ありがとうございます。

この話は、描写だけでなく、飛ばしてよいと判断した場面も多くカットし、完結だけを目指しました。

そうしなければ、話数が3倍以上となり、完結させることはできなかったと思います。

その点、色々ご不満もあるかと思いますが、ご理解くださるとありがたいです。

途中掲示板の荒ぶりにかなり作者はびっくりしましたが、ここまですべて皆さんの怒りをかきたててくれた魅力的な悪役になってくれたミチル。

最初嫌われ者だった鈴木。

途中影の薄くなった主人公。

何故か妙に同情を得たりユ。

活躍させられなかった魔族勢。

その他たくさん登場人物を、応援してくださってありがとうございます。

こうして完結できたのも、匙を投げがちな作者を励ましてくださった皆さんのおかげです。

その他外伝は気が向いたら書くことがあるかもしれませんが。

（物語の蛇足になる恐れのあるものは、書かない方がよいと考えております）

また、もしよければ、ご感想いただけると嬉しいです。

その際、今後の参考に、最後まで読んでいただいて、誰が一番好きだったか教えていただけると大変ありがたいです。

本当にありがとうございました。

【だそく】

この話のテーマは復讐ではありません。

何がテーマだったかは、読み取っていただけることを願います。
力量不足ですみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776t/>

昔苛めていた幼馴染が勇者になって帰ってきた件なんだが

2011年8月27日19時38分発行